

読者が創る新しい性風俗誌

奇譚クラブ

風俗資料研究

1982年

11

・特集・

珍奇艶笑コレクション研究



◇文献資料◇

湯の町情話・密通・村役場の珍事

昭和57年11月1日発行(毎月発行)第1巻第9号

奇譚クラブ

1982年

11月号

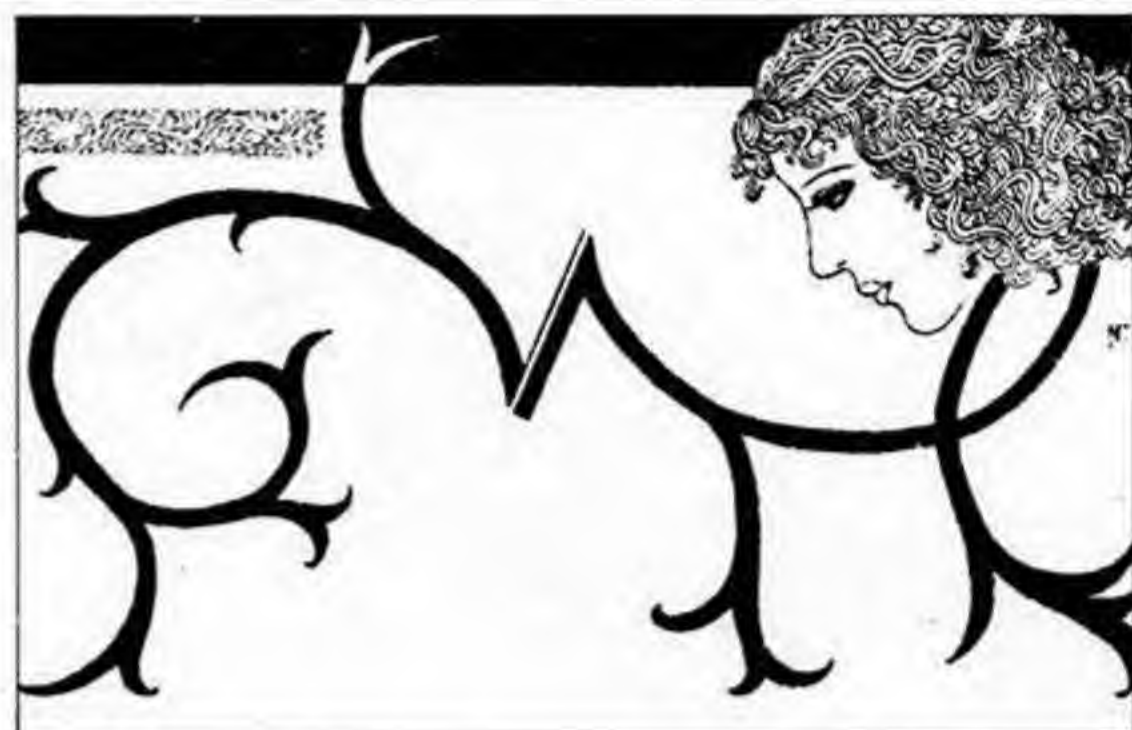


雑誌02805-11

定価1000円

(株)きたん社発行

奇譚クラブ11月号目次



艶笑みやげコレクション	(3)
好色蒐集品	(7)
蒐集狂の話	(16)
奉天の町角	(22)
燃え盡し日々に	(35)
村役場の珍事	(38)
聖経血	(43)
切腹と介錯	(49)
珍妙コレクション集	(52)
甘き蜜の滴り	(56)
伽羅の香	(62)
女大学	(68)
艶色品定女	(76)
密通	(83)
投稿規定	(129)

投稿規定

〔体験・告白・日記など〕

S・M・エネマ・フェチ・レズ、スワップ・トリプル・複数・アニメル・窃視・妊婦嗜好など、本誌にふさわしい異色なものをのぞみます。

創作ではなく、実際に経験、実行したことをありのままに、平易な文章でお書きください。

文章の上手下手は問いません。写真（モノクロ、カラー、ボラロイド）のある方はそえて下さい。

四百字原稿用紙2枚以上（長篇は連載）。

掲載分には規定の原稿料をお支払いします。

文章がニガ手な方は写真だけでも結構ですが、簡単な説明を書きそえて下さい。

〔創作・小説など〕

S・M小説界に新風を吹き込む新人の登場を期待しています。

題材はS・M、フェチなど情念的なもので、既成の作家のものとは異なる作品を歓迎します。

四百字詰原稿用紙で二〇―三〇枚以上です。

優秀な作品は本誌に掲載（長篇は連載）とし、規定の原稿料をお支払いします。

〔イラスト・カットなど〕

写実的なもの、幻想的なもの、あるいはイメージ画ふうのものなど

自由に描いて下さい。

なるべく白いケント紙か画用紙にエンピツ、ペン、筆で。

イラストの大きさは本誌2ページ大ぐらいまで、カットは葉書半分以上大ぐらいまで。

採用分には規定の原稿料をお支払いいたします。

〔文献・資料など〕

文献や資料を提供または譲って下さる方はご一報下さい。

※投稿作品（写真を含む）の返却を希望される方はその旨書きそえて下さい。

先 〒160 東京都新宿区新宿1の7の11
宛 (株)きたん社内 加藤ビル1F
現代芸術研究会

秋

の

女



撮影・伊伊庭一郎

艶笑みやげコレクション

K・T氏 (江戸川区)



艶笑みやげの数々。赤字かかえる国鉄サンも
売出してみても如何？



これが例のニセ札かな？



モチロン、扇子！
これであおげば夫婦
円満間違いなし。

戦前から戦後（30年頃）にかけて集めたもの。
熱海のような有名観光地ほとつまらない
ものが多かった（I・K氏談）



（上）芸術的（？）作品の風呂敷。



（中）愛妻へのみやげは透し絵の桜紙

（下）ユーモラスな手拭い。

へ艶笑みやげ

近頃の旅行が何かモノたり
ないと思っていいたら、そう、
ここに掲げたようなお色気

たっぷりのみやげがすっか
り姿を消してしまったから
なのだ。あやかり団子や最

中は女の旅。男の旅は艶笑
みやげにこそ思い出がこめ
られる。



〈昭和初期の珍本〉

蒐集狂のために作られた趣味本。

発行は東京市本郷区の「いかもの会」とある。

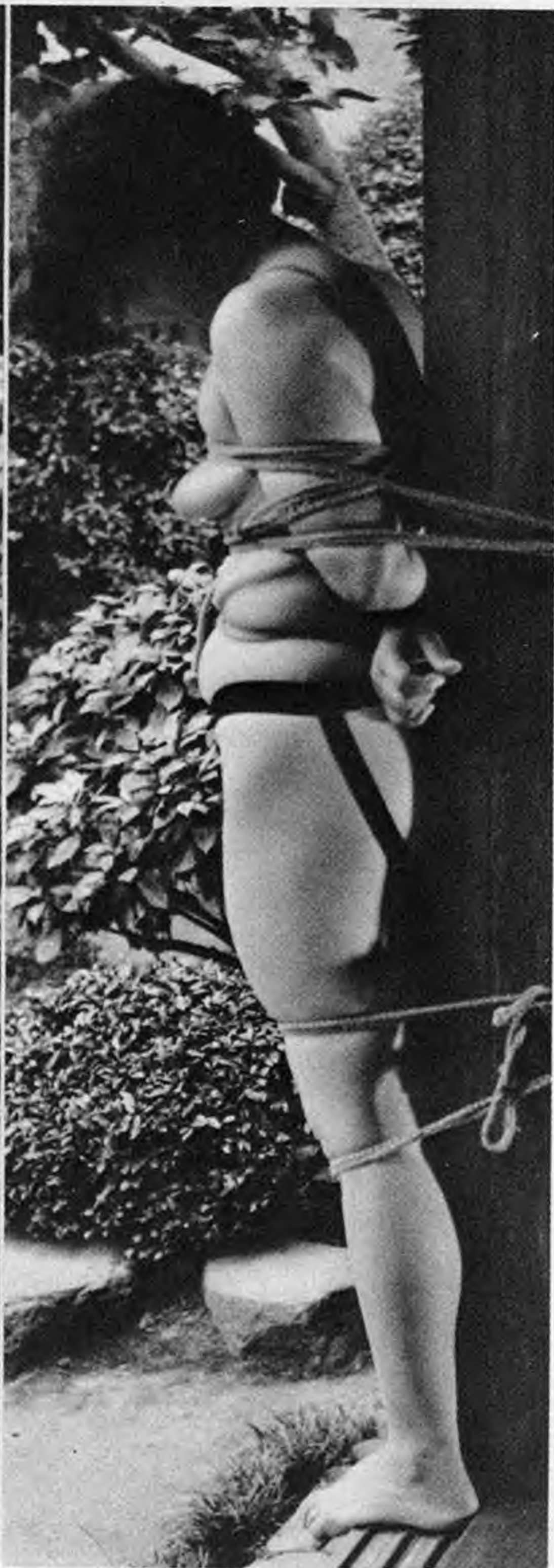
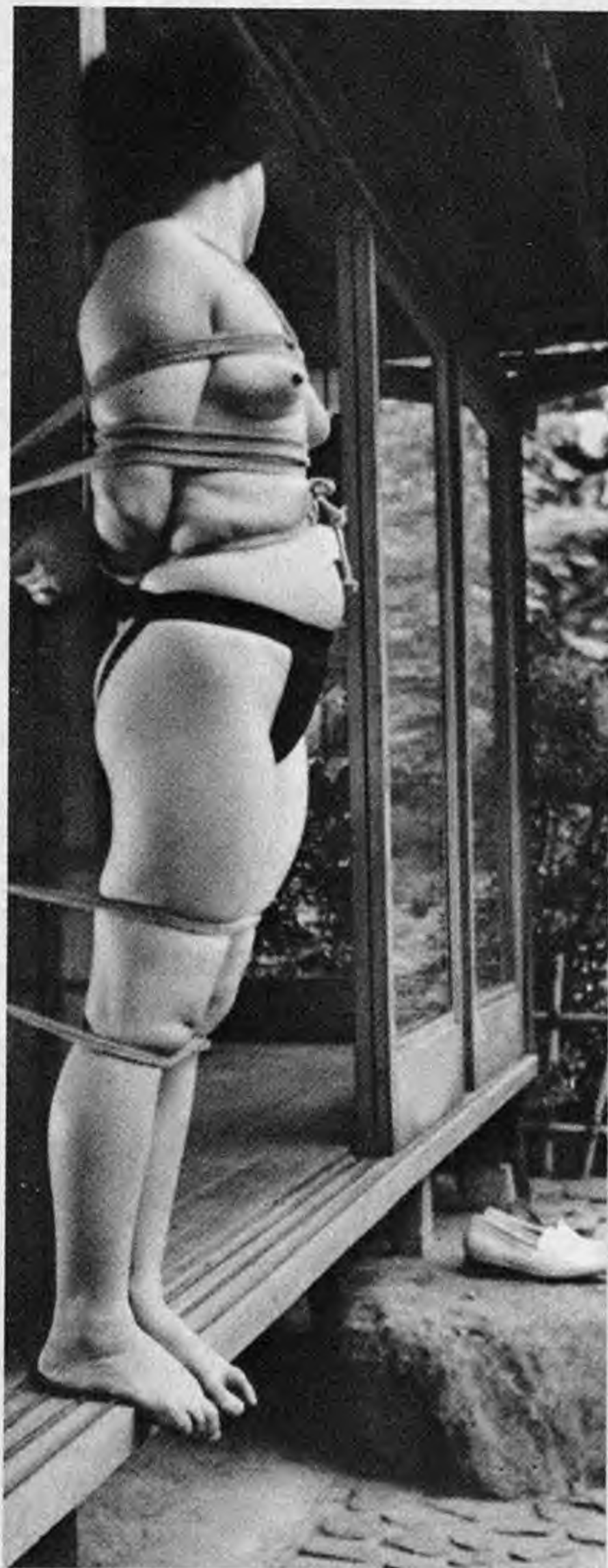
昭和八年に発行された、この
珍妙な小冊子は、全ページこれ
類い稀少な蒐集狂の話。各自、
自慢のコレクションを開陳して

いるのだが、これがほとんどガ
ラクタばかりだから驚く。隔月
発行のガリ版刷り。表紙は木の
皮、揚子を添えて菓子包に見た
る凝りよう。



内容の一部・マッチのラベルか？

特集・懐かしの奇ヲ嬢たち





さるぐつつわをつけたポーズとその点景

モデル 春丘リル





高 島 田

男性として生れながら十年余りも娘として暮し、幾人もの男性と交際し、果ては結婚さえ申込まれた杉江美津子さんにモデルになって貰いこのような写真を撮影しました。



モデル 杉江美津子

好色

趣味のコレクション



足に触れる、二郎は一目見て目を閉じたか上氣して顔が無闇にぼけて来る。「お小母さんの言う通りだなさるんだよ……」と抱き寄せられてどうやら斯うの蒲團にけい上がったが洋服が近くで目映しいと思ううち着物をグツと捲ら

足に触れる、二郎は一目見て目を閉じたか上氣して顔が無闇にぼけて来る。「お小母さんの言う通りだなさるんだよ……」と抱き寄せられてどうやら斯うの蒲團にけい上がったが洋服が近くで目映しいと思ううち着物をグツと捲ら
人だね、其になつて、……そう小母さんを嫌うもんぢやないよ……
向きに寝ながら二郎を抱き、我れと着物を捲り分け恥しがる二郎
の処へ持つて行つた。

た時は毎晩二つは屹度した。今でも随分
つけてしたり、だが此頃では春面を見た
うしたものか二郎を抱き乍ら見た悦
く滑々している。

艶 本

来る、お徳は静かに股
きつて見ると未だ毛
がら濁汚の萌し
く手で扱
そ知ら
ばな



春 画



好色写真



ビデオ・ブルーフィルム
カセットテープ etc



奇譚
クラブ

1982年11月号

Flammarion

イカモノ・この珍妙なモノに魅入られた人々

蒐集癖の狂話



蒐集癖

何が解らぬと云ってある種の人々に
とりついた「蒐集癖」ほど解らぬもの
はない。気に入ったものを集める性癖
と云ってしまったえば簡単だが、これが尋
常一様のことではないのだ。切手を集
める、あるいは刀剣、絵画を集めるな
どと云うのは高尚で、他人が聞いても
感心することが多いが、必死になって
集めているものが、色ガラスの破片、
ビールびんの王冠、避妊具の袋、死亡
広告、ホステスの名刺などといった類
となると、当人以外は首をかしげたく

なるだろう。

ところで、こういう収集癖はどうし
て起こるのであろうか。ある精神病学
者によると、便秘症の者に収集癖が見
られることが多いということだが、別
に便秘症でなくても収集癖はある。根
がケチだから捨てるのがもったいなく
自然と集まるのだろう、という者もい
るが、収集品以外はどんどん捨てる人
もいるから、これも当たっていない。と
すると、これはやはり生れつきによる
のであろうと思う。実際、マッチのラ
ベルや女の恥毛を集めてみたところで

何かの役に立つとは思えないのである
から、これはもう無意識の衝動に駆ら
れて収集せずにはいられないというほ
かはない。

人間には多少とも収集癖があるもの
で、幼児期や思春期にはその傾向が特
に顕著になる。少女なら人形を集めた
り、男子なら怪物めいた玩具などをア
レモコレモと親にねだって集めたがる
ことは誰しも知っていよう。子供の収
集癖は大人に成るにつれて失われたり
それほど情熱を持たなくなっていく
が、大人になってからの「収集癖」は

子供の頃のそれとは関係がないようで、あるとき気がついたら収集狂になっていたなんてことが多いものだ。例えばライターの収集について云ってみると一ツ二ツ持っているくらいなら収集癖があるとは誰も思わないが、これが二〇個三〇個となると、明らかに収集癖が出てきたといえよう。そして、露店や古道具屋などで珍しい型のものや古い物などを見つけて、すぐさま手を出し、ありがねはたいて買い求めてしまうようになる、もう立派な収集狂といえる。こうして、ライターばかり、それもこわれていて使えないものが多いのだが、そんなのを数百個も集めて一人喜んでいる、というのが収集狂の姿であり、その心理はもう他人にはてんで解らないものなのだ。

前述したように、収集する物が絵画や刀剣などの美術品、芸術品なら他人からも尊敬され、羨ましがられるのだが、他人からは見向きもされぬ、あるいは軽蔑さえされかねない物を集める収集狂というのも多いのである。だが、高価な美術品などは実益も兼ねていていわば「収集道」としては邪道である

と断言する収集家もいて、こういう人に云わせると、世にいう「ガラクタ」こそ収集品として最も価値ある物ということになる。因みに、この収集家が集めているのは「蓄音機のレコード針」というのだから、確かに今どき一文の値打ちもないに違いない。一体、そんな物を集めてどうするのか、と云うのは門外漢の云うことで、本人にとっては何カラットもするダイヤモンドよりも錆ついたレコード針のほうが貴重なのであって、その理由を訊かれても当人ですらうまく説明できないに違いない。

こんなことは無数にいる「ガラクタ収集家」にとって常に経験することであって、いったん収集癖にとり憑かれてしまえば、他人の説得などで止めるはずもなく、ただ本人が集め飽きるのを待つしかないのである。

このように収集家はある種の物を集めるのに異常な情熱を燃やすのであるが、その集める品物は多種多様で、集めたい物はすべて収集の対称となるといつても過言ではない。

ここに、「いかもの趣味」と題する

昭和八年発行の小冊子があるので、その多様ぶりの一端を紹介したいと思う。
(巻頭カラー・ページ参照)



通常蒐集品総目録

蒐集の対照となる種目は各人各様、決して一様ではない。さればその人の気持によって世のあらゆる物に向って動く事は云ふまでもないが、今迄、大家小家、有名無名の人達が通常行ひつゝあつた蒐集品を左の分類表としてお目にかける。これから多少なりとも蒐集に興味を持つとうと云ふ人のために。但し、くれぐれも邪道に踏み込まぬやう。また、蒐集品のその一つの目標が定まると、根気と努力は云ふまでもないが、思はぬ助力があつたり、掘出物や拾ひ物があつたりするところに興味がある。最後に最も忘れてはならぬ事は優良なる蒐集方法と整理とを忘れてはならぬ。これが蒐集の一大要素であり、失敗すると一大欠陥となるのである。

一 覧 表

新聞切抜——自分の必要とする記事。

記録的のもの。興味的のもの。題字。

古新聞——古くは慶応年間の頃から

のもの。特別附録。号外。

古雑誌——創刊号。または特殊なものを一通りそろへる。特別号。追悼号。特輯号。

記念号。終刊号。

和本類——軟派物（黄表紙。洒落本。読本。人情本。艶本。赤本。都々逸本。義太夫本）

百人一首本。花柳細見。往来物。童謡訓。祭礼番附。名所記。小唄本。随筆本。道中記。武鑑。町鑑。御役附。

中紙類

方絵図。名所絵図。神社仏閣境内図。祭礼御輿巡行図。城址図。庭園図。御所図。建築物図。案内図。切絵図。田畑図。沿線案内。電車案内。地借証文。賃貸証文。遊女身売証文。身請書。謝り証文。誓紙。色紙。短冊。艶翰。密書。書置。送状。関所手形。手形。感謝状。免状。許し状。扇面。（同刷物）用箋。書翰箋。菓子袋。煎餅袋。菓子の掛紙。名物の包紙。散らし。引札。

小紙類

葉書。封筒。絵封筒。郵便切手。収入印紙。入場券。招待券。観覧券。宿泊券。乗車券。割引券。乗越券。回数券。乗換券。周遊券。渡橋券。渡船券。湯札。テケツ（妓楼、ダンスホール等）。護符。御守。千社札（大小）。籤箋。址占。汽船旅館の

法帖——各種。

一枚刷——芝居番附。相撲番附。見立番附。瓦版。焼跡附。神社仏閣縁起。柱暦。宝舟。神社仏閣御札。祭礼出車番附。祭礼絵。

地図案内図——江戸絵図。東京地図。地

者等のかるた。家族合。
十二支合。

駄菓子——各種。例へば、らくがん、

牛ひ、相撲せんべい。また、
たは、落花生の袋等。

陶器類——栗田、備前、清水、伏見、

萬古、信楽、伊賀、瀬戸、

九谷、今戸、相馬、伊萬

里等の諸国名産地の古陶

器または陶器。たとへば、

土瓶、皿、盃、壺、徳利、

鉢、置物、人形等。油壺。

木片類——門鑑。講札。糸巻。会員

札。表札。炭俵の印札。

流しの札。通行許可証。

箸。揚子。迷子札。

古 錢——上は和銅開珍より下は現

代通用のもの。及び贋貨。

撒錢。内外諸万国に通ず

る石貨、貝貨、陶貨。

石・土器——土器、石器、埴輪に至る

まで。または古瓦。

動・植物——に関するもの。因めるも

の、殊に十二支に関する

立体、平面に及ぶもの等

は自分の生年干支に因む

ためである。十二支以外

のものに、猫、蛙、鯉、

木兎、鯰、河童など多い。

刀剣類——これはあまり上流の部と

なるので除く。

仏 像——三国伝来や推古仏。これ

も右に同じ。

金石類——刀剣などもその一つだが

梵鐘、鰐口、石盥。

墓石類——宝塔、古墳、板碑、古碑

（これは主に拓本として

保存される）

布片類——煙草入。古金襴。更紗。

手拭。納め手拭。袋物類。

印及印影——社寺の宝印。社寺の印。

料理屋の印。名家の蔵書

印。雅印。有名商店の印。

仕切印。三文判。糸印。

役所印（実物及び印影）

花押。

スタンプ——各種記念スタンプ。風景

入局印。駅印。列車印。

汽船印。遊覧スタンプ。

郷土人形——土人形。春駒。こけし。

木馬。えちご。板馬。首

人形。泥笛。張子の達磨、

虎。独楽。天神。福助。

獅子頭。弓矢。羽子板。

姉様。土鈴。天狗面。槍

舩。雛。土塙。鳩笛。撫

牛。おしゃぶり等。各地

各様限りなし。

人 形——操人形。布人形。泥人形。

木彫人形。首人形。首振

人形。わら人形。紙人形

等各地名産人形。

玩具類——犬張子。でんでん太鼓。

ぶりぶり。とんだりはね

たり。起上り小法師。へ

つつい。達磨。ガラガラ。

竹とんぼ。泥面。鉛面、

紙面等数限りなし。

天災記念——臨時出札券。応急布達。

配給票。配給品受領書。

身元証明等、火災、地辱、

水害等の場合に用ひたも

の。

際 物——国勢調査、観艦式、開橋

式、開通記念、落成記念、

何十周年記念、博覧会、

展覧会等の入場券、参観

券、記念乗車券、絵葉書、

スタンプ、招待状、切手
と云ったやうなもの。

ポスター——ポスター、ビラ、引札、
カタログ等々。

その他——サイダー、酒、ビール等
の王冠、糸巻、蔵書票、
メタル、交通券、サイコ
ロ、櫛等々。枚挙のいと
まなし。

といった具合いで、収集品の総目録
を目ざしたものの、あまりの多さに遂
には、限りなし、枚挙のいとまなし、
と投げだしてしまったような有様であ
る。つまり、集めようとしたら何でも
収集の対象になってしまうわけで、道
傍の石ころですら収集品となるのが、
この世界の珍妙なところであろう。

この小冊子には珍妙な収集にとり憑
かれた人たちの苦心談やら収集品の紹
介やらがたくさん載っていて、ガリ版
刷の読みにくさが少しも苦勞にならぬ
ほど楽しいが、なかでも異彩を放って
いるのは、「象の陰茎」と題する「象」
収集家（！）との見聞記で、その収集
家の家では、象の足の傘立てに始まっ

て、スリッパ、チョッキ、お盆、椅子
の脚、花びん、本のカバーなど目につ
いたものだけでもすべて象製品であり、
家宝が二メートルもある象牙であるの
は勿論のこと、象の首が玄関先にどっ
かりと置かれていたというのだから驚
く。そして、最後に出して見せたのが
象の陰茎で作ったステッキ。こうな
るともう象（ゾッ）とするばかりであ
わてて逃げだした、とある。

その他に、趣味亡者の「怪奇蒐集談」
というのが載っていて、こちらのほう
はほんとにゾツとする。因みに全文を
掲せておくので読者もゾツとして欲し
い。

「怪奇蒐集談」

物に愛着を感じ、興味を覚えて、始
めて収集の愉悅に入るのは常態の収集
である。そして、その集められるもの
の多くは、幾多世間の共通であるところ
の燐票（マッチのラベル・本誌注）
とか、切手、絵葉書、包紙、古銭の類
などである。やや軌を逸して、エロ物
にも手を及ぼすが、怪奇となるとそう
ザラにはあるまい。

と申しても世は様々、思ひもつかぬ
グロテスクな物を集めて得々たる自己
満足、独り悦に入っている人々が相当
にいる。

*

*

△黒棒の収集

日々毎日新聞紙上にあらはれる有名
無名の死亡広告を丹念に切抜いて一々
始末をつけて行く人がある。その人曰
く、何時も何時も「養生不相叶」でな
く、外に何とか書いて貰ひたいもの
だ。死亡直接の原因、病名と埋葬の墓
地名、寺名、ついでに願へたら戒名も
結構なんだが、といふことである。

（本誌注・最近の死亡記事はかなり詳
しく載せるようになったが、戒名まで
はまだのようだ）

△自殺・変死・情死の記事

甘い天国に結ぶ恋のいきさつ。生活
苦のどん底、首縊りの木、鉄道自殺、
場所、年令など。更には死亡場所の見
取図、写真など。

△刺青

人間の正真の皮をはいでピンで張っ
ておく。そこまでしなくても刺青を写
真に撮って集めるなどはやはり怪奇と

云へよう。

△蛇、虫類

勿論、剥製から生のままのニョキニョキしている奴。青大将、縞蛇、蝮、錦蛇、蛙、トカゲなどの類。

△グロ絵

いわゆる血みどろ絵。一見凄惨たるもの。幽霊の軸などもこれに含まれる。

△塔婆

八宗はもとより阿弥陀仏でも妙法蓮華経でも、とくに雨ざらしになって痛んだ古いものほどいい。

△生首

といっても本物じゃない。芝居の小道具。そのほか腕、かさねやお岩のかつら。

△どくろ

昔はどくろ杯なんてのがあったそうだが、当今そんなものはザラにない。

△墓石

または板碑など。これは現在なかなか盛んである。また、地藏、水子蔵など手に入れ、その相好などによってそれぞれ珍品に価値づけられる。これに伴って陰陽石の収集も多いが、重いものだけあって、その運搬や取扱いも大

変だ。

△書置（遺書・本誌注）

昔の有名な人々の書置など、辞世と共に保存されているが、さて実物となるとそう手に入るものではない。

*

*

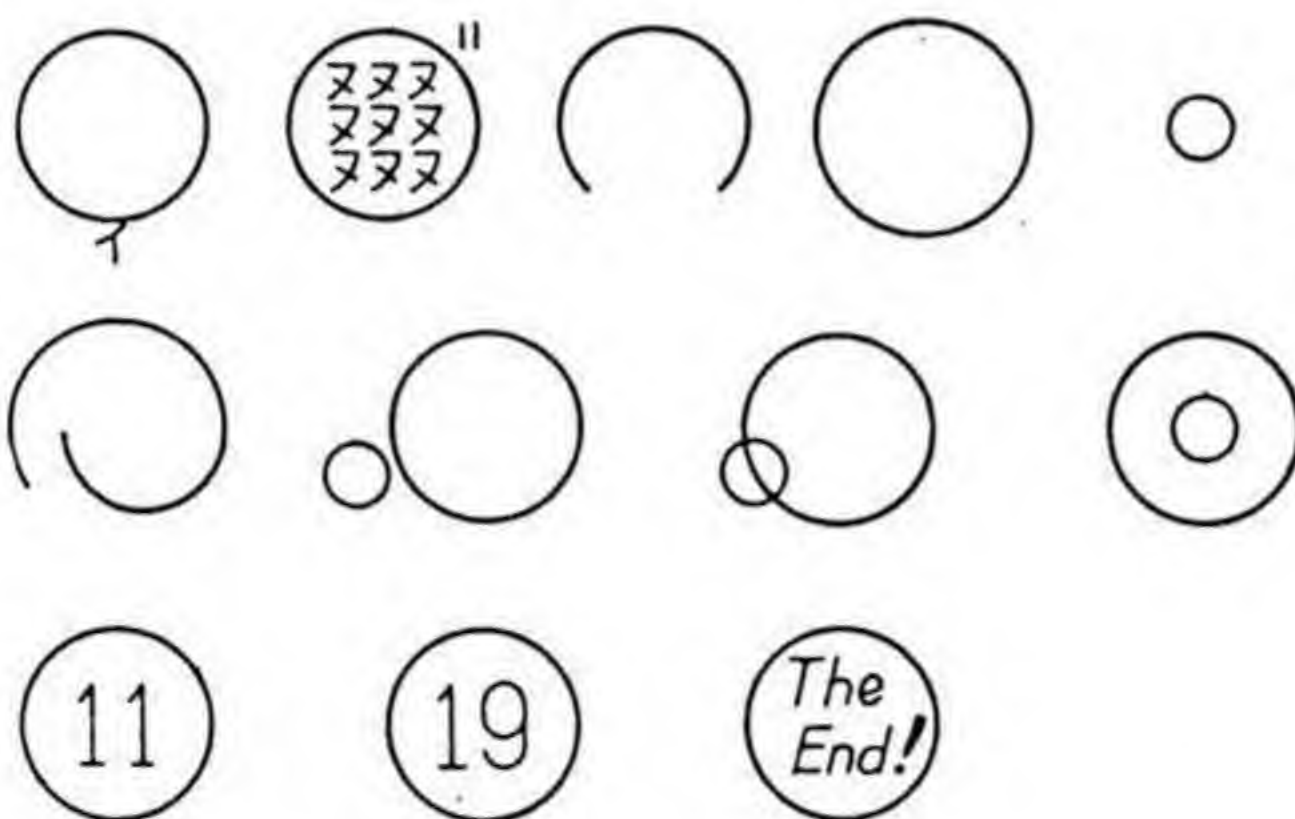
とにかく、文献的な怪奇譚は比較的に楽に集められるが、多少なりとも実物のグロを集めるとなると容易なことではない。好きこそ物の上手のたとへ、道によって賢しと云ふも、穴の穴を行く収集家の精進たるや、その根と精力は、また尊しとすべし。

「いかもの趣味」なるこの小冊子、東京市（！）の「いかもの会」の磯部鎮雄なる人が発行人となって隔月刊行となっているが、どうやら創刊号のみで消滅してしまったようである。まことに惜しい限りであるが、もともとこの小冊子そのものが「いかもの」であったことに間違いはない。

ところで、本誌では「いかもの会」の遺志を勝手にひきついで、「いかものコレクター」の為の会報誌を計画中。全国のいかもの収集家の参加を請う。

判字クイズ

◆左から右へ読んで下さい。
（解答 46 頁）



■春 春 回 顧■

奉 天 の 町 角

青 葉 茂

一

夕方の6時ちょっと過ぎに羊かん5本を土産代りに持って家を出た僕がサダ子（19才）たちのアパートへ行くと、友人の本間君は先きに来ていました。

「随分早かったなア」

「会社から直行したんだ」

「そうか、道理で……。ハイよ、羊かん持ってきたよ」

その頃（昭和十七年の十月）、内地では甘いものが、そろそろ不足はじめていたそうですが、満州（現在の中国東北地方）では、もう少しゆとりがあったようです。それでもサダ子は料理の手を休めてニコニコ顔で僕から羊かんを受けとると、再び台所で君子（仮名21才）とヒデ子（仮名17才）の三人で料理を作りはじめました。

酒一本と、本間と僕がビールが好きだというので、ビールが1ダースばかり並んでいたようですが、本間（愛称ポ

ン）は、その中から2本目を飲んでいるところでした。やや大き目の丸い膳が八畳の間の真ん中に置かれていて、彼は心もち顔が赤味をおびていました。

「サダちゃん、コップかしてよ」

僕の声に彼女は「ハイ」と返事をしてコップを持ってきてくれました。一杯目をキューツと呑み干すと、のどの乾きが止まったようで大変おいしかったことを覚えています。

その間に3人で作った料理が皿に盛られてつぎつぎに運ばれてきました。二人はいつの間にか膳から離れて、お盆とビール瓶を持って窓端に移動していました。

その頃だったでしょうか。見知らぬ男性が一人、のそーっと入ってきました。僕たち2人は「ナンダあいつは？」と顔を見合せると君子が手を拭きながら、

「いらっしやい。そっちで貴方も飲んで。ポンちゃんとおアオさん（僕の愛称）一緒にお願ひ。木田さんっていうの」

「あ、そう。どうぞどうぞ！」

木田さんは目礼だけで口は利きませんでした。スプリング・コートを脱ぐと僕たちのそばへやってきました。

「初めまして僕は本間で、こいつは青山といいます。よろしく」

「木田です、よろしく」

彼は、本間の挨拶につられたかのようにそれだけいうと煙草に火をつけました。僕たち2人は煙草は吸いませんでしたので灰皿はありませんでしたが、君子が直ぐに灰皿と酒ビンを持ってやってくると彼に酒を注いでやりました。

木田はコップを持ち上げると台所の方をふり返って

「サダ子さん、誕生日おめでとう」

といいました。そうです、今夜はサダちゃんの誕生日（十月一日）だったので。僕たち2人は思わず顔を見合せ、おそまきながら

「おめでとう！」

と、おどけた格好で大声を挙げました。

「オホホホ。そこのお二人さん、いま頃になっていうんだから……もう……」

と、いたづらっぽい目で僕たちを見返しました。それから十数分後に女三人と男三人は丸膳に着きました。現在のようになどというものはありません。彼女たちの手料理が丸膳いっぱい並べられていました。

彼女たちも初めはビールを飲んでいましたが、いつの間

にか酒に変わっていました。ところが男女六人（ヒデ子は余り飲みませんが）なので酒が足りそうにありません。僕は社宅まで帰りました。酒が一本あったからです。母は一人で夕食の仕度をしていましたが、僕が帰って来たので驚いたふうでした。

「おや、どうしたんだい」

「うん酒が足りないんだ、一本あったよね」

母は黙って酒を出してくれました。今夜は泊ってくるから、といい残してアパートへ引き帰しました。五分くらいの近距離です。その頃は合成酒が多かったのに、僕が灘の菊正宗を持って行くと

「ワーツ、凄いい！」

と歓声を挙げました。5人とも、赤ら顔で、すっかりご気嫌の様子でした。カンをつけて飲もうというのを、僕はヒヤが好きだからと、ビールを飲んでいたコップで一杯目は一口で飲み干してしまいました。

「アー、凄い。あんたノンベエね」

ヒデ子が、ませた口を利きました。

「それでもないよ、このくらい」

そういう僕にサダ子は酒を注いでくれながら、

「ホントに大丈夫？無理しちゃ駄目よ」

と耳元でささやきました。

「うん判った。あとはチビリチビリね」

そういつて飲んでいた僕でしたが、いつの間にか寝転ん

でいたようです。

「ほら起きなさい。布団敷いたから、布団に寝なさい」

サダ子の声に、ようやく気づいた僕は押入れの傍に敷いてある布団に目を見やりながら這うようにして布団へもぐり込みますと、サダ子がやってきて、

「あら、あら、服のままじゃ駄目じゃない」

と、さも世話女房のように服とズボンを脱がせてくれました。ワイシャツは自分で脱いでポイ。ランニング・シャツとパンツだけで布団にもぐりこむと、そのままぐっすり眠ったようです。

幼少の頃の僕の家は海に近く、そこは川があり家の下が直ぐ川で、夏は石垣から飛び込むこともできました。時折り石垣の間に手をつっこんでウナギを掴まえたこともしばしばでした。天然のウナギは食べようと思えば、いつでもといったところです。僕は、そのウナギを探している夢を見ていたようです。ようやくヌルヌルした感触のウナギを掴まえ、得意満面になったときです。急に石垣がくずれて、僕の手は石垣に挟みつけられてしまいました。ハッ！とした瞬間、夢からさめて次第に記憶が甦ってきた途端、僕の心臓は早鐘を打ったように急に速くなってきました。僕の手はサダ子の太腿で挟みつけられていたうえ、指先きが彼女の大切なところへ進入しているではありませんか。僕は手を抜こうと思いましたが、いたづら心がおき、指さきを除々に動かしはじめました。彼女の息づかいが変化して

いくのが感じとられるのと同時に、辺りは湿地帯のようになってくるのが指先きにも感じられはじめました。

夢中でしたから、それが数分間だか、十数分間だかはつきりしませんが、急に彼女は僕の手を掴みました。もう耐えられなくなって、止めてくれというのでしようが、僕が相変らず指先きを動かしていたときです。サダ子はいままで閉じていた足を急に開くと左足を僕の腰の上に乗せ、グイと力を入れて抱きこむようにしました。僕はいよいよ図にのって指を微妙な感触を楽しむかのように動かしはじめたとき、彼女の後ろのほうで寝返りをうった者がいました。おや、誰だろうと思って彼女の肩越しに薄灯りの中でのぞいてみたら、なんと、それは本間君でした。驚いた途端、僕が手を引っこめると、サダ子のかすかな溜息をつくと足を降ろし、身づくろいをして、僕のオデコを指先きでチョンと突つくと、クスツツと小声を出し、僕の耳元へ口を寄せてきて甘ったれた小声で

「ウーン……バーカ」

といいました。僕も鼻の先でウス笑いを浮べながら、それまで散々彼女の肝心なところを弄んでいた指先きで彼女のオデコを二、三回チョンチョンと突つき返しました。それから間もなくサダ子は布団を抜け出しました。トイレへ行ったのです。トイレは共同で、ドアの外です。彼女が帰ってくると入れ換わりに僕もトイレへ出て行きました。寝る前に行ってなかったので時間がかかりました。窓が開い

ていたので用を足しながら、ふと空を見上げると満天の星が綺麗に眺められたのをいまでも覚えています。

部屋の中は消灯してありますが、カーテンを引いてなかったのも、外灯で部屋の内はウスボンやりながら見えます。僕はトイレから帰るとき、いたずら心が、ふっと浮んできたので、そーっと帰ってきたのです。一番手前には君子と木田のカップルが寝ていたのですが、驚いたことに布団が活発に動いているのです。「なんと厚かましい」と思いますが、素知らぬふりで、ドアを締めました。

真ん中にヒデ子が独り寝ていました。僕が彼女の布団の足もとを這いながら通り過ぎようとして、ふと自分の寝ていた方を見ると、どうでしょう。こちらも掛布団が動いているのです。僕は怒りと驚きで心臓が一瞬止まったんじゃないかと思いました。が、僕がその場にじーっと坐ったままです。サダ子が「ダメダメ」という小声が聞えてくるのです。

僕は飛びかかって行って本間君を殴りつけてやろうと思ったのですが、そのときです、ヒデ子が僕の手を掴んで引っぱりました。思わずよろけた僕は、そのまま彼女の布団の中へ……。

事実は小説よりも奇なりという言葉があります。まして戦中のそんなとき、こんなことがアパートの一つの部屋の中でくり拡げられようとは……。現代なら乱交パーティーなどというものがありますが……。流石の僕も動揺していた

のでしよう、ヒデ子に引っぱりこまれたまま、おとなしくしておりますと、まだ子供だと思っていた彼女が自分から唇を押しつけてきたのには二重の驚きでした。

が、サダ子と本間君のことが気になって、僕はヒデ子の誘いに応じる気には仲々なれませんでした。そのうち本間君がサダ子の抵抗に諦めたのか、こちらへ寝返えったのが夜目にもハッキリ見えました。間もなく彼のかすかな寝息が聞えはじめました。

僕はようやく落着き、ヒデ子を抱きしめてやり唇を重ねるだけで、それ以上のことはできませんでした。

翌朝、僕は勤務の都合で早々にアパートを出ました。一度家に帰って食事を済ませると出勤しました。僕より少し遅く本間君も当然ながら出勤してきました。

「起きたら君だけいないので皆んな驚いてたぞ。どうしたんだい。」

「朝メシ食わんと、オフクロに怒られるから、悪いとは思ったんだが……」

「俺はアパートで、ご馳走になってきた」

その夕方、僕と彼は会社を出ると春日町のビヤホールへ立ち寄りしました。その悦ちゃんやポチャポチャの丸顔で可愛い娘でしたが、本間君に気があったようです。彼と行くときには余分にビールを持ってきてくれたりしました。が、本間君が彼女と深い仲になったことはなかったようです。

本間君の家は奉天（現在の 陽）の花柳街の柳町の一角で小間物屋を営んでいて、可成り繁盛していたのです。その頃、彼には婚約者がいました。

それから二、三日経った土曜日の午後、サダ子から会社へ電話がありました。会社の帰りには是非アパートへ寄ってくれということでした。その夜、本間君は夜勤でした。僕がO・Kの返事をするサダ子は急に甘えた声を出して「きつとよオノ」

と念を押しました。

会社から僕の社宅（宮島町）まで歩いて一〇分くらいで帰れますので、一旦、社宅へ帰ってからサダ子のアパートへ行っても、彼女が帰ってくる時間には充分間に合います。母には本間君の家に行くから、とウソをついて社宅を出ました。その頃は内地と同じ時間になっていましたので、アパートへ着いても、まだ明るかったことを覚えています。階段を昇ると内からドアが開きました。サダ子が帰ったばかりのところだったようです。部屋の中には彼女の他は見当りません。

「今日は他の連中は？」

サダ子は僕の言葉に、ニコニコ顔で、

「今日は二人とも夜勤なのよ」

といいながらハンドバックから財布を取り出すと、お使いに行くから留守番をしててといいながら買物籠を持って出て行きました。

その夜は彼女と二人っきりの差し向いでビールを飲み食事をしました。新婚気分ってこんなもんかなア……。チョンガーの僕にとっては満更でもありませんが、ちよつと変な気分であったことも確かです。

食事が終わると、後かたづけもそこそこに、どちらからともなく抱き合い、唇は齒がカチカチぶつかる勢いなのです。サダ子が舌の先きが痛くなるほど何回も吸うのには参りました。我慢できなくなった僕は、彼女をそこに押し倒すとズロースを脱がせました。

「電気を消して……」

サダ子はそういいましたが、若い僕にそんな余裕はありません。パンツを両手で脱がせると両足を開かせながら膝を立てさせました。女性器を見たい気持ちもあったからです。うっすらとした申しわけ程度の恥毛が、なだらかな丘に生え、谷間の両トビラの内側はピンク色でした。

湿地帯に突入した途端、サダ子は両股でグイグイ締めつけながら腰を動かしました。初めての経験ではなかったのです。まるでセックス熟練工といったところです。そんな彼女に負けまいと僕も頑張りました。終ると身づくろいをしながらサダ子は走るようにトイレへ行きました。

「今夜は泊っていてもいいんでしょう？」

トイレから帰ってきたサダ子は僕に素晴らしいながら布団を敷きはじめました。僕は返事の代りに服を脱ぎ、まだ敷き終っていない布団へ横になりました。

「そうなのよねえ、今夜はいいのよねえ」

彼女は服を脱ぐとズロースも脱ぎ、寝巻きを取りましたが、それは枕元に置き、電灯を消すと、布団へもぐり込み、僕に抱きつきながら、

「おー寒い」

と、足をからませてきました。

「どうして寝巻き着ないんだよ」

不審に思った僕が聞くと、

「だって私の生まれた秋田の田舎のほうでは、裸で寝る習慣になってるんだもん」

「へえ、それでズロースも脱ぐのかねえ」

「ズロースは脱がないわよ。ウン、いじわる」

サダ子が秋田の生まれだったことは初めて知りました。

道理で裸になったときキメの細まかい白い肌が、瞬間的にはあったが、感じられました。僕もランニング・シャツを脱ぐと、彼女を抱き寄せました。彼女の豊かな胸の隆起が柔らかく、何ともいえない甘美な感触が伝わってきました。僕の指先きは、いつの間にか彼女の蜜の中へ進入していました。サダ子は官能の渦の中で、その辺一帯は沸れんばかりに濡れていました。

官能の嵐が過ぎて、サダ子は寝巻きの上から羽織を引っかけるとトイレへ立ってゆきました。僕は彼女と結婚してもいいと思っていたので、そんなサダ子の仕草が不審に思えましたが、彼女に聞くことは止めました。

翌朝、彼女が仕度してくれた食事を済ませると、その足で会社へ出勤しました。

二

彼女と僕の出会いは、本当に偶然なことがきっかけでした。昭和十七年の九月といえば、第二次大戦に突入した日本が、緒戦の大勝に酔い痴れ、それが、やがて敗戦の苦汁を味わう羽目になろうとは、誰もが思わなかった頃のことです。

当時、四年間の大陸戦線から帰還したばかりの僕は、これもビルマ方面から帰還したばかりの本間君と二人で、夜の春日町界隈の飲み屋を、毎晩のように飲み歩いていました。そんなある夜、春日町と浪速通りの交差点近くにある森商会の角で、奉天館の方から若い女の二人連れがくるのを見つけた僕は、

「お嬢さんたち、これからどこかへ飲みに行きませんか？」

と声をかけたところ、二人はニコニコ顔で近づいてきて年上と思われる女性が、

「ハトポッポのくせに生意気いいなさんな」

というのです。一瞬、それが何のことか、

「ナニ？ ハトポッポ？」

とポカンとしていた僕に、本間君が

「ほら、兵隊に行く前の連中、つまり青年学校（正確には少年たち）の生徒たちのことなんだよ」

と教えてくれました。

「へえ、そんなに若く見えますか。それは光栄です。本当は歴戦の勇士で、この間、戦地から2人とも還ったばかりのホヤホヤ」

といいながら僕はかぶっていた正帽を、その女性の頭に乗つけました。その娘はニヤニヤしながら帽子をキチンとかぶり直すと挙手の礼をしてみせながら、

「それはそれは、大変失礼しました」

と、おどけてみせました。そういわれて気づいたのは青年学校に行っている連中の腕のマークがハトが羽根を拡げたデザインだったのです。いつの間にか僕の持っていたカバンを若い方の女が手にもっていました。それがサダ子だったのです。年上の君子は、

「2人とも若く見えるのねえ。今夜は喫茶店も三軒いっちゃったから、もういいわ。明日、出勤が早いから帰らなくっちゃあ、アパートまで送ってきてえ」

本間君と僕は顔見合せて直ぐO・Kしました。彼女たちのアパートは橋立町で僕の社宅からは近くで、本間君の家は、そこから一〇分くらいのところですよ。

初めての若い女性に、こうも馴れなれしく話しかけられたのは、酔いと戦地で鍛えた強心臓からでしょう。アパートへつくと彼女たちは、お茶を飲んで行くように勧められました。彼女たちの部屋は二階の一番手前で、彼女たちが上ってゆくとドアが内から開き、

「お帰んなさい」

という二人よりもっと若い娘が出迎えました。それがヒデ子だったのです。僕と本間君の姿を見ると黙礼しました。僕は生れて初めて若い女性だけの部屋というのを見ました。そのときはお茶だけ呑むと早々にアパートを出て本間君と別れました。それが彼女たちと交際するきっかけだったのです。

三

サダ子と深い仲になって一ヶ月経ったある日、今度はヒデ子から会社へ電話がかかってきました。丁度その頃、母は大連の兄貴の方へ行って社宅は（孫たちがいたので）僕だけでした。特に用事はないけど、明日は夜勤で、ゆっくり逢えるということでした。僕はサダ子と結婚するつもりでいたので、一瞬、躊躇しましたが、映画でも観せてやろうと思い、午後5時半頃、大陸劇場前で逢うことをO・Kしました。

僕が少し早めに待っていますと、友人の妻君が通りかかりました。劇場の隣りのビルが代用社宅になっていて何人か知っているのが住んでいました。

その劇場は当時「東宝作品」が上映されていましたが、そのときの作品は何だったか気憶にありません。少し遅れてヒデ子が出てきました。

「映画でも観よう」

「うん、いいわよ」

映画が終って、劇場を左へ出ると、代用社宅になっているビルの上に奉天ビルがありました。一階のビヤホールへ入って、ヒデ子には食事を、僕は生ビールを注文するつもりでいましたら、ヒデ子は、

「私もジョッキ、中でいいわ」

「大丈夫か？ホントに？」

「大丈夫、大丈夫、駄目だったら介抱して」

これには、こちらが驚きました。彼女は一杯飲むのがやつとでした。その頃の年齢は全部数え年ですから、現在でいえば17才の彼女は16才の未成年者です。当時、奉天などは植民地だったので煙草や酒など未成年者でも、そんなにうるさくはなく、本当に自由な生活を送っていました。男女関係も、勿論、映画（洋画）のキス・シーンなどもそのまま、内地では「カット」されるようなシーンもそのまま観られましたから、戦後、キス・シーンなんて内地の人たちが大騒ぎしたのが、ナンセンスに思えたくらいです。余談になって済みません。ビヤホールを出るとヒデ子の足取りがふらつくので馬車に乗りました。

「お母さん留守なら、あんたの社宅に寄ってみたいわ。連れてってえ」

と、しなだれかかってきました。

「それじゃ寄っていいから酔いがさめてから帰るといいよ」

僕は、そういうながら馬車を降りると宮島町の社宅へ案

内しました。玄関が二畳くらいの板の間で、六畳と八畳の二間に台所に風呂がありました。親子二人ならこれで充分でした。ヒデ子は部屋に入ると、キョロキョロ辺りを見廻していましたが、本棚に志賀直哉全集や島崎藤村全集や他に単行本がギッシリ詰まっているのを見て驚いたふうでした。僕が彼女にお茶を入れてやろうと立ち上がると、

「私がやってあげる」

といいながらふらつく足取りで台所へ行きました。危かしい足取りなので僕も彼女の後から台所へ……。それでも彼女は、ちゃんと薬カンでガス台にかけ火をつけました。「折角だから、デコちゃん、風呂に入れよ。沸かしてあげる」

僕は石炭をストーブへ入れ馴れた手付きで火をつけました。その頃、この辺りの社宅の風呂は巡カンで石炭で沸かすようになっていたのです。

「いいわねえ、家に風呂があって……。私、お嫁さんに来てやろうかなア。お母さんってどんな人？」

「へえ、デコちゃんがねえ。もう少し経ったらいいだろうけど、まだ子供じゃないか」

僕の言葉にヒデ子は一瞬ムーンとしたらしく、反撥するかのように、

「私、もう子供じゃないんだから……」

お茶を飲んでいた彼女は、いきなり立ち上ると服を脱ぎ

はじめました。

「おいおい、止せよ……判った、判った……」

ヒデ子は僕の制止も聞かず、スリッパ一枚になると、それにも手をかけたのです。が、彼女は、ふり返りざま、いきなり僕に抱きつきました。ふいをつかれた、その反動で腰だけの型になった僕は、彼女に抱きつかれたまま、ひっくり返ってしまいました。

普段は飲んだことのないアルコールがヒデ子を大胆にさせたのでした。初めは適当にあしらっていた僕も、いつしか興奮と欲情に我を忘れてヒデ子の唇を吸っていました。こうなったらもう若さの勢いで……。

ヒデ子は初めての経験で、簡単には進入不可能でしたので、ゆっくり時間をかけました。まばらな春草と鮮やかなピンク色が、一層僕の欲望をかりたせました。時間をかけたためか、彼女は少々痛がりましたが、外見ほど少女ではなく、思ったよりスムーズに、ことが運びました。その後、二人で汗びっしりの体を風呂で洗い流し、僕の布団と一緒に寝ました。勿論、彼女を抱きましたが、初めほどは痛がりませんでした。

そんなことがあってから、僕はヒデ子が愛おしく感じられるようになりましたが、何ぶんにも彼女が幼いので、関係をもつても、なるべく体外へ放出するように努めました。

一方、サダ子との関係も続きましたが、それは、いつも二人が夜勤のときに限られていましたので、月に一回か多いときでも二回といった具合でした。彼女は初めて関係を

もったときと同じように、ことが済むと必ず、直ぐトイレへ立ちました。

あるとき、不審に思つて、その訳を彼女にたずねますと、
「そうね。そのほうが妊娠しにくいから……」

といったのには僕のほうが驚きました。彼女には僕と結婚する意志など無かったのか？と思うと、がっかりしました。

昭和十八年の正月。和服姿のサダ子とヒデ子が連れだつて家へやってきました。暮れに、母には一応話をしておきましたので、二人の顔を見ると母は大喜びで二人を招じ入れました。母も久しぶりにご気嫌で、しきりに泊って行くように勧めていました。二人は丁度三日まで休みだったこともあって一応は、

「あんた、どうする。ね、どうしよう」

といつておりましたが、結局は泊って行くことになり、八畳間に母と彼女たちが寝ることになり、僕一人が六畳で寝ました。普段は近所のカミさん連中が無駄話に立ち寄ることはあつても、若い娘さんの訪問客は滅多にありませんので、母は正月早々の二人の来訪が、ことの他うれしかったようです。

翌二日は夕方から僕が夜勤だったので、サダ子とヒデ子の二人には、ゆっくり遊んでいってくれるように頼んで出勤し、翌朝、徹夜明けで帰宅してみると、出迎えてくれたのは母ではなくヒデ子でした。それも着物姿ではなく洋服

に着換えていました。

「……？」

僕の不審そうな綴を見てヒデ子は笑いながら説明してくれましたので直ぐ判りました。

僕が出勤した後、母と三人連れだって奉天神社へ参拝した後、二人は母を春日町へ連れて行き汁粉をおごってくれて帰るつもりだったのだそうですが、サダ子は、どうしても行くところがあるからと店を出て別れたそうですが、ヒデ子は、母一人帰るのが気の毒になり、母に訳を話して一旦アパートへ帰り着換えて僕の家へ戻ってきてくれたのだそうです。

「それはいいけど、デコちゃんに留守番させて、うちのオフロさんはどこいった」

おどけた調子で彼女に聞くと、オーバーを脱がせてくれながら、藤浪町の知り合いの家に年始の挨拶に行ったということでした。

「ずるいおふくろだな。デコちゃんを無理に泊まらせておいて。正月早々ご免ねえ」

「どういたしまして。ちゃんとした食事の用意はお母さんが仕度されたんですから……」

「おいおい……また雑煮かい参ったな」

うちでは正月三ケ日は雑煮を食べる式たりになっていたのでウンザリ顔でそういいますと、

「どういたしまして……あの子は雑煮は元日だけでいいよ

っていつもいつていますから、帰ってきたら適当に食べさせてやって下さいだ……そういつて出かけられました」

私は母の思いやりに感謝しながら、ラフなスタイルになると薬カンに入れたカンビンを取り、ヒデ子にも一杯勧めて朝食を済ませ、ごろりと横になっていきますと、後片づけを終えたヒデ子が枕元に来て、当然といったごく自然な態度で、僕の横に寝転びながら唇を重ねてきました。挑発された僕は乱暴な手つきで彼女を抱きました。母が帰ってくるかも知れない”という思いがスリル感を倍增させたのか、いつになく欲望感が強く全身をかけ巡る思いでした。

彼女の中で果てた後、暫く経って冷静をとり戻すと、妊娠ノが頭の中を駆けめぐりましたが、そうになったら責任とって彼女と結婚すればいいや、と決心したとたん、そんなことは忽ち消えてしまいました。が、二月の終り頃になってヒデ子から”妊娠したらしい”と耳うちされました。覚悟はしていましたが驚くより、

「体を大切にしとけよ。おふくろさんとも相談して、なるべく早く式を挙げよう」

といったのでヒデ子は凄く喜んでくれましたが、三月半ば頃になって彼女が入院していることをサダ子からの連絡で知りました。驚いて見舞いに行つて、そこではじめて彼女が流産したうえ”ロクマク炎”が併発していることを聞かされました。そういうえば衰弱ぶりが甚だしく、げっそりやせ細った顔は痛々しい程でした。一日おきから三日おき

くらはいは病院へ顔を出しましたが、益々やつれてゆき五月はじめには遂に腹膜炎になってしまいました。その頃の医術では、こうなると回復は絶望的でした。五月十三日の午前三時頃、若い命は近親者に看とられながら短い生涯をとじました。

「いい娘さんだったのにね。可哀いそう」

母は、そういつて涙ぐんでいました。

「サダちゃんは男関係が凄いのよ。私が知ってるだけでも8人くらいいたもん」

生前ヒデ子が寝物語りにいつていた言葉を、単なる嫉妬からだと思つていた僕は、

「そうかい、そうかい」

と聞き流していました。が、満更それがウソでなかったことは、サダ子の不運な死後判りました。サダ子は昭和十九年の十一月二〇日の奉天の大空襲で、アパートもろとも、あの世に行つてしまったのです。

数日後、君子に逢いましたが、ヒデ子のいつていたことはホントでした。

「兎に角、男関係は凄かったのよ、サダ子は……あんたに忠告しようかとも思つたんだけど、水差すみたいで……。でも、あんたも罪作りな人ねえ。ヒデ子もあんたに殺されたみたい……」

「おいおい、変なところで悪者にされたな」

「ヒデ子はポンちゃん（本間君）とも寝てたことあつたの

よ。あんたが知らないだけよ。それも私が知ってるだけでも五、六回あつたのよ」

「ホントかねえ？」

三十数年過ぎたある日、銀座で偶然本間君に逢つた僕が、そのことを問い正すと彼は、唯ニヤニヤしながら

「君の相像にまかせるよ」

ととぼけていました。



燃え尽きし日々

福田 久 文

あなたがお好きだった新緑の候こそ落葉の季節だと知り
ました。常緑樹の枯葉が山肌に降り掛り、小路に堆高く散
り敷いて、その上にみずみずしい広葉の緑が鬱蒼と茂って
いる中を、岩走る水音を聴いて、今日の午後わたしはお墓
への山道を一人歩きました。あなたとあの古刹のある山へ
這入ったのはもう何年前の初夏でしたか。山肌に林立する
松の緑に囲まれた白河砂の枯山水を眺めながら、二人で抹
茶を載きましたね。そのあと、本坊前の別の小路を辿りま
したら、急に視界が拡がって、三方を近々と山に囲まれた
台地があり、遠くあなたのお家のある市街が見渡せました。
そこが新墾の墓苑となり、あなたのお墓が建とうとは。

三十四という牡盛りに、美少年の面影を残したまま逝っ
てしまわれた。もうこれ以上耐えられないというところを
耐え忍ぶのが学問だとお聴きしましたが、その上に大学紛
争が重なったのですね。助教授という大学当局を補佐すべ
き職にあったあなたが、敬愛する恩師と昇進に背向いて学
生の側に立たれたのです。どんなに心労を加えたことでし
よう。四年の間、わたしに捕えられて、失心するまで性的

拷問を受け、果ては強心剤を打たれて貧り されていたお
体は、遂に潰えてしまいました。

「あなたとの交歓も、あなたに背向いて持ちました家庭も、
輪郭だけを素描したばかりのわたしの研究も、すべてがわ
たしとともに消えて行きます。奈落へ落ちていく戦きとと
もに疼くような愛惜の情を覚えるのです。少年の頃から育
ててきたわたしの詩想も、この悲しみをよく鎮めてくれる
詩的眞実にまで昇華しませんでした。でも、死ぬまで亢進
して行くという患部の疼きには静かに耐えようと思います。
多くの苦しみと脆さを背負った肉体が本来あるべき浄らか
な静寂の中 戻るのに、取り乱しては見苦しいですか
ら。あなたとともに過ごした閨房のひとときを憶い浮べて
おりましょう。本当にめくるめく情感の充実でしたね。そ
れは家庭でも、研究でも得られなかった確かな生の証しで
した。お逢いしなくなってもう五年、あなたの御負担の大
きさを有難く偲んでおります。あの肉体の充足感とともに
高揚していた心の通いだけは肉体が亡んでもなおわたした
ちの間に残ることを心から願っております。」

襲ってくる疼痛を静かに耐えてお書き下さった最後のお便りを一句違えず憶い浮べ、人氣のない広い墓苑で墓石を抱いて心行くまで泣きました。

漸くお墓を後にして溪流に降り、ともに腰を下ろした岩に坐して、足先を走る透明な水に見入りました。寺が水源にしているため参道からは這入ないあの場所へ、あなたに手を引かれて降りた所をひとりで辿ったのです。形のよい岩が重なってゆるやかな滝を作り、鬱蒼と溪流を覆う新緑の間から、午後の陽射しが差し込んで、刻々と変化する水晶のような水を照らしておりました。生きものと同じ激しい動きを示しながら飛沫と響きを立てて流れていく水の、何と軽やかで涼しいことでしょう。愛別離苦の負担なく淡々と青黒い岩肌を滑って行く水が本当に羨しゅうございます。わたしは、岩走る水も、岩肌を包む苔も、ともに目を背向ける激情を露わにして、清らかなあなたの肌に纏わり付いたのです。

古美術店で見付けて来た赤銅の大きな吸口と雁首を神社で呉れる二尺近い朱の矢竹に取り付けたこの閨房の喫煙具は、あなたの肌を焼いた小さな銀の火皿に黒い脂をこびり付かせ、精巧な鬼面の彫り込みが黒錆を沈めて鮮やかな吸口に、冷たく光る銀の突端が付いています。燭台の光に照らされた土蔵の中で、眼の高さまで逆海老の宙吊りにしたあなたのあのしなやかな裸身と苦悶の表情を眺めながら、この火皿の外側に焰先を当てて一服吸い付けるや、乳首を

焦がし、脛を打ち、果てはそこを握り締めて激しく揺り動かせたのです。がっくりと首を垂れて失心したあなたの舌を吸いながら、緊縛してあるそこをまさぐっておりますと、氣を失うまで責め苛まれるのを知りながら、敢えて身を任せてくださるあなたへの愛しさが胸に泌み渡る生理的感動を呼び、それが股間の火照りをこよなく高めたのです。二畳の畳の上に引き降ろすや否や、着物を付けたままやにわに騎乗して情を遂げ、股間から脳天へ突き貫ける快感を覚えしました。死姦しているのだと思いますと、激しい情欲が持続して、その鋭い快感を繰り返えし、殆んど自失せんばかりでした。

ようやく身を起して、わたしは注射器を取り上げました。根元を緊縛したままのあなたを驚嘆みにして、その周辺の皮膚に注射針を突き立て、失心から覚めて苦しむあなたに少量づつ位置を変えて打ち続けておりますと、また乳首まで昂ってまいりました。着物を脱ぎ、胸も股間も露わな裸形で男坐りをして、銀の吸口を啜えるわたしに、うっとり見とれておられたあなた。そのあなたのものを片手で摘み上げ、火皿を当てて緊縛しているゴム紐を焼き切り、針を突き立てた辺りの毛を焼き焦して煙官を吸い終るや、わたしは逆さにのし掛ったのです。あなたを、えたまま全身の重みを掛けて逆海老を抑え潰しました。乳房に激しく伝わるあなたの身悶えと股間を響かせて漏れてくる呻きがあるあなたの舌の動きを鈍らせると、わたしは齒を立てました。

悶絶するような責苦を受けながら、お口でわたしを満たして下さったあの烈しい皮膚の触れ合いは愛する人を持つ幸せを実感させて、目が眩むようでした。あなたを飲み乾すと同時に、わたしもまた鋭い痛みのような衝撃に貫かれて呻きを上げたのです。薬剤の効果とわたしの手練とがあなたを立て続けの放出に誘い、わたしは何度も呻きを上げてあなたのお顔を汚しました。

高揚した心の通いだけで御一緒になれる彼岸のあることを、渴者が水を求めるように願わずにおれません。また涙が溢れ、あなたと寝んだこの部屋で自分の泣き声を聴きながら泣き続けておりました。どうか今生のわたしの振舞をお赦し下さいませ。合掌。

ともに汲みし君身罷りて
山峡の岩走る水羨しきろかも



あるマゾヒストの告白

血 経 聖

一 龍 沢 桃

都心から少しはずれた住宅街に、そのマンションはあります。私はそこで守衛をしているのですが、そのマンションには綺麗な女の人がたくさん住んでいます。私はもう五十を過ぎた男ですが、背が一メートル五十センチと小柄で、それが昔からコンプレックスの種でした。ところが、こんな私でも、可愛がってくれる女の人はいるものなのです。私は大柄な女の人を見ると、たまらなくなるのです。それは、雨の強く降る夜のことでした。もう九時になったので、マンションの入口のシャッターを閉めようとしていたのです。すると、あわてて女の人が飛び込んできました。四〇一号室の石川洋子さんです。私は、男の人には興味がないのでほとんど知らないのですが、女の人々の部屋の番号はみんな知っています。その中でも、四〇一号室の洋子さんは、前から目をつけていたのです。洋子さんは一メートル七〇以上もある大柄な体で、顔も飛びぬけて美人なのです。私は洋子さんに朝晩、挨拶されるのですが、そんな時、胸が高鳴って、

うまく返事が出来ずに、どもってしまいます。

「ああ、よかった。あたし、ウツカリ鍵を忘れちゃったの。もう少しで入れないところだったわ。あ、そうそう、これ、ケーキを買ってきたんだけど、守衛さん、もう仕事終わりなんですよ。よかったら、あたしの部屋に来て、一緒に食べない？」

私はおそれおおいその言葉に、思わず顔が赤らみました。洋子さんは、私の知っているところでは、三十五歳で独身。宝石店に務めているということですから、身なりも大したもの。毎日、違ったネックレスや指輪をしています。それは素人の私の目から見ても高価なものです。私は洋子さんの言葉に甘えて、シャッターを降ろして鍵を閉めると、後について、エレベーターに乗りました。息のつまるような数分間でした。洋子さんが私を、上からジッと見つめているのです。私は恥ずかしくて、洋子さんの顔をまともに見られませんでした。

「さあどうぞ。一人所帯で汚れているけれど、まあ、腰かけてちょうだい」

言われるままに、私は黒皮のソファ

に坐りました。私はジッと下を見ているのですが、洋子さんのスラリとのびた脚が目の前で忙しそうに動きます。私はその脚を、息をつめながら見ています。弾力にとんだ洋子さんの脚の先を、私は舐めたいと思いました。ケーキをいただきながら、洋子さんの顔をチラッと見ると、楽しそうに微笑しています。私は恥ずかしくなって、また顔を赤らめて、下を向いてしまいました。すると、向かいに坐っている洋子さんの脚がのびて、私の脚を突くのです。そして、ケラケラと笑うのです。私は胸が熱くなって、思わず口の中に入っていたケーキを吐き出すところでした。洋子さんは、口をもぐもぐさせながら、ケーキを食べていました。が、突然、それを目の前に吐き出しました。そして、私に向かって、まるで女王様のような口調で、

「お食べよ！」

と言ったのです。私はびくっとして、おどおどした目で洋子さんを見ました。洋子さんは私をさげすむような目で見て、また言いました。

「お食べよ！」

私は背筋がゾクゾクしてきて、洋子さんの命令を聞きました。食べたのです。洋子さんが一度、口の中に入れたそのケーキを、つぶれてぐちゃぐちゃになったケーキを、食べたのです。私は食べながら、とても強い幸福感に酔いしれていました。そんな私の姿を、洋子さんは哀れそうに見ていたのです。目の前に、長い洋子さんの脚が組まれていきます。そして、その脚がだらしくテーブルの上に投げ出されたのは、私がまだ汚れたケーキを食べている途中でした。洋子さんは、私を睨んで、目で合図するのです。脚の先を舐めろ、と目です。私はあわてて、口の中のものを、喉につかえさせてしまいました。それを見て、洋子さんはケラケラと楽しそうに笑うのです。口の中にケーキを残したまま、私は洋子さんの脚の先に口をつけると、指の間を舌で舐めました。ツーンと酸っぱい味がして、私は感激のためにうっとりとなったのです。舌はしびれ、それは喉を通って、腹の中にまでしみわたりました。

＊

＊

洋子さんは脚で私の顔を挟みました。引っぱられて、私の顔はテーブルの上に、鼻を押しつけられたまま滑ってゆきました。私の頬に、洋子さんの太腿がじかに触れて、それがやけにひんやりとして冷たく、心地よいのです。太腿は白く、血管が透けて見えるほどでした。洋子さんはさらに私を引きずると、坐っているソファに私の顔を押し当て、その上から大きなお尻を乗せてきました。後頭部に乗った洋子さんのお尻は、ぷよぷよとしていて、それはもうこたえられない肉の重みでした。

「ん、ぐぐ、ぐぐぐ……」

息がつまって、私はもがきました。しかし、もがけばもがくほど、洋子さんは体重をかけてきます。私は思わず体を回転させて、せめて息ぐらいは出来るようにと、仰向けになりました。もう、そのむせるような洋子さんの股倉に鼻づらが触れ、私は思わず体をふるわせました。何かしら、じっとりしたものが口に触れて、私はお尻で顔を押しつけられながら、その感触をいつ

までも楽しんでいました。すると、急にじょうじようと、私の顔に冷たいものがかかりました。そうです。洋子さんは私の顔に股倉を押しつけながら、オシッコをしたのです。私は夢中でそのオシッコを飲みました。一滴も外にこぼすまいと、むさぼったのです。洋子さんのオシッコは、とてもおいしいものでした。私はその時まで、女の人オシッコを飲んだことがなかったのです。夢にまで見たオシッコを、とうとう私は飲むことが出来たのです。それも、私の憧れの女の人のオシッコを飲むことが出来るなんて……。洋子さん、ありがとうございます。口にこそ出ませんが、私は洋子さんに土下座してお礼を言いたいくらいの気持ちだったのです。それにしても洋子さん、あなたのところとしたオシッコの味は、どんなにおいしい飲みものよりも美味です。まさに黄金水という言葉がぴったりするほど、高貴な飲みものではないです。私の胃の中に入り、そして、私のオシッコと混ざって出てくるのです。こんな一体感が他にあるでしょうか。私は、下半身が硬直するほど、

興奮しました。この思いを、誰に伝えたらよいのでしょうか。人はみな、こんな話を聞いたなら、変態あつかいするに決まっています。わかってくれるのは、洋子さん、あなたただけかも知れません。ぐしょぐしょになった私の顔は、なおも洋子さんの股倉にむしゃぶりついて、残る一滴、最後の一滴をも吸いとうとうと、無我夢中でパンティを舐めました。何か、とろっとした、妙にねばり気のある液体が口の中に拡がりました。私はそれを、てっきりオシッコだと思っていたのです。それにしては、なんだか変な口あたりなのです。あまり気になるので、私は指をさし入れて、見えにくい目で、薄目を開けて見てみました。それは生理の血だったのです。私はオシッコを飲み終わった後、その経血を舐めていたのです。それは、顔じゅうにべったりとついて、まるで私の顔から出血してでもいるような、むごたらしい状態でした。しかし、そこで私が喜んだのは言うまでもありません。なぜといえば、先のオシッコと同じように、女の人の生理に、昔から憧れていたのですから。一度でいい、た

ったの一度でいいから、女の人の生理を見てみたい、そして、そこから出る赤黒い血を飲んでみたい、そう以前から願っていたものです。それが、こうしていとも簡単に実現できたのですから、私の喜びは例えようもないほどののです。それはきつと、他人の目から見れば、ぶざまな様子かも知れませんが、しかし、私はそこに至上の幸せを感じるのです。誰にも認められることのない私の身に、これほどの喜びがあるのでしょうか。私は、一人の女の人に、こうして思いきり可愛がられているではありませんか。洋子さんは、血で汚れた股倉を、上げては下げ、下げては上げて、私の顔を汚してくれるのです。血は鼻腔に入り、ぶくぶくと音を立てて、口の中いっぱい拡がりました。生ぐさい匂いが鼻につき、私は思わず吐き気をもよおしました。

＊

＊

私の顔の上で、洋子さんは煙草をおいしそうに吸っています。その吸ひさしの煙草を、熱くなっている先を、私の首につけるのです。私はあまりの熱

さに、

「ぎゃっ!!」

と叫んだほどです。洋子さんは、私の首で煙草を消したのです。私の首は、洋子さんの煙草の灰皿になったのです。

「この灰皿は、よく消えるよ」

そんな洋子さんの言葉が聞こえました。そして、私の胸がはだけられたのです。今度は、灰皿は胸に移りました。首と同じように、乳首にも火がつけられたのです。

「ウッ……!!」

私は呻くと、しばらくは頭がかすんで、意識が薄らぎました。それは、幸せな時の経過でした。もちろん、私の下半身は興奮のためにいきりたっていました。洋子さんは、ぎゅっと私の顔に重たいお尻を乗せて、それをくねくねと動かしたからたまりません。私は息がつまり、口の中にたまっていた経血を吐き出してしまいました。お尻の肉の割れ目に、私の口が食い入り、苦しいながらも、割れ目にそって、パンティの上から舌で陰部をなぞりました。私の喜びは高まる一方でした。ふと洋子さんは立ち上がると、汚れたままの

恰好でそばにあった手鏡を取ると、それを私に向けました。

「ほら、見てごらん、自分の顔を……」

そう言う洋子さんの顔は、まるで聖女のように神々しく見えました。私は言われて、うっすらと目を開けました。

そして、自分の血で汚れた顔を見てみたのです。それは素晴らしいものでした。自分が、聖女のような女の人に、これほどまでに汚されているかと思うと、またしても深い感激にひたるのでした。私のような男でも、こんなに可愛がってもらえるではないか。そう思うと、熱い涙が頬を伝わって流れるのでした。そして、その涙は、聖女の経血と混ざって、透明さを失ってゆくのでした。鏡に写った私の顔は、それはもう汚いものでした。醜くて、二目と見られた顔ではありません。ところが私は、そんな自分の顔を、とても愛しく思ったのです。そばで、洋子さんが冷笑しながら見えています。そして、洋子さんは、私が見ている鏡を、後から強く押しつけたのです。私は自分の写った顔を舐める恰好になりました。鼻が強く鏡に押しつけられて、つぶされ

てしまいました。洋子さんはその後、鎖で私の首を締めました。私は犬のような恰好をして、部屋中を歩きまわるのです。もちろん、体には何一つ衣服はつけていません。そして、全裸の洋子さんは、オシッコをしてくると、

「お舐め」

と言って、私にオシッコで汚れたソコを舐めさせるのです。私はすっかり家畜になった気分です。洋子さんの陰部を舐めました。まだオシッコがついていて、それは妙に塩からい味がしました。四つん這いになって腰を落とし、ぺろぺろと舐めるのです。洋子さんは立ったまま、下腹を突き出して、気持ちよさそうにしています。そこはぬるっとしていて、生あたたかく、舌を這わすと、中からとろりとした粘液がしみ出てきました。それがまろやかに舌に転がって、私はうっとりとした気持ちで飲み込みました。洋子さんの恥毛は柔らかく、心地よく鼻や唇に触れます。私は思わず射精しそうになったほどです。体をくねらせていると、洋子さんが、私のペニスを握って、

「大きなチ○○○だこと。体に似合わ

ず、立派なのねえ」

と言い、ごしごしとさするのです。

私がうつとりとしていると、いきなりペニスにテープを巻いたのです。それも、強くぐるぐると何重にも巻くので、痛くて仕方ありません。

「生意気だよ、こんなに大きなものを持てさ」

そう怒鳴るんです。洋子さんは。そして、憎々しげに、私の顔にツバを吐いたのです。顔についたツバを手のひらで拭くと、私はそれを舐めました。

＊

＊

私の目の前にいる洋子さんの体は立派なものです。肌も弾力があって艶々しています。ふっくらとまるみのある太腿から、くびれた胴、そしてなだらかな曲線を描いて、胸へとつづき、八十五以上はあろうかという乳房が堂々とその大きさを誇っています。そんな体を、私に見せつけるかのようにして、目の前に仁王立ちしているのです。いつの間にはいたのか、洋子さんは長目の黒いブーツ姿です。その他のものは身につけていません。その姿がとても

勇ましいのです。私の体は感激にふるえ、おののきました。映画では、そういう姿を見たことがあるのですが、目の前で見るとその姿には圧倒されます。

洋子さんの長いブーツが私の頭の上に乗りました。そして、まるで煙草をもみ消すように、力をこめてひねりつぶすのです。私の鼻は床に押しつけられて、いくらカーペットが敷いてあるからといっても、それはもう大変な痛みなのです。皮独特の匂いが鼻について、私はまたしても射精しそうになりました。しかし、テープが巻いてあるので、下腹部がきゅーんと痛くなるばかりなのです。私は昔から、この皮のブーツに思いを抱いてきたものです。街へはあまり出たことがありませんが、たまに皮のブーツをはいた女の人を見ると、後についていったくらいです。自分で女性用の皮のブーツを買い、それを部屋に置いて、時々匂いを嗅いだり、靴底を舐めたりしたのですが、物足りなく思っていました。こうして実際に皮のブーツで踏んづけられると、その思いが叶ったという、とても満足な気分にはひたれるのです。すっかり心地よ

くなった私は、つい図にのりすぎて、洋子さんの下腹部に指をのばしたのです。

「なにをするの！ あたしに黙って体に触わるんじゃないよっ！」

洋子さんは激怒して、ブーツをはいた脚で私の顎を蹴り上げました。私はもんどりうって後へひっくり返り、体を強く打ちました。洋子さんの目がつり上がって、見るからに怖い顔をしています。私はそんな洋子さんをこわごとと見ながら、なんともいえない喜びに体をふるわせたのです。私が四つん這いになろうとすると、すぐに洋子さんの脚先が飛んできます。そのたびに私の体には、真っ赤なうちみが出来て、みるみるうちに腫れあがってきました。「あたしと、したいの？ フン、あたしとしたかったら、あそこのガスコンロに乗っている、ポットをくわえて、ここまで持てらっしゃい」私は命令されるままに、四つん這いの姿勢でガスコンロの前まで行くと、ぐつぐつと煮えたぎっているポットの把手を口にくわえると、その熱いのかまわずに、また四つん這いになり、

洋子さんの所へ持って行くべく、歩きました。沸いているお湯の熱さが、じかに口に伝わって、私は必死で熱さをこらえました。唇が熱さのために火傷して、腫れあがってきます。それでも私は、齒をガチガチ鳴らしながら、洋子さんの前まで運んだのです。私の顔は、熱い湯気のために、赤く火傷してしまいました。熱さのために目も見えません。私のベニスに巻かれているテープがほどかれました。そして、仰向けになっている私の体の上に、洋子さんがおおいかぶさってきたのです。洋子さんは自分で女性器を開きながら、私のそこに当てがって、何度か腰を揺すり、入れてくれました。生あたたかい洋子さんの体に包まれて、私は顔の火傷のことも忘れて、うっとりした気分になりました。洋子さんは私の上で、体をくねらせます。ふくよかな乳房が私の顔をうち、ぷるんと弾んでは鼻や唇をくすぐるのです。私は下になりながら、洋子さんの大きな体に押えつけられつつ、射精したのです。それは今までに味わったことのない、苦痛をともしないながらの放出でした。

＊

＊

今朝も洋子さんが、高価な宝石で身を飾ってご出勤です。何事もなかったかのようなポーカーフェイスで、

「おはよう、オジさん」

と手を振ってマンションを出て行きます。私は照れくさくて、

「お、お、お、おはよう、ご、ごさいます」

と、いつものようにどもりながら、顔を赤くして挨拶をします。



艶色・村役場の珍事

秋野夢男

あんまり見たことのない顔だから、
行商人だと思います。庭で鶏に餌をや
っているときに、うしろから「いい天
気だなす」と声をかけられたのです。
それでわたしも同じように「いい天気
だなす」とあいさつしました。

男はジロジロとわたしを見ていたの
です。わたしはしゃがんで鶏に餌をや
っていましたけど、男がわたしの体を
見ているのははっきりわかりました。
本当のことを言うと、見られるのはい
やだなと思ったのです。短かいスカ
ートで少しきついのはいていましたか
ら、しゃがんだときに、めくれ上って
しまつて、内股が覗いてしまつたと思
います。これはわたしが意識してわざ
とそのような恰好をしたものではありま
せん。自然とそうなつたのです。「い
い天気だなす」男は同じことを今度
はかすれた声で言いました。「だれも

ほかにいねえのげ？」と続けて訊いた
のです。わたしはうつかりして、「父
ちゃんは出稼ぎにいつてるだよ。子供
らは学校さ行つてゐるだ」と答えてしま
つたのです。それが悪かつたと後にな
つて気がつきました。

「おら、喉が乾いているだよ」と男は
言つたのです。「すまんけど水を飲ま
してくんろ」「いいだよ」わたしは丁
度餌をまき終つたことだし、腰ものば
しなかつたから、立ちあがつて台所に入
りました。男も一緒に台所に入つ
て来たんです。「旦那さんが出稼ぎで
は淋しかつぺ」と言いましたから「わ
たしは馴れただよ」と軽い気持ちで言つ
たら、うしろからぎゅつと抱きしめら
れたのです。油断していたわけではな
く、真ッ昼間だし、まさか見ず知らず
の男が、そんなことをするなんて相像
もしていませんでした。男はうしろか
らわたしをぎゅつと抱きしめますと、

両手を前に廻して、おっぱいのところ
をグリグリツと揉みながら、わたしの
尻のところを腰を押しつけました。わ
たしはびっくりして「冗談はやめてく
んろ」とはっきり言つたんです。でも
男は鼻息を荒くして、やめないどころ
か、ますます尻のところを腰をぎゅつ
ぎゅつと押しつけておっぱいを揉むの
です。わたしは「やだ、やだ」と言つ
たと思います。とつさのことですから
びっくりして、どうしていいかわかん
なかつたのです。いままでそんなこと
をされたことはありませんから。男は
片手でおっぱいを揉みながら、片手を
スカートの下にいれました。このとき
のわたしの恰好はうしろ向きに立つて
いましたから、男はわたしの背中を抱
いていたのです。男はすぐにズロース
から指を入れますと、わたしの恥ずか
しいところをくじつたのです。どのく
らいくじつたのかわかりません。こう

いうことをされると、女はちゃんと立っていられなくなってしまいます。わたしは「やだ、やだ」と言いながら、腰が抜けたみたいになってしまった、土間にストーンと腰をおろしてしまいました。男はわたしの肩に手をやると、仰向けにしてから、ズロースを取ってしまつて、すぐに乗ったのです。されていた時間はとっても短かいです。アッというぐらいです。男もスゴク欲情していたみたいです。男は二、三回腰を使いますと、すぐに立ち上つて、黙まつて出て行きました。わたしは起きあがつて、男の汚した股のところを手拭でキレイにしましたが、そのとき腹が立ったのです。バカにされたのだと思つたのです。こんなこと見のがしておいてはいけないと決心しましたから、顔を洗つて気持ちをしゃんとさせて、駐在さんのところに行きました。訴えて男を罰してもらおうと思つたのです。そしたら運悪く駐在さんはどこかに出かけて留守でした。どうしようかなあ、と考えながら歩いていました。このままでは気持がくしゃくしゃしておさまらなかつたのです。駐在がいなければ、

それに替るものは役場です。そうだ役場に行つて話してみようと思ひました。

常陸村の役場は丘の上にあつて、ぐるわに白樺があつて、いついっても静かでガランとしているのです。役場の人は机にちゃんと坐っている人は少なく、将棋をさしていたり、入口横に並べてある鉢植に水をやっていたり、とつてもものんびりしているのです。わたしが行つたときは、助役さんが植木をいじつていました。「村長さんはいますか？」と訊きますと「血圧が高くて休んでいるけど、何か急用かね？」と言ひましたから、この問題は助役さんでもいいと思ひました。助役さんというのはデブプリアつていて、村長さんより貫録あります。村の実力者なんです。

「わたしは一時間ほど前に、行商人みたいな中年男に無理矢理へっぺされただよ」

恥ずかしいと思つたけど、はっきり言つたのです。思つた通り助役さんは驚いて目を剥きました。

「へっぺされただと？」

助役さんは、わたしの体を上から下

までジロジロ見てから、

「あんたが誘つたんじゃねえのげ？」

と失礼なことを言ひました。わたしが怒りますと、助役は頭をかいて、

「あんたがムチムチしていい体だもんだから冗談を言つただよ、悪かつたな」とあやまりました。

「ここじゃ落付いて話しも出来ねえから、奥に行くべ」

奥というのは助役室のことです。個室ではありませんけど、ロッカが二つ並んでいて、それがついたての替りになつていました。でも机に坐ると役場の内部は見通しです。助役さんの坐る場所から見えるということは、ほかの人の坐っている場所からも、助役さんや村長の机が丸見えということになります。どうしてそんなことにこだわるかと申しますと、助役さんは自分の椅子の傍に、もう一つ椅子を運んできてわたしを坐らせたのです。

「ヒドイ目に逢つたなや」

助役さんは声をひそめると、まず慰めてくれました。

「こんなこと出稼ぎの父ちゃんの耳に入つたら大変だべ」

そう言われてから、わたしはドキンとなったのです。その通りなんです。

助役に言われるまで、夫のことはすっかり忘れていました。

「しかし、こういうことはよく調査をして、そのような不届な奴らを村から追い出さなくちゃいかん」

助役さんは選挙演説のときのように胸を張って言いました。それからまた声を低くしたのです。

「へっぺされて、そのまま来たのげ？」

わたしの腹の下あたりを助役さんは見ていました。わたしはポウと赤くなりながら言いました。「手拭でよく拭きましただよ」そうか、よく拭いたか、と助役さんは呟きながら手をのばして、わたしの腹の下あたりを撫でたのです。撫でながら助役さんは真面目な顔つきで言いました。「その男はどんなやつだった？」「初めて見る顔でした」

「そうか、初めて見る顔か……」わたしはくすぐったくてモジモジしてしまいました。助役さんは話をしながら片手をのばして、わたしの下腹部を撫でまわすのです。それも真面目な顔つきをしながら。わたしはどうしてい

いのかわからないので、ジッと体を固くしていました。それに役場の中ですから、それ以上ヘンなことにはならないと思ったからです。わたしが黙まっているので、助役さんの指はだんだん図々しくなってきました。スカートの上からですが、丁度股の部分、それもお××あたりのところを撫でるようにしたので。机の上では上半身をきちんとそらして真面目な顔をしながら、机の下は見えないところではいじくるのです。わたしは体が熱くなってしまいました。ヘンな話ですが、見知らぬ男に犯される時間が、あまりに短かったために、後になってから、体の奥がジンジンと熱くなってきたみたいなのです。それに、スカートの上からですが、助役さんが刺激するので、余計にカッカッと熱くなったと思います。「まったくけしからん男だなあ。油断ならん世の中になったもんだ」

助役さんは喋りながら指をすべらせると、スカートからはみだした太腿の部分で撫で廻してから、奥に入れたのです。わたしは思わずピクンと足を合

手首までが股のところに届いていました。助役さんは正面を向いて坐っています。わたしはその横に坐っていたのです。ですから、助役さんは前を向きながら片手をスカートに入れましたから、その分だけ肩が極端に下がってしまいました。わたしが真ッ赤になりながら、ドキドキしたのは、ほかの人に見つかったら恥ずかしいと思ったからです。「父ちゃんから便りがくるかえ？」助役さんはズロースの中に指を入れますと、お××を指の腹でくすぐるようにしながら訊きました。この部分はとっても感じるのです。

「めったに、はあ、きませだ……」それでもわたしはちゃんと返事をしました。このときスゴク恥ずかしかったのは、×水がビシャビシャになるくらいあふれて流れ出していたのです。犯されたとき、すぐに拭いたのですけど、男の体液が膣の奥にたまっていたのかも知れません。そこを指で刺激されたので流れだしたと思います。助役さんは、わたしの体が濡れていることに、すぐ気付いたと思います。そのことには何も言いませんでした。ただ助役さ

んは、いじりやすいように手首を左右に振って、わたしの太腿を開くようにしたのです。こうなってしまうてからは、つぼめるのは遅いですし、それに腰が痺れてしまって、椅子に坐っているのが辛いほどでした。助役さんは、指を二本そろいてスポンスポンさせ始めたのです。濡れていますから、そういうことをされますと、感じてしまつて声が出そうになつてしまいます。わたしは机にひじをついて、必死にがまんしました。目の前がまぶしくなつて開いていられないのです。助役さんも興奮したようでした。わたしのアソコをくじりながら、片手で自分の大きくなつた部分を、ズボンの上から撫でたり揉んだりしたのです。だれも見えていなかったら、助役さんは露出したと思います。露出しただけではなく、その場で性交したと思います。助役さんの指が、お××や尿道口や膣などをいっぺんにいじり廻しますので、わたしは切なくて、椅子から落ちそうになつたほどでした。この状態がもう少し続いたなら、わたしはよがり声をあげていたかも知れません。戸籍係の野村と

いう爺さんが来たのはそんなときです。「助役さん、建設用地を見たいって町から人が来てるだよ」助役さんは舌打ちしました。これからというときに邪魔されたような気分だったのでしよう。「すかたねえなあ」助役さんは濡れた指をズボンで拭きますと、大きな声でわたしに言いました。「さっきの件だけれども、これは重大なことだから、はつきりさせっぺ。おらは一時間ぐらいで戻ってくるげんども、それまで待つててくんろや」助役さんはだれにも判らぬように素早くウインクをしますと、歩きすらそうな足取りで行つたのです。野村爺さんは低い背をそらし、すど、「小使い室が空いているだよ。そこで待つていたらよかつぺ」と親切に連れていつてくれたのです。小使い室というのは役場の裏にある物置小屋を改造した部屋で、六畳ほどの広さなんです。わたしは畳に坐りますと、野村爺さんは緊張のあまり顔を白っぽくさせて囁いたのです。

とぼけたわけではありませんが、思わず訊き返したのです。野村爺さんは、ずるそうな笑いかたをしながら言いました。「あんたが、助役にくじられてヒイヒイよがっているのがわかつていただよ。あんたの坐つたうしろにガラス窓があんべえ、そこに映つていただよ」だからおらにもくじらせろ、と言うのです。わたしはショックのあまり、畳にうつ伏せになつてしまいました。すると野村爺さんは、うしろからスカートをまくりあげて、わたしの尻を露出させてしまったのです。ズロースを下げられたのは知っていましたが、あのときはやけくそでした。どうにでもなれという気分だったので。それに相手はお爺さんですから、いたずら程度だろうと考えました。ところが違うのです。おどろきました。野村爺さんは、わたしの尻を持ちあげるようにしますと、ろくにくじりもしないで、松の根っこのようにカチカチになつた性器を押しこんできたのです。わたしの部分は、助役さんになぶられてベタベタになっていましたから、野村爺さんの太いやつが、それほどきしる感じも

なく、なめらかに入ってきました。わたしは深々と貫かれた瞬間、思わず声を出してしまいました。うしろから、まるで犬みたいな恰好で性交するなんて、初めてだったからです。同じ抜きさしでも、膣に当る角度が違うのです。そり返ったものが、ちょうど入れて持ちあげる感じになるのです。しかも野村爺さんは年の功というのでしょうか、背後からわたしの尻を抱きますと、腰を使いながら、手をのばしてきて、お××をチョネチョネと刺激しました。わたしはいままで、こんなに感じたことはありません。このとき発見したのですが、男は老人でもセックスは枯れていないということです。「ああ、いい、いいわ、いいわ、死にそう、死ぬう、死ぬう……」そんな意味のことをわたしは叫んだようでした。はっきりしないのです。意識が薄れて、再び気が付きますと、今度は仰向けにされて、剥き出しの腹に、別な男性の股が密着していました。だれだか判りません。目がよく見えなかったのです。でも役場の人には間違いありません。だれかが、抜きさししている部分に指

を入れて、お××をいじったり、おっぱいを吸ったりしていました。役場に働いている人は五、六人ぐらいだと思いますが、その人たちが全部、わたしを犯したのです。でもこのことは外部には漏れないと思います。こういうことは村の秘密なのです。わたしは淋しくなると、役場に遊びに行くようになりしました。役場の人たちは、わたしをとっても大切にしてくれます。父ちゃんは東京の渋谷というところで、地下鉄工事で働いています。すべてがうまくいっております。生理が遅れているのが心配なだけです。

へ了



判字クイズ・解答

したいわ	ぬぐわ	開いたわ	大きいわ	こまるわ
はずれたわ	はいるわ	カサナッタワ	はいったわ	
いいわ	いくわ	終わったわ		

レスポスの園 6

結城紀子

中学三年の時でした。私の通っていた学校は、幼稚園から大学までのエスカレーター式でしたので、特に受験勉強をすることもなく三年といっても、ごく普通の学園生活を送っていました。

三年になってから同じクラスになった友達に、栗原純子という、女の子にしては背の高い（中三当時、既に一六五センチはあったでしょう）人がいました。家が近いことで、通学がいっしょになったことが二人を近づけたのでしよう。学校では無口な人で、特に親しい友人もいないようでしたし、いつも一人でポツンとしていた人でした。それでいて寂しそうであったかというところではなく、長身で痩せていても筋肉質の身体で、体育の時間などは、皆の注目を集めるほど何をしてもしも手く、小麦色の肌が健康的でした。無口でしたが陰気というのではなく、じっと人を観察しているような、もの静かな態度の人でした。その純子さんが、帰りの電車の中で、私に

小さなメモを渡したのです。

—— 今度の日曜、私とデイトしよう。11時に、自由ヶ丘のMの前にて待ってる。必ず来てね。可愛いノリコへ。純。——

変な人だと思うより、口で言えればいいことをメモにして、さも秘密めかして渡したり、女の子同志なのにデイトなんて言葉を使ったこと、可愛いノリコなんて言ったり、そうしたことに、私も何故か胸がときめいていたのです。それは、同級生でありながら、男性的で頼りがいのあるお姉さんのような彼女に、私も憧れに似た気持ちを持っていたからにほかならないのでしよう。

日曜日、自由ヶ丘で会った私達は、彼女の誘いで、彼女の自宅へ伺うことになりました。多摩川にほど近い高台の家は、広く、美しい白亜のコンクリート造りでした。そんなに広い家なのに、どうしたものか、彼女の家人に会うこともなく、彼女の部屋へ通されました。一人っ子だと言っていた彼女の部屋は、私よりもなお贅沢な調度で飾られていました。二時間近くもおしゃべりを続けた頃です。

「ねえ、ノリコ、あなたボーイフレンドはいる。いないの。よかったわ。絶対に男となんか付きあってはダメよ。これからは、私の妹になりなさい。わたし、ノリコが好きなの

よ。学校では今まで通り、だから二人の秘密にしましょう。こうしてお休みの日は必ず会いましょう。いいでしょ」

男性的な口調でそう言うと、ボンヤリ聞いている私の唇に、純子の唇が重ねられてしまいました。この一連の純子の行為に対して、私は何の抵抗感もなく、自分でも驚くくらい素直に、彼女の気持ちを受け入れていたので、彼女が学校でクラスメイト達の言う、エスの行為を私にしかけてきたのだということに判っていました。それに反感するどころか思春期の少女が、少し年長のお兄さんのようなボーイフレンドに甘えるような感覚で、彼女を見つめている自分に、もう一人の私は、頭の中でボンヤリと考えていました。

—— 私はもしかしたら、淳子先生やお母さんと同じ道を歩むのかも知れない。今、こうして純子さんに感じている甘いやるせない気持ち、私のファースト・ラブなんじゃないのかしら。——

（つづく）



人妻レスビアン

甘き蜜の滴り

K・O S A W A

わたしは自分が二十七才になる今日まで、こんなに素晴らしい愛の形があるとは思ってもみませんでした。三年前に主人と結婚したのですが、その、新婚時代でさえ、今ほどの幸福を味わった事はなかったのです。盛岡がわたしの出身地ですが、地元の県立高校で、わたしは演劇部に入っていました。そのとき、二年後輩のYが演劇部へ入部していなければ、今のわたしはなかったことでしょう。Yは、そのころから校内の噂にのぼるほどの美少女でした。色がぬけるように白く、そのうなじには透きとおるようにうす蒼い情脈が浮きあがっていました。Yの衿足の美しさはひとときわで、男の子でなくとも魅せられない者はいなかったのです。

そう、ちようどガラス細工を思わせるような華奢な感じで、触れるのがこわいほどの少女でした。演劇部の副部長だったわたしとYは放課後の多くの時間を共有したものでした。校内の廊下などを二人が歩いていると、誰もが嘆息まじりに噂をしました。

「わあ、演劇部の女王と王女が通ってる」

「ほんとだ、キレイだねエ……」

「あの二人は、やっぱりめだつねエ」

聞こえないふりをしてはいたものの、わたしたちは内心、どうしようもない高ぶりを感じていました。高校生特有の青くさい優越感に打ちふるえながら、うわべでは相手を見無視するように、ツンとしていたのも昨日のことのようです。

卒業後のわたしは地元の国立大学へ、Yは東京の短大へと、離れ離れの進路をたどりました。帰省するときには、必ずわたしへの処へ寄ってくれたYでしたが、ある夏休みを境に、Yの消息はぶつかりと途絶えてしまったのです。

Yの実家へも問い合わせましたが、そちらにも何ひとつ連絡がないということでした。卒業後、ある外資系の会社に就職のため上京したわたしは、休暇を利用しては心あたりの場所を歩きまわったのです。しかし、どうしてもYをみつけ出すことはできませんでした。妹のように想い、常に行動を共にしてきたYを失って、わたしはたまた

ない寂しさに襲われました。そんな寂寥感に打ちひしがれていたわたしの前に現われたのが、今の主人でした。わたしは自分自身の身体を吹きぬける風を受けとめてくれる防風の役を、彼に引きうけさせたのかも知れません。特別、胸があわ立つほどの激情がわたしの中に起こりはしなかったのに、彼と結ばれ、ありふれた形で結婚したのでした。某大学で天文学教室の助手をしている彼は文字通り学究肌の人間です。わたしと知りあうまで、女の人に手を触れたこともないという堅物なのです。そのころのわたしにとって、寡黙な彼のそういう処が、魅力にもなり、喜びにもなりました。けれども結婚後一年もたつと、地味な彼の長所が鼻につきはじめました。肌のぬくもりというものがあるで感じられませんか。夫婦の間になくはならない交流が、いつの間にか途絶え、わたしたちの間柄はどこかしらギクシャクとしはじめたのです。わたしは最初、子どもを産むことで二人の関係が甘やかなものになりはしないかと一縷の望みを抱いた時期もありましたけれど、

「一生、子どもは持ちたくない」という主人の言葉を聞いたときは、全てが冷えきってしまったような気持ちを感しました。主人のその言葉を聞いてからは、わたしは単なる彼の人形にすぎませんでした。味気ない砂を噛む思いの何時間かを、主人の望む夜だけ、主人のダッチ・ワイフとしてベッドを共にしたのでした。空しい夫婦の交接を、わたしはどれほど嫌悪したことでしよう。しかし、盛岡の旧家の両親は離婚など許してくれるはずもありません。主人にしても、専門の研究以外は、平凡なのがあたり前と思って恥ない人ですから、おしどり夫婦という虚像を演じつづけていたのでした。まさに、高校時代の演劇部のときのようになわたしは与えられた芝居を忠実に演じました。昼間は、会社勤めを続け、夜は虚ろな空間にじっと目をこらしていたのです。主人と暮らしはじめた二年間というものはわたしには地獄のような期間でした。何度、捨てばちな気分になったことでしょう。けれども、幸運の女神はわたしを見捨ててはいなかったのです。

あの日を思い出すだけで、わたしの心は喜びに打ち震えます。Yが再びわたしの前に現われたのですから……。連休の一日を、わたしは新劇の芝居を観るために新宿のKホールに出かけたのでした。斜め前の席に目をやったわたしは思わずあっと声をあげました。あの華奢な後ろ姿、細く折れそうな首、わたしが見間違える筈がありません。観劇もそこそこに幕間を利用して、早速、Yに合図を送りました。そのあとで、喫茶店にはいったふたりが、抱き合わんばかりに語りあったのはいうまでもありません。わたしは一方的に行方知れずになってしまったYを、さんざんなじりました。

「ごめんなさい。どんなに会いたかったか知れないのよ」

Yが涙ながらに話してくれた所によると、わたしがYを探しまわっていたころ、彼女は激しい恋に陥入っていたのでした。Yは愛した男の子どもをみごもりましたが、不実な男は、Yの告白を聞いた途端、ごみくずのようにYを捨てたのだそうです。Yはたった一人で小さな生命を葬りました。短大生

のYに女ひとりで産み、育てるなどできない相談だったので。Yは立ち直るのにかなりの時間を必要としたようでした。いいえ、Yは過去の全てから解放されてはいなかったのです。もともと細身だったYは一段とやせ細っていました。わたしが並んで歩くときそっと腰に手を廻すと、その細さがわたしの腕に伝わりました。くびれて折れそうなYの胴に腕をまわしたとき、突然、いとおしさがこみあげました。傷について故郷に帰ることもできず、傷心の旅に出ていたY。あの王女のようにだったY。誰もが目をみはり嘆息をついたY。そして、同じようにわたしも傷つき異性を以前のように素直にみるこ

とができなくなってしまうしました。しかし、わたしたちが愛に飢えていたのはどうすることもできない事実でした。一度は慣れた筈の肌を、このまま忘れさるのには二人とも少し若すぎたようです。その寂しさを埋めあわせるように、わたしとYは急に接近をはじめたのです。

郊外のわたしたちの家へ彼女を呼ぶことにしました。自分の誤ちのために尊い命を葬ってしまったことで、Yは全てに自信を失くしていました。閉ざされてしまったYの心は、なかなか開かれはしませんでした。わたしは、何とかして劣等感に責めさいなまれているYを元の姿に戻したかったのです。堂々と、どこにいても存在感のあったYにかえしてやりたかったのです。羽を痛めた小鳥のように、Yはわたしの胸で小さく震えていたのです。わたしは、やさしく羽毛を舐めてやる親鳥の役にすっかり心酔していました。もう、主人のはいり込む隙間もないほどに、わたしはYだけに夢中でした。最初のころこそ、わたしは二階、Yは階下と別々にやすんでいましたが、近ごろは、階下のYの部屋で殆んど寝室を共有しているのです。Yは、全てをわたしにゆだねている様子です。そして、主人が研究室に泊りこんだ夜、わたしたちはふみ越えてはならない一線を越えてしまったのでした。それまでも、一緒に風呂にはいって、お互の背中を流しあったりはしていましたので、その

夜も、いつもの様にふたりで入浴しました。細くて透きとおるような肌は、なめらかに光っていました。こわれてしまふようなYの肉体を洗っているうちに、わたしはたまらなくなっていました。いじめにYを抱きしめていたのです。あんなに可愛いかった美少女のYを、汚れを知らない無垢なYの肉体を、嵐のように襲っていた男を、わたしは深く憎みました。

「Yちゃん……可哀相なわたしのYちゃん」

しっかりと抱きしめて、わたしは泣きました。Yの身体も、小刻みに震えていました。きつと、Yも憎んでも憎みきれない相手を思いだしていたのでしょう。

「お姉さん……わたし、わたし……」

Yはくるりとわたしの方に向き直ると、くつきりとした黒眼がちな瞳を向けて、射すようにわたしをみつめていました。その瞳は、哀願していました。言葉にならない言葉で、わたしを求めている瞳でした。わたしには、Yが一言も語らなくても、Yの求めているものの正体が、はつきりとわかっていま

した。Yが家へ来てからというものの、わたし自身が何度Yに向って叫びたかったか？ ふたりとも飢えていました。心が、いいえ、それにもまして肌が恋しがっていたのです。自然に、ふたりはひしと抱きあいました。わたしの眼前に、うつすらと瞳を閉じたYの顔が大写しになりました。Yは心なしか唇の先をとがらせるようにして、わたしの唇を求めていたのです。わたしは、母親が幼児にするように、Yの唇に軽く接吻をしました。Yは、いやいやとかぶりを振ります。わたしは今度、Yの唇を舌先きで軽く押しあけ、彼女の唇の中に割り入りました。

「ああ……」

その可愛いらしい口もとから、かすかに吐息がもれました。わたしは、自分の内奥から湧きあがる激情を押さえることができません。荒々しく、男がするように、Yの唇を吸いました。Yのしなやかな指先きが、わたしの脚のあたりから腰へ、胸へと這いはじめました。わたしは恍惚のあまり、軽いめまいを覚えたほどでした。何ヶ月ぶりに感じる喜びだったでしょうか。こ

れほどの解放感の中で燃えたことは、かつてなかったように思いました。Yとわたしは指を絡めあい、放心したように、しばらく、そのままの形で立ち尽していました。

「ねえ、Yちゃん、もう一度よく見せて」

わたしがやさしく言うと、Yはニッコリと笑ってバスルームの中央に立ちました。たちこめる湯気の中に立っているYは妖精のように美しく可憐でした。自然に、指先きが動いて、わたしはYの肉体をなぞりました。小さくて彫の深い顔、細くとがったアゴ、薄くてこわれそうな肩、わたしは、こわれものにさわるように、Yの肉体にそつと、そつと触れました。わたしの指が、彼女の小さいけれども形よく丸みを帯びた胸にさわったとき、Yは、

「ああッ」

と、かすかに声を立てました。いつも、透きとおるように白いYの皮膚は湯気にあたって、ほんのりとピンクに染っていました。わたしの指先きは喜びのあまり、小刻に震えていました。わたしの指先きが、ピクンと上を向い

た小さな乳首に触れたとき、

「抱いてエ……お姉さん、抱いて……」

聞きとれないほど細い声でYが囁きました。わたしたちが、手を取りあうようにして、寝室に入ったのは云うまでもありません。水滴のついたままの肉体をふこうともしないで、ふたりはベッドに横たわりました。

「お姉さんにも触ってあげる……」

Yは耳もとで囁やくと、いくらか恥ずかしそうに、わたしの裸身を、その細い指先きでなぞりました。わたしは、この可憐ないもうとに過去を忘れさせるほどの愛をたっぷりとそ、いでやりたいと本気で思いました。Yの長い髪の毛を耳もとで、かきあげるようにして、カタツムリのように小さなYの耳朶をやさしく噛んでやったのです。Yは白いうなじをそらせるようにして、軽く呻きました。わたしは、自分の舌先きで、Yの全身をくまなく愛撫しました。わたし自身、現実の全てを忘れていました。Yが、おかえしにわたしの肉体を舐めはじめました。喘ぎ、呻き、荒々しい吐息が交錯して、ふたりはますます現実からの逃避に夢中にな

ったのでした。堅物の主人は、わたしたちの変化に気づくどころか、研究に熱中していて以前にも増して外泊する夜が多くなったのです。昼間は、Yもわたしも仕事を持っていましたので、今までどおり、何一つ変わらぬ風を装いました。ただひとつ変わったことといえば、今までは全く聞いたことのなかった主人に向い、

「あなた、今晚は何時ごろお帰りになる」

と聞きはじめたことでしょうか。主人は、我が家に若い女性が、ひとり増えたからといって、浮きたつような人間ではありません。いつでも冷静に――わたしには冷淡にみえるのですが――振舞っていたのでした。Yとわたしにとって主人のこの態度は幸いでした。誰に遠慮もせず、たっぷりとふたりの時間を楽しむことができたのですから。出勤の途中で、Yとわたしの通る姿をみると、誰もがふり返りました。そのまぶしいほどの視線を感じながら、Yが昔のように人目を魅く対象になりつつあることに、わたしはたまらない満足を意識していました。

わたしが愛することによって、Yが変身して行く――こんな素晴らしいことが他にあるでしょうか。このころのわたしは、Yをまるでペットのように可愛がっていました。Yはわたしにとっても忠実でしたから。

わたしが会社から疲れて帰ると、一足先きに帰宅していたYが、熱いコーヒーをいれてくれる。ソファに腰かけたわたしの肩にやさしく手をかけて揉んでくれる。まさに、Yはわたしにいたれりつくせりのサービスをしてくださいました。わたしはわたしで、帰路、デパートなどに立ち寄り、Yの好みそうな小物などを買い求め、そっと手わたしました。ぱーっと花が咲いたような笑みを浮かべて喜んでくれるYをみていると、給料の全額をはたいても惜しくはないと思うほどでした。日々の小さな心の交流が、Yとわたしを一心同体にしてくれました。主人の留守が待ちどうしいほどに、二人はお互を求めあいました。はじめて、Yのすばまりの中へ舌を這わせた夜のことは、今でも忘れられない……。その夜、ふたりでブランデーを呑み、軽やかな酔い

の中で燃えました。アルコールの酔いが手伝ってか、いつもより熱い裸身を絡ませながら、ふたりは止まるどころを識らぬように愛を確かめあったのです。ほのかなコロンの香りに包まれながら、Yの甘やかな体臭が、わたしの鼻をくすぐります。日毎にまろみを帯びてくるYの腰、日毎にうるおいを増してくる花芯。わたしは男を演じきることで、Yの愛くるしさに酔いしれたのです。たっぷりと舌を絡ませてはじめる愛のプロローグは、やがてふたりを深淵へと誘うのでした。わたしの指がYの裸身をくまなくなぞりました。Yが呼応して火照った脚をわたしの脚にからませてきます。除々に、襲ってくる身内からの高まりがわたしの全身を包みました。Yの丸やかなふくらみに舌をあて、わたしはその乳首に軽く歯をあてます。Yが身もだえて、全身を弓のようにしならせ、深く吐息をもらします。上になり下になり、どちらがYかわたしかはつきりしないほどひとつになりました。高まりの中で、わたしの舌先きはYの腹部を這いめぐり、いつしかやわらかな叢に到達したので

した。ほのかに香水石鹸の匂いがしました。Yの柔らかな秘部の美しいピンクの突起がわたしの舌に触れたとき、Yは呻き声と荒々しい息づかいの中で激しく身もだえしたのです。Yが興奮するたびにみせる反応は、わたしをますます燃えあがらせます。かすかにYの女が匂いました。わたしの舌は一匹の動物のように叢の奥底にあるすぼまりの中にもぐりこんだのでした。Yの声は一段と喘ぎをまし、空中をつかんだYの腕は、わたしの背中に強く押しあてられて、よく磨かれたYの爪が、わたしの背中に跡をつけたのです。Yのすぼまりの中は、やさしい温もりをたたえていました。わたしは未知の世界を探りあてるように緻密な秘奥を吸いました。Yはわけのわからぬ大声の中で、上半身を起こすようにしながら、わたしの下腹に熱い息吹きをふきかけ、接吻の雨を降らせるのでした。まるで、さなぎが蝶に変身でもするかのように、わたしとYはひとつになって、華麗に花園を舞い踊るのです。

わたしは今や、Yのいない生活なんて考えられません。ほとんど絶望の日

々を暮らしていたわたしに、こんな日がめぐって来るなんて、奇跡でなくてなんでしょう。Yのしつとりと湿りを帯びた裸身の一つ一つを、わたしは目をつむっていても想いおこすことができます。Yが愉悦の底で悶える声は部屋中に飴してわたしの耳をくすぐります。わたしの花芯が呼応してしつとりと湿りはじめます。ふたりがひとつになったとき、目の前は蒼い空間となり原色の蝶が乱舞します。時にはYがたつぷりと蜜をたゝえた花になり、時には、舞い上がる蝶となり花芯に唇をあててその蜜を吸うのです。

人はこれをレズビアンと呼びます。そして、さげすみの視線をなげかけるのです。しかし、わたしたちにとっては、何にも変えることのできない桃源郷。何ものにも侵すことのできない秘境。レズビアンが市民権を得ようと得まいと、いまのふたりにとっては無縁のこと。ふたりで抱きあって小宇宙を漂うばかりなのです。



女 人 切 腹



伽 羅 の 香

中 塚 展 子

昼下りのバスルーム。

思いきり泡立てた熱めのバスの中に、私は身をのぼして横たわる。香り高いシャンプーが全身の毛穴にしみこむようだ。しみこめ。しみこめ。いつそ血管の中までしみこんで、かぐわしい血がほとばしったらどんなにすてきだろう。お湯の中で身体を浮かすように少し反り身になって、両手で湯面をおおう泡をかきわけると、私のおなが丸くぽっかりと顔を出す。まっ白な泡にとりかこまれて、ピンク色に上気しているすべすべのふくらみ、その中心に深くくぼんでいる縦長のお臍。私はまるでペットを愛撫するように、掌でゆっくりと円を画くようにさすってやりながら心の中で呼びかける。

（もう少し待ってね。あとでいいこととしてあげる。おどろかないで……）

もう一度、身を沈めた私は、思いきって立ち上りバスタブの栓をぬく。三時にはヒロシがくる。心の余裕を持って迎えたい。最後のデートだもの。

鏡の前に立つ。今日はパフュームは抜き。全身にバニシング・クリームをていねいにすりこみ、バスローブ一枚をはおって浴室を出る。

すっかり支度の整っている居間を、もう一度ちよっとのぞいてから、三面鏡の前に坐って念入りに最後のお化粧にかかる。いつもより少し濃い目に、唇も眉もくっきりと引

く。上気している今、このくらい派手に見えるくらいでちょうどいいだろう。

アップにセットした髪を軽くととのえ、私は自分のメークアップに満足してスツールから立ち上る。するりとバスローブをぬいでハンガーに掛け、生まれたままの姿でサイドボードの上の衣裳ボックスの蓋をパチンと開く。たちまち、むせるような伽羅の香が、部屋いっぱいに拡がってゆく。

白無垢一式。仕立上った日からずっとボックスの中に、伽羅の香水と一緒に密封されて眠っていた、私の死出の晴着。

私は両手で捧げるように着物を取り出し、その下に入れておいた、これも白の、短か目の腰巻と肌襦袢を素肌の上に付け、白無垢を持って三面鏡の前にもどる。

鏡の中の自分をしっかりと眺めながら、私はゆっくりと白無垢に袖を通す。わざと帯はつけない。ゆるく前をそろへて腰紐で止め、襟は深めにきっちりとおわせて、ウエストを幅広の白いしごきできゅっと巻き締めただけ。

ぼん、と、しごきで引きしめた下腹を叩いて、かるく斜に身をそらすと、ちよっと出を待つ役者の気分。鏡の中の白一色の私は、まるで鶯娘、雪女郎。濃い眉墨と唇紅が思ったとおりの効果で、われながらうっとりするほど。いいじゃない。これがこの世の見おさめだもの。

しばらく鏡の中の私に名残りを惜しんだ私は、さよなら、

と両側から三面鏡をとじる。鏡よ鏡、鏡さん、もう誰もうつさないでね。

時計を見る。二時十五分。

まだちよっと時間がある。急に空腹を感じる。あたりまえだわ。今朝のコーヒーから、まだ何ひとつお腹に入れてないのだから。すこし力をつけなくては。仕損じたらみじめなもの。そうだ。あれがいい。

冷蔵庫を開いて、タンブラーにミルクとトマトジュースを半々につぐ。軽くステアしながら、思いついてウオッカを少し加えてもう一度ステア。

おいしい。はらわたにしみこんで血管に流れこむのがわかる。これブラッディ・ノブコって名、すてきだと思わない？でも、もうおそいわね、誰かに教えてやりたいけど。

もういい。あとは私の部屋、すべての支度がととのった白布の上で、じっと目をとじてヒロシを待つだけ。ドアのキーは彼が持っている。

玄関に気配がする。カチャッとロックのはずれる音。ドアをとじる軽い振動。そしてすぐに内側から鍵をかける。ヒロシのいつもの癖。

シャツとアコーディオン・カーテンを開く音と共に

「ノブコ いる？」

「あたしの部屋。どうぞ」

のどにひっかかったような、かすれた声。いけない。私

としたことが。おちつけ、展子。

「なんだよ、そっけねえな」

さっとフスマを開いたヒロシの立ち姿が、そのまま棒のように硬直した。

「な、なんだ。どうなってるんだ、これ」

唇を開いたまま固定したヒロシの表情を、私はしっかりと見つめて

「ごらんの通りよ」

かたづいた部屋の中央に敷かれた白いシート。その上に正座する白装束の私。膝の前に置かれた白木の三宝の上の白鞘の短刀。その白一色の反射が映ったかのように、ヒロシの顔が蒼白になる。

「悪いじようだんはよせよ」

しいて笑おうとするヒロシの表情はただひきつっただけ。

「じようだんではないわ」

私はまともにヒロシの目を凝視しながらいう。

「あたし、見てしまったの。こないだの雨の夜。外苑であなたとルミ子のこと」

「……………」

「0077なんてキザなナンバーの白いピアツァ。ルームライトを消していたって目立ちすぎるわ。雨の午前二時すぎだって、外苑には人通りはあるのよ」

「すまん。あやまるよ、このとおり」

「あやまらないで。あやまる男の姿なんてみじめ。ゆる

す女はいっそうみじめ。最後にそんな姿を見せあうなんて嫌。あたしは今日これから、あなたの目の前で永久にお別かれします。あなたはそこで最後まで見ているのよ。男ならそのくらいの責任はあると思うわ」

「ノブコ。やめろ。考えなおせよ」

「考えなおせなんて、半年くらい前、あなたとルミ子のうわさをきいてから、ずっと考えていたのよ。でも、本当ならあなたの口からいいだすまで、こちらからはいいまいと思っていた。それなのに、あたしが先にのっぴきならない現場を見てしまった。もう駄目。あたしは別れます。でも生きていてはとて別れられない。だから死ぬのよ。そして、死ぬ時はせめて、自分で選んだ方法で死にたいの。あなたに見とどけられながらね。自殺の初めから終りまで見とどけてもらうには、切腹しかないもの」

「ば、ばかな。切腹なんて、できやしないよ。よせ、よせよ」

「男のくせに、だらしがないこといわないで。昔なら男も女も、屈辱を受けたら切腹するのは当然のことよ。あたしもそうします。痛くたって、苦しくたって平気。女でもこんなに腹を切れるということを見せてあげるわ」

「…………ノブコ……………」

ヒロシはまるで自分が切腹しろといわれたように、青ざめてふらふらと柱にもたれかかる。額に冷汗のつぶが浮いている。オレンジ色のトレーナーにジーンズというスタイ

ルが、この部屋の雰囲気と、何とも場違いに見える。そんなヒロシを見ると、小気味よさと共にちよつと心がゆれるけれど、そのみれんをふり払うように、私はキュツと唇をかんで荒々しくしごきを解き、ざつとたたんで右わきに置く。腰紐をゆるめて、ちよつと腰を浮かせ、下腹いっぱい押し下げ、腰骨にかかる所でしっかりと締め直す。ゆるんだ襟に両手をかけ、ぐつと左右にかき開けると上目づかいにヒロシにちらと視線を向け、

「しっかりと見ているのよ」

いいつつ、両腕を袖口からくぐらせ、グイと一気に、襦袢もろとも白無垢の両肌をおし脱ぐ。

ヒロシの蒼白な頬に、かすかな紅潮がひらめいたように見えた。私はかまわず、ウエストをおおう腰巻のよしこみをほどいて大きくひろげ、下腹をじゅうぶんに露出する。両下でぐって腰紐ごと、お臍の下まで思いきり押し下げると、もうすこしでヘアがのぞきそう。でも、はずかしさはない。心と肉体が分離しているみたいだ。これから切り開かれようというこのお腹が、まるで他人のもののように目にうつる。

思うままに上半身ヌードになった私は、前の三宝の上の短刀に手をのばし、左手で鞘を握って目八分に捧げて軽く一札すると、右手で柄を握ってスツと引き抜く。鞘を左側に置くと、三宝に敷いてあった杉原紙を左手にとって、六寸五分、焼刃のにおうような刀身の切先二寸余りを残して

巻きつける。

腹切刀の中ばを右手で逆に握り、膝の上に拳を置くと左手で三宝を取上げて後にまわし、腰を浮かせてお臀の下に入れ、その上に中腰の姿勢となる。両膝が左右に割れ、お腹がやや反り気味に張って突き出し、まさしく切腹の晴姿。すべての準備を終えた私は目を閉じ、左の掌を下腹にあてて、ゆっくりと撫ぜまわす。まず、切るべきお臍の下を左から右へ、そしてみぞおちから臍下のつきる所まで。さらにお臍の周囲、饅頭のようにこんもりと丸く盛り上ったふくらみを、円をえがくように二度、三度——それにつれて、下腹深くから湧き上ってくる快感は次第に荒々しい情念にまで昂まって、私はいつしか呼吸をはずませて身もだえている自分自身に気づく。

そして、軽いオルガスムス。

しばらく身をそらして硬直していた私は、ややあって目を開くと、さっきよりもずっとやさしい声でヒロシに語りかける。

「ヒロシ。さよなら。そこから動いてはダメよ。そのまま、私が息絶えるまで見ていてちょうだい。そして、いつまでも覚えていてね。警察にはあなたが来た時にはもう死んでいたといえればいいわ。苦しんでも手を出さないで。あなたをまきぞえにしたいくないから……じゃ、ゆきます。ヒロシ、楽しかったわ」

刃の中ほどを握った右手の拳を見つめながら、ゆっくり

と左にまわし、するどい切先を左の下腹、腰骨のすぐ上にあてがう。かすかな冷たさと、チクツという感触。

「ウッ」

左手を柄に握りそえると同時に、お腹を突出するようにして一気に突き刺す。プスッと二センチほど入った切先を、力をこめてグーッと、右手の拳が腹に当るまで押し込んだ。

「くうーッ」

熱いとも、冷いとも、痛いともつかない激しい感覚がズーンと突き上げてきて思わず声をもらしそうになるのを、歯をくいしばってこらえる。刃が腹壁を貫いてスッと軽くなった感触がわかる。よし、このまま一文字に。

私は両肘を張り、身体をねじるようにして全身の力をふりしぼって刀を右へと移動させた。思ったほど痛くはないが、うつむいてお腹を眺めながら切ろうとするため腹壁がゆるんで波うち、とても切りにくい。それでも十センチくらい裂けた左下腹から血汐がダラダラと流れはじめ、白衣の膝を染めてゆく。

必死に唇をかみしめて耐えているので声こそ洩らさないが、自然に呼吸が荒くなり、胸も腹も激しく波うつてくる。これではいけない。力のあるうちにひと思いに掻切るのだ。

私は刀を腹に刺したままぐっと胸をそらし、仰向いて天井をカッと見つめたまま大きく一息すいこんでムッと呼吸をとめると、もう一度ぐいと押し込んだ刀を、息をぬかず

に夢中で右へ力いっぱい引いた。

ああ、切れる。ぐーっと刃が右へ移動するのがわかる。お腹の奥からわき上る激痛。なんの。もうひと息。がんばれ。

「う、うぐッ」

刀が右の腰骨にガキッとあたって止った。思わずいきが洩れる。急に緊張がゆるみ、私はガククリと前に倒れそうになる上半身を、刀から離れた左手を膝についてささえた。うつむいて自分のお腹を見た時、私は覚悟の上とはいえ、そのあまりの凄惨な光景にショックで目がくらみそうになった。あの美しいお腹が一番ふくらんだ臍下三センチくらいの所で左から右まで三十センチ近くほとんど完全に一文字に切り裂かれ、上下にパッキリ割れた切口のへりから黄色い皮下脂肪が房状にはじけ出し、その間からドクドクと溢れる血汐は、三、四個所から脈打つように飛び散って、もう切口から下は膝へかけて真赤に染まっている。そして、その切口をおしわけするようにして、フランクフルト・ソーセージそっくりのピンク色の小腸が、血にまみれてヒクヒクうごめきながら、あえぐたびに少しずつハミ出してくる。むっとするなまぐさいにおい。

ああ、とうとうやった。切腹、こんなにみごとに。私はくらみそうになる目をカッと開いて、うっとり自分の腹に展開している華麗な光景を眺める。もう全身が燃え上っているようで、痛いのか苦しいのかわからない。いきがせ

つない。私は無意識のうちに胸を波打たせ、肩で荒々しい呼吸をしている自分に気づく。しかし、そのわりに胸の中にはちっとも空気が流れ込んでこない。

いけない。覚悟の十文字腹、早く仕とげなくては。今のうちなら、まだ力はある。今ならできる。今なら。

私は左腕を力いっぱい突張って上体を起こし、右手の短刀を持ち上げて鳩尾にあてようとして、それがあまり重いののでびっくりした。がんばれ、展子。私は左手を膝から離して右手に持ちさえ、ゆっくりと短刀を持上げて、ゆれる切先を鳩尾へ向けた。

反らすように身体を起こしながら、私はヒロシを見た。彼はまだ部屋の戸口に立っていた。表情も変らないようだった。もっと正確に言えば、さきほどの表情が硬直して顔に貼りついていて、ただ眼の光だけが違っていた。熱っぽくうるんだ陶酔した眼つき。ウェイ・ショーターのサックスが高潮してきた時にヒロシが見せる、あの忘我の眼つき。

ヒロシ、好きよ。見ていて。私の最後の晴れわざを。

切先を鳩尾に押しあて、刀身を直角に立てて、私は力いっぱい突刺した。ブスッ、というたしかな手ごたえ。

その時、ものすごい衝撃が鳩尾から脳天へ突きぬけた。下腹を掻き切る時の痛みとは比較にならない、激痛と吐気と目まいが一緒になったようなすざましさだった。目の前が一瞬に暗黒になった。

ぎゃっ、ぐえーッ。

絶叫しながら、私はそれでも夢中で、身をそらし、両腕をいっぱい伸ばして、下腹へと刀を押しおろした。熱い苦い液体がのどへグワツとこみ上げてきて、パツクリ開いた唇からドツとあふれ出た。

苦しさに思わず大きくのけぞった私は、血と胃液をゲブゲブ吐きながらドタリと後に倒れ、大の字なりに手足を投げ出したまま失神した。ぐわーんと耳が鳴り、脳の中を黒い竜巻が駆けめぐっている。

何分たったのだろうか。ハッと気を取りもどした私は、嵐が静まり、痛みも苦しみも嘘のように薄らいでいるのを知った。頭の中には灰色のどろどろしたものが、いつぱいにつまっているような感じた。

モウロウと霞んだ視野が、次第に明瞭になってゆく。その中に浮かんでくる男の顔のクローズアップ。

「……………ヒロシ……………」

「ノブコ！」

私はまだ生きている……………それを確かめるように、私は懸命に視線を据えて、男の顔を凝視する。

「……………」

たしかにヒロシだ。だが何という変りようだろう。これがさっきまで、部屋の入口に立ちすくんで青ざめていた彼とは……………別人のようだ。

膝について私の顔をのぞきこんでいるヒロシの目は血走

って、ギラギラと輝いている。汗に濡れてひくひく痙攣している引き締まった頬は、獲物に飛びかかる直前の狼のような残忍な活力にみちている。あの時の顔。私の一番好きなヒロシの表情。

突然身体の奥から、猛烈な欲情が燃え上ってくるのを感じて、私は思わず口走る。

「ヒロシ、抱いて！」

「う……」

「抱いて……最後に……あなたの女が死ぬ前に……抱いて！ヒロシの男で突刺して殺してちょうだい……早く……生きているうちに早く……そのまま……死にたい……」

「ノブコ！」

ヒロシは私の顔を見つめたまま、すっくと立ち上ると、手早くトレーナーとジーンズを脱ぎすて、私の足の方にまわった。鉛のようにしびれて重い両腿が、ぐっと押し広げられるのがわかる。

「うーッ、ヒ、ヒロシ！」

ずぶっと一気に股間から腹中に突き入ってくるヒロシの男のたくましい衝撃に、私は思わず絶叫した。ああ、こんなに太いの、こんなに強いのはじめて。ああ、まだ感じる、ヒロシ、すてき、ああ、好き、好きよ。

「ノブコ……ノブコ……俺だぞ！」

「ハ、ハイ、わかる、わかるわ、ああ、うれしい、うア……」

ぐりッ、ぐりッと子宮が突き上げられる。その強い圧力を受けて十文字に裂けているお腹から、ハラワタがむくむくとあふれ出すがわかる。ああ、ヒロシ、見て、これがあなたの愛した女のハラワタよ。よく見て、そしていつまでも忘れないで。

「ヒロシ、うれしい、ああ、うれしい、い、いく、死、死ぬウ——ッ」

子宮が爆発するような衝撃を感じた時、私はすべての内臓が溶けて熱い液体となり、ドツと流れ出すような快感と共に、

「うお、うお……」

獣のような絶叫をあげながら、深い暗黒の中に沈んでゆくのだった。二度と浮かびあがることはない、深い、深い、暗黒の淵の中に……

「ふーん、それがノブコの白昼夢か。女がひとりである時って、怖いなあ」

うららかな小春の陽射しのさしこむマンションの四階の窓辺で、ヒロシはジン・トニックを片手に、眼下の駐車場の車の出入りを眺めながら、ものうい微笑を浮べる。

「……………」

私は無言ですっと立って、壁ぎわの化粧だんすの引出しをあける。

「夢じゃないわよ、ほら」

入江俊夫 凄絶画譜！

ぎくりとふりむいたヒロシは、私の手の紫のふくさに包まれた長いものを見て顔色を変えた。
「悪い冗談はよせよ」

しいて笑おうとするヒロシの頬はただひきつっただけ。しかしその中に、ちらりとあの幻想の中のヒロシの表情がひらめいたのを、私は見のがさなかった。



◆艶笑コレクション◆

蒐集・醉狂老

難読名刺

世の中には、どう呼んでいいのか判らぬ難しい姓名の人がいるものだ。また、読み方によっては、思わずニヤニヤしてしまう名前もある。それがまた、印象を深めることもあるのだが。

占図理大学教授
親相学博士

中足立通

ジャマングラー・コンマニグット医療会
全本当尼一番商会OK支店長代
御万湖区事呂会顧問
鎮浦龍田玉蘭社正会員

本社 阿那佐賀市志多区成田町羽目通六番
支店 横羽目市本間町茶臼山佐根久尼通
電話 八八九・一一四・一〇七四・一一四・二二八八
二六二六・一九四・一九一九・七九四九・二九四
私寓 津二二三番 桑津二二五番
自宅 和田市音区唐油栗湖持町第四
別邸 東京府下内出町台間田字紀仁一九八八

支店長代 好來八太郎

シー、ヤマカ、コンマニグット米粉商會

本店 名古屋東区山崎町左入七八〇
電話 本一、二、八八九・二九四
支店 下田府下内出町第四五九九地
電話 近五九九・一〇、七一〇、一七

御奉神邊紋仁商会
賜 真 書

支店長代 紗施真澄代

支店
京都合附寺市天町第四四四四
電話 一、九四・八八九・二二八八・一九一九
下田府家内出町第一五九九地
電話 取寄 一一〇四又四四四

御名古路司

大日本高級水揚調魚林式第四
十八號

事務所 飯塚佐賀市下區成田町五番初旨
電話(飯方) 八八九 四四四 五五四 五九四
五九五九 七九七四 八八二二 二九四
自宅 飯方自市木間町走白山城見境
電話 三番 三番 桑津三番 三番 一〇三番



鎮浦龍田玉蘭社々長
大瀨礦區白勞會々長
ジャマン・ガー・コンマニークツト醫療會

全本島尼
一番商會

支店長代

平野小龍太

「通稱」吉木多八郎

支本店
私書
自邸
別邸
電話

阿部佐賀市下區成田町羽目通五番
橋本市本間町茶白山實久尻通
沼津二三番桑津二五番
和田市帶音區唐由栗湖捨町第四一五号地
東文府下内出町台間田字紀仁一九四・八八八
八八九・四四四・一〇七四・二一四・二二八八
二六二六・一九四・一九一九・七九七四・二九四

架又奈山多世久羽正增可田茂十小歌大庄仁異
設根田澤井波井波道雪兒成戶手鳥笑鳥鳥間動
中葉勝水猛田壽撫茂正宗琴熊友唐汀藩金留記
津子代陸鷗行幾々堂渡一行榮雄眞傑休市人話番号

香川縣茶人會々簿

失神と失禁

蕩洞

さて、このテーマーのおはなしに入る前に

一つ「露出症」という事に就いて、はじめに是非おききいただきたいのです。「露出症」——あまり男にはきかないはなしだと思うのですが、ワタシの大変にうるさい研究ずきの性友の説に依ると、女性の数とほぼ同数にある、ただ、男のは絵にならない、絵といってもこれは言葉の綾で、男のはおかしくも面白くもないから喧伝されるパーセントが少い。だから男にはあまりない、と思われているが、そんな事は無い、といえます。

しかし、この説、果してホントですか？

ワタシのはなしはこの同性、男のではない、ちゃんと絵になる女性のそれをおはなししたい。さて、そこで「何故だろう？」という疑問をワタシナリ

に有史以前にさかのぼって（オオゲサデスナ）推理してみますのに、かつて

まだ女性ではなくメスであった頃、生理は今と変りはないでしょう。月に一度、子宮内の古くなった内壁がくずれ落ちて、経血となって外部へ流出する。そして、又新しい内壁が創られ、受精卵と精虫の合体が、寝ごこちよく着床できるようにソフトに出来上る。この頃が又一番メスの性欲の昂進する期間、そうでしょう。このメカニクがなければ、とうに我々人類は絶滅しているわけです。そこでオスの精虫がほしい、つまりポルノチックに云えば、オッパイがチクチクして、なんとも体の中で、得体の知れないものがうずきまわる。

さて、その為にどうしたか。風上の丘の裾あたりで、ドッカとお尻をつけて、風下に向け拡く股をひらく。そうすると子宮の深奥からジワジワとして

くる愛の泉。淫液の臭いが風下の原ッパで、「今夜のオガスは？」なんて採食に余念のないオスの鼻さきに強烈に匂ってくる。「オヤッ？」てんで彼はそのルーツの風上をみると、なんとこの淫艶きわまりのない風景じゃないか。「チキショウーツ」てなもので彼は夢中で疾走する。この際、脚力の弱いモタモタしている仲間をどんどんと追い抜いて行く。この辺に強者生存の冷厳な自然界の摂理がある。そして、無事にその新鮮な子宮内へ精虫をおくりこむ。ということになり、さて、それから気の遠くなるような零が無数につながる幾世代を経て今のこの二〇世紀の後半にみなさんが居て、私も居る。その遠い遠いご先祖様のメスの遺伝子が、細分化されながらも今も微妙ながらも残存されている。とまあこのように思推するわけです。だから、この高度の文明社会の中にも、女性の露出願望というのがあるわけで、その証拠には、どうもそこまでも前時代へさかのぼって行くという勇氣はとでも持てない、という大多数の女性の為に一流の下着メーカーが、ほんの一にぎりのス

ケスケのスキヤンティ・ショーツをど
んどん量産しているではないですか。
だから、みなさん、うれしいじゃあな
いですか。知性的でかつ美しいファシ
ョン雑誌の中から抜け出てきたような
レディが、ひよっとすると肌になにも
つけずに、そのチラリッというスリリ
ングをたのしんでいるかもしれない。
その倖幸に恵ぐまれる率は、宝くじよ
り悪いかもしれないが、決してナッシ
ングというのではないわけでしよう。
まあ、このような想像のつばさをひろ
げてあえかな緋色の夢をみましよう。
さて、ここで本題に入りますが、ちょ
っとその前にワタシの略歴をおはなし
します。只今六〇ジャスト。三十代か
ら四〇代は専らハイミスキラ、五〇
代は三Pのセックスアシスタント。そ
れで、コンタクトのあったご夫妻は百
三十組ぐらいの数で現在にいたってい
る。というわけ。東京のダウンタウン
の裏長屋に住み、いまだ弁当カバン肩
にかけて、しがない身すぎ世すぎをし
ている、というのが現況です。そこで
ワタシのこのおつきあいのあった百五
十人からの女性方（勿論、プロ及びガ

キの頃のお医者さんごつこの可愛い
パアトナーは含まずですが）失神が二
人、失禁が三人という数字になります
が、「今日は別は別になんでもあります
せんでしたが、ウチのにもその癖があ
ります。という夫君達のおはなしなど
から考えますと、実際はもう少し多い
数になると思います。しかしどうもこ
のご婦人方のそれぞれのパートナーが
みな一様に予想外なほど無関心なの
ですが、やはりこれは馴れとでもいうの
でしようか、このオルガスティクの深
さを、痴語とともに如実に貴重ともい
うべき珍しいアクションで示して下さ
れる絶妙さを、どんなにかと思うのは、
どうも我々外野の者だけのようです。
それでは、まず失神のお一人。彼女は
無言のまま、スウィーツとおちるよう
に失神され、ほどなく賞めて、ワタシが
寢室のすみにムード作りの為にキャン
ドルバーを真似て灯けておいたロウソ
クのゆらゆらとゆれる焰を不思議そう
なご表情で眼をパチパチさせて眺めて
から「私、失神したのではないでしょ
う」と、暗に否定なさるようなニュア
ンスでおっしゃいました。失神小説な

んていうのがブームの頃で、自慢なさ
ればとて、否定なさる事は無いだろう
にと、その時のワタシは女心の不思議
さを感じたものでした。もう一人のお
方、云いわすれましたが、どちらもお
年は三〇年輩でしたが、この時は彼女
のハズとワタシともう一人サブの若い
男との三対一のプレーでしたが、はじ
めから嬌声もモーションもかなり派手
な感度良好なお方でしたが、まさにい
まわの際のような「ギャアッ」とい
う凄まじりヨガリ泣きとともに、スト
ンツとこの状態。三番バッター、若い
サブのアタックの時でしたが、傍らの
夫君はもう夢中で、今までの淫楽きわ
まれり、といったような表情とはうっ
て変って心配そうに真剣そのもの、体
のそこら中をさすったり叩いたり、神
秘の指をいれたりなどしたのですが、
なかなか賞めない。ワタシもいささか
あわてて、サブに湯殿から冷たくした
タオルを持ってこさせ、額や頬にあて
てその上からピタピタと叩いたら、ま
あそれにあるかあらぬか、ようやくと
覚めてきたという状態でした。
あとで夫君のはなしで「かなり前に、

勿論、家内と私の二人だけでのセックスの時に、このような事が一度だけあったのですが、その時はすぐ眼がさめたのです。今日はよっぽど快かったのでしょうか、あんなコワイようなヨガリ声は、私もはじめてです。とうれしうにおっしゃっていました。さて、引き続き失禁の方に移ります。これを云い得て妙「愛尿」といいますが、いずれ文字の本来、中国からの伝承詞でしょうが、まったくうまく表現するもので、前者の失神にもなにか無いか、と思ったのですが、どうも寡聞にして思い当たらない。そこでふっと「閨喪」(けいそう)ねやにうしなう、なんていうのはとヒラメイタのですが、待てよ、小説家で中国文学者の駒田信二さんあたりがなにかに書いていたのではなかったかしら?、とも思い直してみたのですが、ともかく本文に入ります。六〇才ぐらいの人品いやしからぬ、社長か会長タイプの風格の男性に、その愛人とおほしき四〇才ぐらいの豊満な感じの美しい女性、こんなペアの方達でしたが、プレー前の食事の時、ワタシは不調法で煙はやるが液の方はやれない

ので、専らお二人だけでさかんにビールをお呑みになられた。たいていどちらのカップルも、はじめてのプレーの時は、相手女性の恥心を取り去る為に、彼女におすすめになりご自分も呑むのですが、さてホテルの一室、もうのつけからのイントロのワタシのセックスマッサージだけで、豊艶に匂う白牡丹のような肢体、ベット狭しと、オバーに云えば七転八倒させての悶え。やがてワタシの性技は進み、舌戯となり、彼女の股間にうづくまれば、またまたオバーに云えば、ビューツ、ビューツとはねるような感じの舌ざわり。とても呑みこんでいるのに間に合わない。最初はむせて、鼻から出そうになったほど。傍に脱ぎすててある彼女の寝衣を、口を離さずにたぐりよせ、重ねるめてお尻の下に敷くようにしたので、とうとうそれもあり下の方までグッチョリ。インサートはなしなのに、もうこれだけで何回かのアクメを反復して、終りには粗い漆黒のヘアーもあらわに放恣な好で伸びてしまわれましたが、事後の彼女、この行為をはじてか(ちいともはずかしがる

ことはないのですが)可愛想なほどしよげて、下をうつむいたきりのお姿が大変に印象的でした。

次は、やはり前の方と同じ位のお年頃でしたが、これも事前にパートナーから、そのような予備知識を教えられることなくの突然だったのですが、舌戯のワタシの口の中に、今までの淡い酸性の濃度のあった感覚が急にサラとした感じ、つまり舌ざわりとでもいいいますか、に変わりました。「オヤッ? オシッコシャワーだな?」と突嗟にうけいれ態勢をとりましたのですが、さあそれからの彼女が大変、「デルウー、デルウー、イイーツ、イイーツ」とまさに狂乱の態。この時ほど「ああ、わが舌戯もまさに神技に至る」なんて思っている悦に入ったことはありませんでした。さて、最後のお一人。この方は時はまだ湯殿の中で彼女へのワタシの泡おどり?の時、たまたま秘所にあった掌に温いお湯の感じ。はじめは彼女自身も傍のバスタブから湯をくんで肩にかけていたのが伝わってきたのだ。と思っていたのですが、そうではなかったのです。やはりワタシの指の触撫が、

いつもの夫とは異なった感覚の強烈な刺激で恍惚の高みにおしあげられ、思はず漏らしてしまった。というのではないでしようか。以上、まあ五ツの体験なのですが、読者諸氏もさまざまですから「愛尿ネエー、しかしどうもいただけませんか……」とおっしゃる方もおいででしよう。が、しかし、ここで冒頭のはなしも出ますが、この露出にしても愛尿にしても、美しく粧っている成熟したレディや、まだ新鮮な青さの匂うギャル達の、その神秘の裏側に、このような生々しい女の性の衝動があるわけです。セックスとは、時には苦行にも似た苦しみの時もありますが、総じては、ひそやかで密なる愉しみと喜びがあるわけです。いざや重厚で、緋と紅の妖しい甘美な夢をみましょう。



湯の町情話

楚々亭至好

一

勾配の強い坂道を、爆音けたたましく上って来た一台の自動車が、温泉宿K旅館の前に停ると、中から降り立った男女は、お新と英治であった。朝の湯の街は寂然として静かに、空気の色もしめって見えた。

英治は、上布の帷巾に絞りの帯といふいでたち、お新は粋な明石に、薄色の単衣帯も淡白いと、アップに結い上げた襟元が震いつくほど美しい。彼らは女中にみちびかれて、奥二階の崖に面した、八畳の閑静な室に通されたが、宿の浴衣に着替えると、入浴は後のこととして、そこに二人は打寛ぐのであった。お新は退っていく女中を呼止めると、なにがしかの紙幣を手早く懷中に包んで握らしてやり、そして何か小

声で囁いて、

「……では、何か用があったら呼びますわ」

女中は笑いながら、英治のほうをチラッと見たが、

「どうぞ、ごゆっくり」

と云ふと、静かに襖を閉めて去った。

かう云ふ所の女中などは、一目見ただけで客の素性を知ってしまったもので、万事にかけて如才がない。殊にK旅館は、お新の馴染の宿であった。女中の氣転か、この室などはかうした世を忍ぶ男女の秘そやかな逢引には、実に応はしいものであった。廊下の襖は閉めきつてある。開け放った縁側の向ふは翠嵐したたる懸崖で裾に清々たる小川の流れが、銀鈴のやうな音をたてて流れ、冷い風が颯々と吹いて来て寒いほ

ど涼しい。蟬の声が喧しく聞えてくる。ほかは、人のけはいもしない。湯の宿の朝は静かだ。二人は縁側へ藤椅子を並べて腰を下した。

お新は英治と二人だけの世界で今日の一日を楽しもうとするのであった。ここは彼らの町を距る、僅か五里、幽翠閑寂の温泉地として古くから有名な所である。今は国道も開けて、自動車の便があるので、かうした人達のためになかなか繁昌するのであった。

お新は、煙草をふかして表の景色を眺め入っている英治を見かへりながら、「まだお昼までには、だいぶ時間があるわね。ちと横になりませうよ」

と押入から布団を出して床をのべ、男女の枕を二つ並べた。女は崩れるやうに膝を落して床に坐ると、

「さあ、あなたもいらっしやいな」

と、英治をうながした。彼女の顔には淫らな色が濃厚に漂ふ。腰にからんだ淡紅色のしごきが艶めかしい。やがて、すぎるやうにまとはりついた二人は、口を吸合ったまま床の上へくずれた。女は髪をちよつと気にして枕に頭をつけると、猶予もなく男の××を自分の××にあてがい、グツと腰を持ち上げ、簡単に根元までのみこんで、フンフンと抱きしめ抱きしめ、腰を揺るのであった。かうした仲の二人である。女は初めから××をピチャつかせていたが、男の物も木のやうに硬直してキンキンと跳返っていた。英治は落着いた気持で緩々と使ひかけた。女は堅く抱擁した男の頬にさもさも懐かしいとばかり頬ずりすると、英治の耳元に口をつけて、

「ねえ、英治さん。あなたはもう屹度東京に好い人が出来たでせう。私、こんなお婆さんになって、本当にあなたの愛を受けること出来ないわね」

快感に昂ってくる息の下から、絶え絶えにささやいた。

「何ですって？ 僕の愛する女なんて

……、姉さん一人ですよ、一生、姉さん一人ですよ」

英治は女を固く抱きしめながらむきになって弁解した。お新はその様子が可愛いくてたまらぬと云ふやうに、息を切らせて頬ずりするのであった。

二

丁度その頃、同じ旅館の一室で、
「お春さん、あんたも一杯飲んだらどうだね」

そう云って持った盃をグツと干して給仕の女中のほうに差したのは、数日前からこの旅館の逗留客で、東京で工場を経営しているといふ吉田といふ男であつた。三十八、九に見える働き盛り、ガッシリした体のなかなか男らしい男振りである。

「わたし、頂けないんですよ、ほんとに……」

「まあ、一杯や二杯ぐらいいいだろう。酒は一人で飲んでもうまくないからね」

「では、一杯だけ……」

と、女中のお春は徳利を置いて盃を受けた。年の頃二十五、六、この辺り

の旅館には勿体ないぐらいの器量である。

「時に、お春さん、何か面白い事はな
いかねえ」

「面白い事って別に……、何しろこんな田舎の温泉ですもの」

「田舎の温泉宿だからかえって面白い事がありそうなものだがね」

と、吉田は朝食のお膳の鮎の塩焼きにちよつと箸をつけてまた盃をとった。

お膳の上にはもう二本の徳利が空になつていた。お春もすすめられるまま

つい四、五杯受けた酒が利いて何となく良い氣になつていた。

「そう、そう、面白い事があるわ。でも、悪いわねえ……」

と、お春はほんのり赤い顔をあげて笑つた。

「何だい、変に氣を持たせないで話してごらんよ」

「実はね、先程、一組のお客様がいらつしやつたのよ……、男と女のね。ときどきいらつしやるお客様なの。それがいいつも昼間から猛烈なのよ」

「何だね、その猛烈ってのは……」

「決まってるじゃありませんか。今日

もお風呂は後にすると云って、部屋に入ったきり出てこないわ。用事があったら呼ぶからそれまで部屋に来なくていいんですって……」

「——と云ふと、もう始ってるのかね」と男が盃を置いて思はず膝を乗りだした。

「勿論よ、きっと真最中だわ」

「へええ、妬けるねえ」

「ちよっと待って……」

お春は立ち上って部屋を出たが、暫くすると戻ってきて、

「お望み通り面白いものを見せてあげますから、黙ってわたしに従いていらっしやい——。でも、絶対に誰にも口外しないって約束よ」

と先に立って部屋を出た。吉田が後からついて行くと、お春は黙って二階の階段を昇って廊下を真直ぐ進み、突当りの曲り角の所で振り返ってシッと手振りて吉田の足音を制した。二人が足音を殺して更に廊下を進むと、一番端の部屋の入口に二足のスリッパが脱いであった。は、あ此処だな、と吉田が思はず立ち竦んだ時、お春はその手前の部屋の細目に開いている襖の間か

らソツと這入った。吉田が続いて這入ると、隣りの部屋との境の壁際に大きな踏台が置いてあった。さっきお春が忍びこんで置いたことが吉田に領けた。女は踏台に上って欄間の格子の間から隣りの部屋を覗いていたが、男の方を振り返って一緒に踏台に上るやうに目で命じた。

男は音をたてないやうに気を付けながら踏台の上に上り、後から女を抱くやうに並んで立って、女の肩越しに長押につかまった。そして、こわごわ隣りの部屋を覗いた瞬間に、アッと小声をたてて慌てて手で口を押えた。そして思はず生唾を呑み込んで目を据えた。

三

隣りの部屋から一組の男女が盗み見していやうとに夢にも知らないお新と英治——静かな温泉宿の一室で誰はばかりぬ情痴の世界を展開し、今や雲雨の境に我を忘れていた。

お新は真白い脛を男の太股に絡んで、男の背中を抱えて引きつけ引きつけ、段々早く腰を持上げてこすりつけた。英治もそれにつられてズブズブと大腰

に使った。解き展げた女の水色縮緬の腰巻が小波を立てて震えている。男の××は、もはやたまらないうに、グチャグチャした××の中でピチャピチャゴボゴボ音をたててはね返り、はね返り、跳りあがっているではないか——。すると、始めから気をやりかけていた女は、軽く苦悶に似た愉悦の叫び声をあげると、更に××の奥から、濃厚な熱い熱い粘液を出すのであった。同時に膣の周壁がジワジワと男の××に吸ひつくやうになってきた。男の首にまとひつけた女の両の腕に一層力が加はると、一際堅く抱きしめた。そして眉をしかめて一つ大きくすすりあげると、

「あ、あなた、×××××、××」

と絶へ入るばかりに悶へるのである。いま、女の雪の如く白く、見事に濃艶な太股は、男の腰に蛇のやうにまとひつき、互いに息をはづませて挑み合ふ状景は、あたかも錦絵の春画から抜けだしたやうであった。

見よ、男の偉大なる××の出し入れにつれて、彼女の牛肉がはみ出したやうな××にはミルクのやうな粘液が

ドロドロとあふれているではないか。そして、揺りあげ、ゆりあげしている腰の運動につれて男の××の付根までものみこむやうに烈しく両脚で締めつけるのであった。

女はもうたまらなくなったのであらう、堅く堅く男の首筋を抱き締めると、「あなた……もう……とても……」

と泣き声になって身をふるはせた。ヒスイのかんざしがバツタリ音をたてて畳の上に落ちた。

男も、いまはたまらなさうに額にしわをよせて、フウフウ云ひながら一心に××を働かせているのであったが、不意に泣声を出して、セイセイ息を昂ぶらせてフンフン額をしかめて喘いでいるお新の花のやうな唇をチュウチュウ吸いついた。そして、弾み切った彼の逸物を女の腰も抜けよとばかりに猛烈に奥深く突きたてつき下すのであった。ピチャピチャと高い音がひびく。やがて、女の唇から、絶へ入るやうなかなかなふるへ声が、ハア、と漏れると、××の奥から溢れるばかりの熱液を沸き立たせて、とうとう氣をやってしまった。男もすでに快樂の絶頂に

達していたので、先ほどから耐へていた×液を一時に××の奥へドクドクと充分に注ぎこんだのである。

快樂後の二人は、急にがっかりして相抱いたままセイセイ息をはづませていた。しばらくは物も云へなかったのであるが、お新はやがてパツチリ眼を開くと、男の顔を見あげながら、

「二月振りだったわね」

と云って微笑んだ。落着いた満足の表情が彼女の顔に見られた。

「そうでしたね、随分長い氣がしたけど……」

と応へた英治は、いきなり女の口に吸ひついた――。

*

*

吉田はいつのまにか後から片手でお春を抱きしめ、指先は思はず知らずお春の乳房を固く押へていた。

隣室の息詰るばかりの抱擁が終ると吉田はホッと解放されたやうにお春と顔を合わせた。お春の瞳が息苦しいまに掻き立てられた春情に燃えているのを見ると、吉田も激しい欲情に誘はれて、先程から硬くなっている××が

ズキズキと脈打った。

吉田が近づける唇をお春は黙って受けたまま動かなかった。吉田はお春の乳房を押へていた手を離して、前の合せ目から内股に手を差し込んだ。お春の内股が潤っているのので立ったままでも割れ目に指が這入った。吉田の指が割れ目をすべって穴の中へ這入ろうとすると、お春はその手を払いのけながら、

「踏台が倒れるわよ」

と吉田の耳元でささやいた。

吉田が踏台から先に下りるとお春も続いて下り、踏台を持って足音を忍ばせながら元きた廊下を帰った。

途中の物置部屋の前まで来ると、お春は戸を開けて踏台を仕舞いに中へ入って行った。吉田は突嗟に続いて飛びこんで戸を閉め、後からお春を抱きしめてそこに押し倒した。

「あら、いたづらを……」

と云ひながら、お春はもう吉田のなすがままに任せるのであった。

四

昼食が済むと、女中のお春はお新と

英治を家族風呂に案内した。そこは、崖の上に建てられた半洋風の建築で、二人の案内された浴室は特に奥まったところで、戸は内部から閉ざされるやうになっていた。取付きが三疊ほどの板の間で、乱れかごやら衣やら鏡台が程よく置かれた脱衣所で、仕切りの戸を開けて浴場に通じるのである。その戸にも錠が取付けてあった。

ここもまた二人だけの世界である。しきりに小鳥のさへずる声がする。彼らは戸に錠を下すと、裸になるまでまといつくやうにしてクスクス忍び笑ひながらお互ひに帯を解いたり浴衣を脱がせたり、猿股や腰巻をはずしてやつたりして、戯れるのであったが、全く裸になると、二人はいきなり抱きあった。英治の腕は女の脇の下から胸を抱いて背中からみ、お新の手は男の首にまといつき、豊満な美しい乳房は英治の胸に圧せられて、おだやかな波をうたせている。そして、顔を斜めに合せて口と口とを吸ひ合ふのであった。

英治の右手は、女の雪のやうな肌の一摘み黒い陰毛の下に押し込まれ、女の××を弄っている。なんといふ手触りの良きことよ。そこには吐淫がズルズルとぬらめき溢れているのである。女は眼を細くして鼻を鳴らしている。男の××も手杵ほどに硬直して、××は赤くふくれてテラテラ光っている。英治が立ったまま、女の脚の間に片足を入れると、彼女は心持ち脚をひろげて腰を下した。同時に英治の大きな××はズルズルと彼女の××へおし入れられた。そして、しばらくスウスウフンフン云ひながら男が下から突っこむやうに腰を上げると、女はそれを受けて揺りつづける……。英治が快味の絶頂に達せんとした時、女の腰がくずれてヨロヨロツとしたので気が散った。いまは気をやるつもりではなかったのに、静かに××を抜き出すと、二人は肩を組んで口を吸ひながら浴室に入った。

ここは三坪ほどの広さで、全部人造石の補装で出来ており、右手の崖に面した半窓の下が六尺に三尺くらいの湯槽になって、そこには透明な湯が満々とたたへられ湯気をあげて溢れている。屋根はすべて厚質のガラスで張りつめてあったから、実に明るすぎるほど明るかった。広くとった洗場は、花タイルで見事に装飾してあり、壁際には白磁の大きな洗面台が取付けられ、それには湯と水の二つの美しく磨きたてられた蛇口がついている。湯桶を下す台も備へてある。

二人が浴槽にかかって、中の湯を二、三杯浴びた時、英治は、「姉さん、僕に洗はせて下さい」と云って、お新の片足を風呂桶にかけさせて股をひろげさすと、桶にとった湯で女の××をザブザブと丹念に洗ってやるのであった。それがすむと、今度はお新が、「わたしも洗ってあげますわ」

英治は彼の勃起したままの威大なる逸物を女の眼前に突出したまま立っている。お新は浴槽の湯をタオルに浸して洗っているものであったが、突然、「英治さん、憎らしい……」

といふと、彼女は口を寄せて彼の逸物をくわへ、眼を細くして頬張るやうにして七、八度しごいていたが、それを離して、「さあ、早く入りませう」

二人は肩まで深々と温泉にひたり、殆んど同時に、

「ああ、いいお湯ですね」

と云った。

そして、彼らはすでに、そこで互ひ違ひに双方の陰部を弄っていた。しばらく二人はいろいろにして弄り戯れていたが、不意に英治は女を後から抱くと、容赦もなく後突きにやりだした。

「あら、英治さん、お湯の中じゃ、いやよ」

「姉さん、温泉の湯で奥まで洗ふと葉になりますよ」

気が変ってよかったのであらう。彼らの運動はますますはげしくなり、湯ははねるやうに波立って槽外に溢れる。しばらくして同時に気をやった。そしてガツカリと疲れた身体を夢のやうに相擁して浸っているのであったが、お新は湯の中に小さな糊のやうなものの浮遊しているのを見つけると、

「あら、英治さん、これ、あなただよ」

「僕のじゃありませんよ、それ、姉さんのだよ、沢山だしたじゃありませんか」

「知らないわ、悪い英ちゃん」

彼らがひとしきり温まって洗場へ上ったとき、英治は、

「さあ、僕が臥せますから、姉さん、上からして下さい」

と云ふと仰向けに寝た。彼の大××は龍の昇天する勢ひを見せて筋こぶ立って躍っている。

「何だか晴れがましいわ。あなたは私がお新は側へがたい興奮を感じたのであらう、急に耳根まで紅くさせて、直ぐに股を割って乗り上り、××をひろげて英治の勃へ切った大××を右手に持添へ、××の口へあてがふと、一気に腰を下して突入れた××の口を上下にチョコチョコと動かした。やがて存分にはめこむと、英治の上に這ひかかって抱きつき、口を吸ひ、そして余念もなく、高腰小腰に抜き差し、横によじらせて押つけたり、腰を落して揉んでみたり、いろいろにして娛しむのであった。英治もかうして扱はれるので、快美に耐へず、一物ますます勢ひを得、頬張るばかり膨れ上った××を、腰を浮かして突上げ突上げ調子を合せ、グチャリ、ゴボゴボと音を立てさせた。

かうした別天地のことであるから、彼らは何も急いで気をやる必要もないといふものの、女の膣孔はますます熱く、膣壁の内皺は胴の中を締めてまといつき、ぬらめき切った奥の方で××をカキツとくわへこみ、引きこむやうにしごくのもう耐らずいまにも行きさうになるのであった。お新はお新で男の一突き毎にグザグザと腹の底までえぐり立てられるので、その度毎にり上げ、夢中になって快がるのであった。すると、英治が、急に体に重味が加はると思ふ瞬間、お新はふるへ声を出して、

「英ちゃん、あれあれ、××××、フン」

と、いきなり彼の頬に吸ひついた。その刹那である。流石に締りのよかつた彼女の××も急に緩くなって、熱し切った××水がダクダクと下腹部一面に浴せかけられた。と殆んど同時であった、英治も取り外したやうに多量の精水を彼女の膣孔深くはじき込んだ。そして全裸体の男女は打重ったまま動かうともしない。男の苦しいやうな喘ぎと、女の啜り泣くやうな快りとが、こ

の人外境である浴室内の和らかな空気に微かな動きを与へているばかりである。

温泉の湯はとうとうと溢れていた。

二人が起上った時、英治は腹から股にかけて粘液の泡を立てていた。それから彼らはこの浴場で三時間以上もあらん限りの狂態を尽したのであった。

男女が洗場で、股を交叉し交接したなりの姿で、互いに相手の体に石けんを充分にぬりこくり、抱き合ったなりで男は女の背中を擦り、女は男の背を擦ったりした。石けんの泡は二人の擦れ合ふ腹と腹、肌と肌とに沸き立っていつか気持も遠くなり、男がそのまま仰向けになれば、女は片足を男の肩にかけて乗るかかり、××深くグサリ、グサリと行なつて思ひ切り氣をやつて後で真赤な顔をして、

「英ちゃん、今日は特別よ」
と云つて笑ふのであった。

五

二人が長い風呂からやっと上つて部屋へ帰ったので、女中のお春がお茶を運んで行った。襖へ手をかけて、御免

なさい、と声をかけやうとすると、中で二人の話し声がするので思はず耳をそばだてた。

「わたし、フラフラでもう動けないわ、今夜泊るわ。それに英治さんと会ったのは久し振りなんですもの……」

「僕もクタクタで腰も持上らないほどくたびれちゃったんだけど……。泊ると、姉さんは清吉さんに怒られやしないの」

「あんな人、わたし、夫とっていいから怒つたつて構はないわ。泊つてまた夜に思ひ切りやりませうね」

疲れ切つた二人が風呂から上るなり床の上に寝転んでゐる様子が襖の外のお春には目に見えるやうであつた。

「あッ、姉さん、駄目ですよ。さっきお風呂であんなに何度もやったんだからもう立ちませんよ」

「大丈夫、ほら、もうこんなに大きくなつてきたわ。わたし、舐めてあげるわ、わたしのも舐めてね」

「じゃア、舐めっこしませう、姉さん、僕の顔の上へお尻を上げて……」

つい襖の外で立聞きしてしまったお春は、入るに入れなくてお盆を持つ

たままそつと引き返し、階下の吉田の室を訪れた。吉田は宿の浴衣着から毛脛を出して、畳の上に長々と寝そべつて新聞を読んでいた。

「お茶をどうぞ」

とお春が枕許へお盆を置いて座ると、
「有りがとう」

と云ひながら吉田はお春の手をとつて引き寄せ、素早くキスした。

「このお茶ね、ほんとうはさっきの二人のところへ持つて行く筈だったのよ」

「おや、もう帰つたのかい」

「ところが違ふのよ。部屋へ入ろうとしたら、中で大変な事が起きちゃつて入れなくて帰つてきたのよ」

「驚いたね、また始めたのかい」

「そうなの、家族風呂の中で三時間も散々ふざけて、今あがつたばかりのところなんですよ、呆れたわ」

「まったくよく続くものだねえ」

「でも今度は少し違ふんですよ。あのね……、困つたわね、ちよつと云ひにくいだよ」

「何だい、また氣をもたせて……、こいつめ」

と吉田が腕を伸ばしてお春の太股を

つねった。

「あッ痛い、いいわ、もう云わないから……」

お春がツンとすねてみせると、
「ごめんごめん、あやまるから教へてくれ」

と吉田が大仰に手を合せた。

「あのね、二人で舐めっこしているらしいんですよ、お互いに反対向きになつて……」

「へえ、……」

と吉田は驚いた様子で起き上ったが、
「どれ、こんなふうにかい」

といきなりお春を仰向けに押し倒して、相手の着物の前をひろげて股の間に顔を突っ込んだ。

「あらッ、駄目よ」

と云ひながらお尻をモジモジ動かしていたお春は、

「そんなの止して……、ほんとにやつて……」

と息をはづませて喘ぎ出した。吉田は身を起すと女の両股をひろげて割り込み、烈しく腰を使って一気に氣をやってしまった。

女が起き上って着物の両前を繕ろひ

ながら、

「ひどい人……」

とにらむ真似をすると、

「お春さんがあんな話をするから、つい変な氣になったのさ。でも、昼間は落付かなくて氣分が出ないね。今夜、皆が寝てからそつと部屋へ入っておいで……、ゆっくり楽しもうよ」

「ええ、来るわね」

とお春が吉田の膝へ手を乗せた。吉田はその手をとって、

「げんまん……」

と小指と小指をからませながら、
「お春さん、もうあの二人の陰口を云ふのは止したほうがいいよ」

「あら、どうして？」

「だってそうじゃないか……」

吉田が意味ありげに笑ふと、お春は耳まで真赤にして、

「いやな吉田さん……」

と一緒に笑ひ出すのであった――。



艶色品定女

上の部の戀

春雨ふりつづきいとしめやかなる夜、つれ／＼を思ふ藤中將馬の守も侍らねば、手近き文ぐるまかひさぐりて古へのふみどもうちひらひ眺めゐるうちにいいたふたはぶれたる書なんありけり。是らは二のまちの戀ながら上つ方の閨のうちのたはぶれよりはをかしきふしもいと多くて、かの落葉の君指くひの物語などうちきく心地せられて興あるままにそこはかとなく書しるし侍りぬ。

扱て新枕のやりくりほどいたしおそろしくも、はづかしくも、うれしきことはまたあるまじ。初床或は水上又はあらばち、しやれてはあらなどと云ふはいづれも新枕のことにして、婚禮の家に石うちするは今宵あらを割といふ心とや、いづくも

同じならはしぞいとおかし。先づ新枕の床入前にはこしもとあまた折からの物語に夜ふけ行く頃、氣の通りたる女中早や御床とさしづあれば、皆々はひらきてそれ／＼の伏床に入る。こしもとやがて床とりしふとん二かさね大夜着よよぎ屏風引たて、側へにもしび細く今ぞむこぎみ花嫁さしむかひの床のうち、はづかしく嬉しきこと何に例へんかたなく、やがてめのとこしもと松と竹とを飾りたる三方に、白き米鯉など取そへしつほりと御契りなど知られてのたはむれごと、床盃に手間取り、心うちせかれてそこ／＼に仕舞へば、夫婦ともに夜着の中へ入れまいらせて、その身は次の間に様子を聞きゐるぞ浦山し。男もなにと云ひよらしたよりもなく如何はせんとおもひけるが、やや心を静め、誠に人も多き中に君と我このやうにいもせの中となる事深き縁にてぞあるらん。此上

はなにの恥かしきことかと抱き寄すれば、物をも云はずやう／＼帯はとかせたれど身をちぢめて如何ともせんかたなくなり行くに、枕元なるともし火を屏風の外へ出しくらくなして抱き付き、夫婦のことはじめよりゆく末のわけなど折ち物語れば少しくつろぐにうれしく、やがて上へのりかかり内股へそろりと手を入れいらへ見れば、むつくりとしてほそき毛のうす／＼とその心よさえも云はれず、つよく怒りし物につばき物しそとさしこみければ、ああいたやと乗り出しいつる拍子にはづれたる氣の毒さ、又抱きつきて玉ぐきもちそへ×へとくのぞませぬつと×際まで入れるに、女はいたみに堪えがたく乗りいでんとするを抱きとどめ、そろり／＼あいしらひ、やがて半ぬつとおし入るれば、のふ是はどうもなりませぬ、こよひは許させ給へ、あすの夜のことにしてといへど、今

このときにかんにんのなる物かはと、やがてと云ひかけそろそろとぬきさしすれば、ああしんきやせめて靜かに物してとあなたこなたへ身をもだへけり。男は而もすぐれたる一物なればすゐぶん氣永にそろり／＼とあいしらひ、一時ばかりかかりて終に根までとどかさころ、夜いたくふけ鳥の聲かすかに聞えければ、今宵の一饑さぞくるしからん次の夜は又格別の物ぞと云ひなぐさめぬ。

扱て行く川の渡と月日のうつるはとどまらぬものから、昨日今日と思ひし嫁入も早や二とせ三とせにゐまぐらの、その夜のものおもひに引かへてどふやら云はれぬよいこころ、うまひ味ひ覺えて日のくれるを待たび客の長嘶をにくみ夏の夜の短きを恨む。宵より臥して前後も知らぬ男をなぶり或はつめり、ある時はさすり起してまんまとそのわけになしすます程の大好きの女とぞなりける。

されば飛鳥川の淵瀬にかはる人のならひ、男の心
ほどたのまれぬ物はなし。この女房のこしもとに
いたる風流の女あり、而も情の通り者にて戀しり
なりければ、旦那この女にくどきかかりてかり初
になれけるが、打見たるよりすぐれたる肌やは一
儀ならびなき好ものにて、あなたよりをさへる程
の床のおかしさに男思ひしみていと可愛きもの
に思ひ、内儀はかねてかくと知りてしんろの焰を
もやしけるに、朋輩の女がささやきの告口いやま
しに火に薪を添ふる心ち、とやせんかくやせんと
思ひ給ふぞやるかたなき。頃しも秋の最中旦那は
宵の程を下屋敷の月にふかし歸りけるが、いたう
酔える様にもてなし奥の一間に打ち伏し、こしも
と着る物もてこよとかごとしていざなふ。されば
内儀は宵より悵氣に思ひ亂れ起もせず寝もせでう
つらく思ひるけるが、この様子をきき折から今

宵こそふたりの者からき恥を與へ腹るなんとさ
し足して障子のかげに立ぎけば、こしもとの聲し
てあれ又いたづらなこのわけを奥様の聞かしやん
したらと引きのくるを抱きしめ、奥様がしさいを
いはばさらりとお暇をやつて心安く契らん、奥
も主人われも同じ、よしなきことをいふ女やとい
ふより、座敷いとさうくしくさても早い旦那さ
ん、ああしんきやなふ、とてものことにその方を
と、そぞろに聲をふるはし後にはすゝり上げく
しめ泣きに泣き出れば上より強くものする拍子に
つぶくごほくと××の鳴る音、よそに聞くさ
へえも云れず一時ばかりに一儀すみて立出るを内
儀はやがて抱きとめ、たけりののしる聲に家内お
どろき目をさまし、先内儀をなだめ入りたりけり
かくてのちは内にてのいちや付きはむづかし。此
のうへは遠きかたにてたのしむことこそよけれど

大和めぐりと思ひ立ち家内のことは残る方なく手代どもに申付、その身は仕度とりぐにととのへにはかに旅だち給ひぬ。足さへ遊山の長旅なればいとどさへ聞さびしきに、内儀はすぐれたるすき人なり。世帯半分半分はそのことにうかれやりくりのみに打かかりける程に、夏の夜さへやすくは寝させず、冬は猶ひとつ夜着の内に起伏して、親の精進日より外に一儀のはづる事もなかりしに、この頃のひとり寝思ひの内にあかしくらし、ある夕は軒うつ雨にうちしめりて何となく物さびしかりければ、縁のきはにたたすみてそなたの方を見やるに、湯殿のかたにて男おんなのささやく聲かすかに聞ゆ。いぶかしくさしのぞき見れば、手代なりける。男据風呂へ入りけるが、せなかをながす下女に大きな一物をにぎらせてしのび笑ふ。内儀はよしがきの間より打ながめいたるが、

下ぢ大すけべいの事なれば、早×水わかかへりてやるせなけれど、ああよしなや、わけもない事と思ひしづめ歸りなんとすれど、かの一物なごり惜く見とれ浮かれうつつなき様なりしが、さすが人目のつつましくやがて立入り給ひにけり。その又の夜はつごもり近ければ、かけ金拂ひなどの事ききなん、帳面もてこよとて彼の手代を奥の間へよびて、入くみたる算用などいたく更くるまで聞給ひけるが、過し夕ぐれ見給ひたる一物の事思ひ出してかんにんならず、今一とめ見ばやと心うきたち手代がそばへ打より小聲になり、ちとそなたにたのみたいことがあるとあれば、手代承り何事にかと問まらすれば、この頃湯殿にて見たるそなたの物あまりに見事なればも一度見せて給はれと手代の股ぐらへ手を入れてかの一物をじつと握るに、手代はたまらず一物ぬつとおへ出でたるを内

儀のやはらかな手してしめつゆるめつ餘念なき様に、手代も今はこらへ袋の口を切り、やがてとつてかへし乗りかかり内儀の股さすり見れば、三十あまりの花ざかり臍の邊むつちりと肥油づきたる美しさ、その所まで手をやれば、いたうまち兼ねたると見えて、つらぬきとめぬ露の玉ぬれ／＼と流れてえも云はれず、一物ぬつとさしこむに此内儀大助平のそのうへに、この頃の獨寝に一物ゆかしき折なれば常の物にては事たらはぬを、今並ならぬ大物××のうちに満ちて堪がたく、人の聞くともしえ思ひ沈めず、聲をふるはしすゝり泣によがり給ふ。こしもとの女は障子の側まで薬を持ちてまゐりたれど、此一儀のづほ／＼くちや／＼となる音に恥しくも心よくて、物かけに立聞るる男はさかりのつはものなれば、深く淺く軽く強く勝負を長う手をつくしてはたらく程に、後にはう

めきいきまき齒ぎしりなどして、一時ばかりしたゝか氣をやり漸うもとの心地と成ける。

中品の戀

今は昔いづこの邊とたづねれば大江戸の邊り、二奉公人のはいはんとて姥とよばるる女あり。されば腰元中居下女に至るまでこの方をたのめばありつきの口いと早く、又主人方も限なく目見えさせ、御氣に入りたるをそれ／＼に召しかかへくる事、誠に自由に達するわけなりかし。時は彌生の出替り過ぎて春雨の軒の忍生にそほち打しめたる夕、何がしとやいふ男、彼の姥が元へ訪ね此間はさりともし久しう逢はなんだが、何事もないか何時も達者なかと問へば、ようこそお出で、先づそくさいでめでたや、お茶よ煙草よと立廻る奥の方に、年の頃三十ばかりの女のやせず太らず、むつ

ちりと櫻色に透き通る顔せ、つまはづれ尋常なる
がこなたを眺める尻目づかひに、どうも云へぬこ
ころあれば早や此男魂を半分飛してかの女の袖の
内にや入らんと、あやしき怎になづみ胸の中い
そがはしくなりもて行けば姥に向ひてささやき、
あれ奉公人衆かと問ふに、さればこそとよ、あの
様はさるお方に物ぬひしてござんしたが、今時若
い御しうのはやり病ひらうざいとやら、かたばち
とやらの下地じやと醫者衆の詞に驚き、親置へ
歸り養生して元氣を得、昨日のほらしやんした、
どこかよい所があらばやりましたいと云ふ。男聞
いて、さればこそ手前に物縫ふ人が入りてそなた
を頼みにきましたと云へば、是は幸のことなりと
喜ぶに、それならばあれへ参りて何かの談合しま
せうと、女の側へ行き、かうくしたわけでござ
るが奉公のつとめなりますかと問へば、なるほど

萬事たのみまゐらすると打笑みたる顔、かはゆら
しき物いひ、又あるべき物ならずと心うかれて、
家の作法給金の次第などまめやかに語れば、いよ
くつとむべき心に極まる。日がらもよければ必
ずく明日よりと云ひかはし、女の姿を見ればう
まさうなるおもさしのこまやかさ、その美しさに
日頃よりまめなる男なれば、がんにならず、や
がて女の手をとり近頃うちつけなることながら内
々その方の御事見初めまゐらせ忘るる暇もあらず
戀こがれしに、如何なる神の御引合せにや、今宵
この所にて逢ひ参らすこと深き縁にてあるらん、
露ばかりの情何か苦しからんとぬれかかれば、さ
て浮氣な人様や、よそに見る目もあるに退いて下
さんせとふり放す。浮氣とは情なし此日頃戀ひ慕
ひたまく御見参いとうれしく、かく物し候をさ
りとは氣の通らぬ人と抱きつけど、ア、いやら

しき事をと請け引かぬに男も詮方なくぞ在ける。

此の間に宿の姥も氣を通して出ちがへば、男は今も心安くかうした首尾の又ある物かはと、理不盡に抑伏せけるに先の言とちがひ、思ひの外にあなたよりもじつと抱きしめて、誠はわが方もさきから見まゐらせて何とやらにくからぬ御方と存じ、心も心ならず思へども、たのまれぬ殿達の心當座／＼の慰さみわざに浮名の立たん恥しさ、それ故色にも出し申さず、こなたも今はいな舟の嫌にてはなけれども思はせ振の言、男はいとどやる方なく言にもかくとのたまはで曲もなや弓矢八幡男冥利二世までと恐しく神かけていふに、女も心うちとけて、かうしたことを人に云ふて下さんすな、必ずやといふ言もふるへる様にて萌したると見えける程に、男うれしくやがて同じ枕にころび合ひて帯解きなどして肌と肌を合せたれば、その

和かき如何なる奥様といふも是にはいかで及ぶべき。その所には毛もなくかはこけとやらふつくりと打しめりたり氣味得も云はれず女男に對ひ此の頃やう／＼心地よくなりませしに、かかることをなさば又病のおもりもやせん、よしや露と消なん玉の緒も主さま故なら惜しからじと、そぞろ心に見ゆれば男も堪らず、唾を×口にねやしつけて×きわまですゝませるに、いたう待兼ねたると覺えてその所暖かに吸込む様なれば、半さし込て上下左右をあいしらふ。女は鼻息あらく目を細め、あしんきやとよがり出たるが、申しこな様は何ぞ藥をつけさんしたさうなといふ。男は聞て、こはめいわくかつてない事といへど、いやそれでも此様に好いこと終に覺えがござんせぬのう、是はどうもなりませぬとしがみ付き、今宵こそあれ明日は妾の事を忘れて思ひ出してもさしやんすまい物

を恥しやと云ふに、男何とて忘れませうと云へば
そんなら一期そはしやんするか、なる程く請文
くさがついたと忙しき中で約束堅うしながら根
までぐつと届かすに、女は堪えがたく腰をつかひ
足をちぢめ、人目も恥すそぞろに泣よがりけり。
男もさるつはものにて鎗さき弱らざりければ、一
物ぬきもやらでむし返し／＼ける程に其處は洪水
の如く流れ出で防ぐべき様もあらず、紙をつくし
湯具をかさね又取かかり、今度はわざと中へは入
れやらで××をこすり廻し、下ぬめりにぬめらす
る程に濡ひしきりに流れてわけもなきを、一度に
ずつとつばもとまでさし込んで、何が強さうのこ
となれば上よりひどく高腰にすつ／＼と突立て
るに、奥よりは湯の如き××どく／＼わき出てそ
こら邊は朝日にとくる雪解の如く、ぬる／＼と湯
具ももすもしほる斗り、女は堪兼ねしがみ付き

何と妾はにくうござんすかと息付せはしくいふに
何とてにくからう、可愛うてどうもならずと現心
にもみ立て／＼、初の程こそ邊もいへど後にはご
／＼となる音高く上より強く腰つかふ度毎に、
ぐわた／＼と動く障子の響凄じくも又心よくぞ有
りける。かくする間やや久しくありて漸く一儀す
み、互に溜息つきも止まず、汗のごひなどして休
みるける。此の男幸に女房もなければ彼の姥を仲
介に吉日を選び、祝言の壽さし合なしのやり繰ぞ
かし。

下らうの戀

縁はおかしな物ぢやよとのいな物といふは如何
にも戀の眞中より、いひ出せし言葉の露のぬれ深
き歌ぞかし。實にも都の人が江戸に妻を定め、播
磨の男が京にありつきて鍋尻焼す、佐賀と大阪の

者が夫婦になるなど、又はうつくしき女房の可愛らしきに阿呆堅氣の律義一遍の男がそひ、顔付きりつとして何處のむこにしても恥しからぬ才覺ある男に、見られぬ女がそひつきてしかと中よく子供數多産せをきて、夜の細工のうときともいはれぬあり。是を思へばとかく定まりたるえにしこそ恥しけれ。

此處に難波のある方に上手にはあらぬ大工ありその上怠け者にてありければ一年中を半遊び、獨身の悲しさに鷗立つ澤の秋の夕にはあらぬ、春も夏も獨り寂しく氣まま細工に折々の駒下駄、硯箱或は火炬やぐらを作りて世を渡るたつきとぞしけり。されば此男如何なる先世の因縁にや一物太く遅しくて終に根までの本意を遂たる事なく、たま／＼女に出合ひても雁際にてうちあかさせてそれより深くはいかなく思ひもよらず、殊に優れたる

好人にてありけれども、詮方なくて年月をやもめ住にて暮しけるぞわびしき。ある日家主殿よりつゞり普清の事に備はれ隣りの空屋にむしろ敷延べのみうちしけるが、口頃の道具なれば刃もなくてきのどくさ、青砥ひきよせかいづくばひて磨きかかるその折節、此の内に三十餘りの乳母の有けるが、その様いたく優しく夏の空のあつさ、日もすがら大工殿のいたはしやと、見舞ひに茶にても進ませせうと立ちやすらひけるが、大工覺えずも裾のまくれ上りたる隙間より例の大きな一物が見えて、のみ磨く拍子にぶらり／＼と動き出たる様世の常優れて見事なりければ、是に心うかれ歸るを忘れながめるるを大工尻目にかけて、扱は此女わが一物に思ひしみたるよと推しければ、あはれよい首尾や、今空屋に人目のせきも見えず、隙もあらばおし伏せんと思ひきざしける程に、かの物

大きに筋太く怒り出でて馬か人かとあやしく、われ乍ら恐しくおえきりたるこの勢、はり切るやうに覺えてかんにんならず、如何せんと案じ思ひしが、ふと思ひ付きて、若しお乳母どの、近頃慮外ながら帷びらの裾がほころびてござります。申兼ねたれどぬふて下されませと云へば、扱安き御事と懷より糸針など取出して立ち寄るを、物をも云はず手を取りてかの一物を握らせたれば、はてわつけもないと云ひながら、その心地よさに前後をわすれじつと握るに、男も便りよしと嬉しくやがて障子の蔭へ押し伏せ帯も解すにかいまくりあければ、人が見ませうにこれ悪いことばかり、ああしんきや退かしやんせとしのび聲にいひけれど、けには心もないな物は胸の中とけくとなりてやるせなく、ひた物持上げる。扱もこの乳母三十餘り色白くほつそりすはりの柳腰、髪少し縮みてその

味も思ひやらるる丈高からぬ小女房にてありければ何としてかはわが一物をうけんとてあぶなくあしらひ、ぬつとさし込むにそりや人音と驚き引ぬけば、にくや猫奴が戸にて爪とぐもおかしく、又とりかかりさし込めば悲しや人の走る音、これならすと起上れば已が羽風に驚きて心と騒ぐむら雀、今はよしや見付けられたらそれまでのわざくれよと、思ひ切つて、半ずつと押入れたる始の程は餘程きしみて女は顔をしかむる程なれどこの間にうるほひて流れ出る××のぬらくとなりてしつくりとよい加減どうもいはれず、乳母もこれ程なるものに終に出會し事なれば、そのよい氣味さ、何に例へん、日本國が臍の空へ集ちやうになれば、かみ付き吸付きなどして命限りにもみ合ふ時、今こそは誠の久七奴が大工どの齎めしと呼はれば、あの戀知らずよと恨むるもかひなく、その

わけ半ばに立ち別れ行く。

さりとに残り多き大工は、今の味忘れかね仕事も手につかず、うか／＼と思ひつづけて日を暮し星見る頃にやう／＼道具片よせ帯入なほし、もどりなんとする所、例のお乳母又來りてこの日のくるるに早うしまひはせいでと云ふも嬉しく手を取りて引き、やがて障子の蔭に押ころばし、障子をとらば人もや來んと心せかれ、何がなしに押伏せ唾たつぷりとねやしかけてぬつと入る。扱も此乳母おさなひを育てて五年の中、その生物の道絶えて通りたる事なく、かゆき様に思ひわぶ折から、晝の話に××はほか／＼と熱氣し取亂したるその所を、會釋もなくかの大一物にて無二無三に突立て／＼、男はこれ迄に根まで入れたる事なければ始めてのこの首尾、五體をしほるばかりに氣をやりぬ。實に小女房と小ふくろとは入れて見よと言

ひける古言も、此處に思ひ合せけり。




~~~~~有難い御札なのです~~~~~

毘

陀魔陪



以要祖路算八轉戒

天下阿手亭

数無陀裸尼



與今加



魔多於審羅好大黑店裏無主

宮居圖入勝見克好根學滴丘兒菩薩湯出阿



不許複製





一 夫れ女子は成長して他人の家へ行き舅姑に仕る者なれば、男子よりも親の教へ忽にすべからず、父母寵愛して恣に育ぬれば、夫の家に行ても、必ず氣隨にて、夫に疎まれ、又は舅の教正しければ、堪難く思ひ、舅を恨み誹り、中惡くなりて終には退出され、耻を曝す、女子の父母我が訓なき事を謂ずして、舅夫の惡きとのみ思ふは誤りなり、是れみな女子の親の教なき故なり、

一 女は容よりも心の勝れたるを善とすべし、心緒惡き女は、

心騒がしく、眼恐敷見出して人を怒り、言葉あらゝかに、物言さがなく、口きゝて人に先立ち人を恨嫉み、我身を誇り、人を誹り笑はれ、人に勝り顔なるは皆女の道に違へるなり、女は唯和ぎ順ふて真心に情ふかく靜なるを淑とす、

一 女子は稚時より男女の別ちを正しくして、假初にも戯れたる戲を見聞しむべからず、古への禮に男禮は席を同じくせず、衣裳をも同所に置ず、同じ所に浴せず、物を請取渡す事も手より手へ直にせず、夜行時は必ず燭を燈してゆくべし、他人は言に及ばず、夫婦兄弟にても別を正敷すべしとなり、今時の民家はこの様の法を知ずして、行儀を亂にして名を穢し、





親兄弟に辱をあたへ、一生身を  
徒にする者あり、口惜き事に  
あらずや、女は父母の命と媒妁  
とに非ざれば交らず、親しまず  
と、小學にも見へたり、縦令命  
を失ふとも、心を金石の如くに  
堅くして義を守るべし、  
一 婦人は夫の家を我家とする  
故に、唐土にては嫁を歸ぐと  
いふ、我家に歸ると云ことなり、  
縦令夫の家貧賤なりとも、夫を  
怨むべからず、天より我に與へ  
給へる家の貧きは、わが仕合の  
凶ゆゑ也と思ひ、一度嫁して  
は、その家を出ざるを女の道と  
する事、古へ聖人の教なり、若  
女の道に背き去るゝ時は、一生  
の恥なり、されば婦人に七去と  
て、惡き事七有り、一には舅  
姑に順はざる女は去べし、二

には子なき女は去べし、是れ妻  
を娶るは子孫相續の爲なればな  
り、然れども婦人の心正敷、行  
儀よくして妬心なくば、去ず  
に同姓の子を養ふべし、或は妾  
に子あらば妻に子なしとも去に  
及ず、三には淫亂なれば去る、  
四には格氣深ければ去る、五に  
は癩病などの惡き疾あれば去  
る、六には多言にて、慎なく、  
物いひ過るは親類の中惡くな  
り、家亂るゝものなれば去べし、  
七には物を盗む心あるはさる、  
この七去は皆聖人の教なり、女  
は一度嫁して其家を出されて  
は、縦令ふたゝび富貴なる夫に  
嫁すとも、女の道に違ひて大  
なる辱なり、  
一 女子は我家に在ては我父母  
にもつばら孝を行ふ理なり、さ





れども夫の家に行ては専ら舅  
姑を我親よりも重じて、厚く  
愛しみ敬ひ孝行を盡すべし、親  
の方を重じ舅の方を輕ずること  
勿れ舅姑の方の朝夕の見舞を  
缺くべからず、舅姑のかたの  
勤むべき業を怠るべからず、若  
舅姑の仰あらば慎み行ふて背  
くべからず、萬の事舅姑に問  
て其教に任すべし、舅姑もし  
我を憎み誹り給ふとも怒る勿  
れ、孝を盡し誠をもつて仕ゆれ  
ば、後は必ず中好なるものな  
り、  
一 婦人は別に主君なし、夫を  
主人と思ひ敬ひ、慎て事ふべし、  
輕しめ侮るべからず、總而婦人  
の道は人に從ふにあり、夫に對  
するに顔色詞づかひ慇懃に謙  
和順なるべし、不忍にし、不

順成べからず、奢て無禮成べか  
らず、是女の第一の勤なり、夫  
の教訓あらば其の仰を叛くべか  
らず、疑しきことは夫に問て  
その下知に隨ふべし、夫問ふ事  
あらば正敷答ふべし、其の返答  
疎なるは無禮なり、夫もし腹  
立怒る時は恐て順べし、怒り争  
ふて其心に逆ふべからず、女は  
夫をもつて天とす、返々も夫に  
逆らひて天の罰をうくべから  
ず、  
一 兄公女公は夫の兄弟なれば  
敬ふべし、夫の親類に誹られ憎  
まれるれば、舅姑のこゝろに背  
て、我身の爲にも宜しからず、  
睦敷すれば舅姑の心にもかな  
ふ、又娼を親みむつましくす  
べし、殊更夫の兄嫂は厚く敬  
ふべし、我兄弟と同じくすべし、





一 嫉妬の心努々發すべからず、男淫亂ならば諫むべし、怒怨むべからず、妬甚しければ其氣色言葉も恐敷冷じくして却て夫に疎れ見限らるゝものなり、夫不義過あらば、我色を和らげ聲を和にして諫むべし、諫めを聴ずして怒らば、先暫く止て後に夫の心和睦たる時復諫むべし、必らず氣色を荒くし聲を荒らげて夫に逆らひ背く事勿れ、

一 言葉を慎て多くすべからず、假にも人を誹偽をいふべからず、人の謗を聞くことあらば心に藏て人につたへ語るべからず、誹をいひ傳るより親類とも間惡敷なり家の内治まらず、一 女はのねに心遣してその身を堅く慎み護るべし、朝はは

やく起、夜は遅くいね、晝は寢ずして家の中の事に心を用ひ、縫縫裁績を怠るべからず、又茶酒など多くのむべからず、歌舞伎小唄淨瑠璃などの淫たる事を見聴べからず、宮寺などすべて人の多く集る所へ四十歳より内は餘りに行へからず、一 巫覡等の事に迷て神佛を汚し近づき猥に祈るべからず、只人間の勤めをよくする時は、禱らずとても神佛は守り給ふべし、

一 人の妻と成ては其家を能く保つべし、妻の行ひ悪く放埒なれば家を破る、萬事儉約にして費を爲すべからず、衣服飲食なども身の分限にしたがひ川て奢るなかれ、

一 若き時は夫の親類友達下部





等の若き男には打解けて物語近  
付べからず、男女の隔を固くす  
べし如何なる用ありとも若かき  
男に文など通はすべからず、  
一身の飾も衣裳の染いろ模様  
なども目にたゝぬやうにすべ  
し、身と衣服との穢れずして潔  
なるはよし、勝れて清らをつく  
し、人の目に立ほど成は惡し、  
只我が身に應じたるを用ゆべ  
し、  
一 我郷の親のかたに私し、  
夫の方の親類を次にすべから  
ず、正月節句などにも先づ夫の  
方を勤て、次にわが親のかたを  
勤むべし、夫の許さるには何  
方へも行べからず、私に人に饋  
ものすべからず、  
一 女は家親の家をば離ず、舅  
姑の跡を續ゆゑに、我親より

も舅姑を大切におもひ、孝行  
を爲べし、嫁して後は我親の家  
に行事も稀なるべし、況て他の  
家へは大概は使を遣して音問を  
なすべし、又我親郷の良ことを  
誇て讃がたるべからず、  
一 下部餘多めしつかふとも、  
萬の事自ら辛勞を忍て勤むるこ  
と女の作法なり、舅姑の爲に  
衣を縫ひ食を調へ、夫に仕て衣  
をたゝみ、蓆を掃、子を育、汚  
を洗ひ、常に家の内に居て猥に  
外へ出べからず、  
一 下女をつかふに心を用ゆべ  
し、言甲斐なき下臈は習し惡く  
して智惠なく心奸敷物言こと  
さがなし、夫の事舅姑小姑な  
ど我心に合ぬ事あれば猥りに讒  
聞せて其を却て主の爲と思へ  
り、婦人もし智惠なくして是を





信じては、必ず恨み出来やすし、  
元來夫の家はみな他人なれば  
恨み叛き恩愛を捨る事易し、構  
へて下女の詞を信じて大切なる  
舅姑小姑との親を薄くす  
べからず、若下女勝れて多言く  
て惡き者ならば、早く退出すべ  
し、個様の者は必ず親類の中を  
も言妨げ、家を亂す基となるも  
のなり、恐るべし、又卑き者を  
使には氣に合ざること多し、其  
を怒り罵りて止まざれば、せわ  
しく腹立こと多くして家の  
内静ならず、惡き事あらば折に  
いひ教て誤を直すべし、少の  
過は忍ていかるべからず、心  
の内には憐れみて外には行儀を  
固く訓へ怠らぬやうにつかふべ  
し、與へ恵むべきとあらば財を  
惜むべからず、但し我氣に入た

りとて用にも立ぬものに濫に與  
ふべからず、  
一凡そ婦人の心様の惡き疾  
は、和ぎ順はざると、怒り恨と、  
人を謗と、物妬と、智惠淺きと  
なり、此五の疾は十人に七八は  
必ずあり、是婦人の男に及ざる  
所なり、自ら願誠めて改め去  
るべし、中にも智惠の淺きゆゑ  
に五の疾もおこる、女は陰性な  
り、陰は夜にしくらし、故に女  
は男に比るに愚にて目前なる可  
然事をも知らず、又人の謗るべ  
き事をも辨へず、我夫我子の笑  
と成るべき事をも知らず、科も  
なき人を怨み、怒り、咀呪或は  
人を妬み憎みて我身獨立んとお  
もへど人に憎くまれ疎まれて皆  
我身の仇と成事を知らず、最は  
かなく淺猿し、子を育れども愛





に溺れて習せ悪しく、愚なる故  
に何事も我身を謙て夫に従ふ  
べし、古の法に女子を産ば三日  
床のしたに臥しむといへり、是  
も男は天に譬へ女は地に象る故  
に、萬の事に付ても夫を先立我  
身を後にし、我爲せる事に能き  
こと有とても誇心なく、亦惡  
き事有て人に云るとても諍ず  
してはやく過を改め、重て人  
に謂れざる様に我身を慎み、又  
人に侮られても腹立ち憤ること  
となく、能堪えて物を恐れ慎む  
べし、斯の如く心得なば夫婦の  
中自ら和ぎ、行末永く連そひ  
て家の内穩なるべし、  
右之條々稚時より能訓べし、  
又書付て折々讀しめ忘るゝとな  
からしめよ、今の世の人、女子  
に衣服道具等多く與へて姻婚せ

しむるよりも此條々を能く教ふ  
ること一生身を保つ寶なるべ  
し、古語に人能く百萬錢を出  
して女子を嫁せしむることを  
知て、十萬錢を出して子を教ふ  
ることを知らずと謂へり、寔なる  
かな、女子の親たる人此理を知  
らずんばあるべからず。





## 密 通

早川 千鶴子 作

(一)

男色はいつ頃からあつたか判然としないようだが、ものの本には弘法大師が唐国から帰朝した頃から、破戒僧が比丘にこのような戯れをしたそうだ——ともある。然し外国では紀元前からソドミー（男色）はあつたそうで、日本にも神代に、神々が男色を歛んだともあるが、男色の全盛は戦国時代から、徳川時代の時の老中越前守水野忠邦によつて男色の禁令が出た頃迄が頂天であつたようだ。

その後も風流人々の間には、祕かに男色を嗜んだものがつづいていて、昭和の今日に於てもこの道は後を絶たずにいて、上野界限から新宿、池袋、それに大阪の灘波界限、京都の新京極等に女装の麗人が出没している。



石浜利明は横浜の山下町で罐詰問屋を経営していて、本牧の海岸が一眺に展開されている高台に、豪荘な邸宅を構えている。

垣根添ひに木蘭が咲乱れている邸には、数人の少年が雇われていて、少年達は交替に主の石浜氏に仕えている程である。夫人は先年彼の行状に嫉妬の余り、

「貴方を憎みます」

一行の遺言を残して、離れの土蔵で首を釣つて自殺を計つたが、目的を果す寸前に良人の甥の松夫氏に発見されて助かつた。

失神から気がついた夫人に、

「バカな真似をしちやいけませんな。一体どうしたと言うんです」

女盛りの玲子の膨んだ胸を見下しながら訊ねた。

「松夫さん。あたしは侮辱されて、生きていくのは厭なのよ」

と、美しい白い顔を反向ける。

「それはまあ、わからないでもないが、自分の命を絶つなんて……淑父貴はまあいいとして



この僕が可哀想じやありませんか

と、玲子の白い顔を掌で挟む。玲子は一瞬ハッ！ となつたが、

「松夫さん。いけないわ、そんなこと……」

と、男の顔を覗込む。

「僕は前から玲子さんが好きだつたんだ。死んだつもりで僕の……僕のこの気持を……」

と、死化粧の紅い唇を吸う。玲子は思ひがけない松夫の告白に駭いて、

「な、何を似有るの。そんなこといけないわ」

拒んだが、

「あんな少年ばかり可愛がる淑父に、何も玲子さんが義理を立てることはないじやありませんか。それに玲子さんは、僕が今日居なかつたら今頃はもう死んでいる筈なんだから、僕のことを聞いて下さつたつて……ねえ、そうじやありませんか」

「そう仰有つても……女は男と違つて、そうはいかないわよ。ねえ。お願い。この手を離して、あたし困るわ」



抵抗しても無駄だった。一度、男に唇を許すと女はもう弱かった。男の顔が、襟を大きく  
拡げて、双の乳房に埋まっていた。ジーンと乳首が痺れて、生温い舌が乳首を吸っていた。  
「いけないわ。松夫さんは不良なんだわ」

怨じる玲子の体に、

「何を言われてもいい。前々から玲子さんが好きで仕様がなかつたんだから……」

熱い息で、乳首を離さずに、乱れ裾の奥に掌を進めて来た。その掌をびつたりと、ふとも  
もで抑えて、

「あア！松夫さん。本当に……本当に許して頂戴！困るわ。あたし、死んであげるから……」  
恨めしそうに言う。

「じゃ、死んだつもりで、大人しくしていればいい。僕はそうしたら、好きなことが何でも  
出来て、玲子さんのこの体を自由に愛撫出来るもの。さあ、死んだひとは、じつとしている  
もんだ」

と、ふとももに挟まれた指を、玲子の思つた反対の、肛門の方に進めて来た。不意を突か



れた玲子は、

「あら！ いやアよう。松夫さん！」

と、身悶える瞬間、お留守になつた前の方に、男の掌がびつたりと吸ひついた。

「意地悪！ 松夫さん、覚えていらつしやい」

怨じたが遅かつた。

男は女盛りの美事を膨らみに、一瞬、恍惚となつて、掌の感触に駭いた。

女の肉体の第一条件は、勿論、容貌であるが、絶世の美人でも、揃ひものが貧弱だと、男性に嫌われ易い。

小野小町は美人の代名詩であるが、この小野小町は女として道具が揃つていなかったのが悲劇の因であつた。少々位綺麗が劣つても、ふつくらとした盛上りと、いつまでも新鮮なじと、縮りがあれば、男に嫌われることは先づあるまい。

玲子は三十の峠にある。今が女盛りの肉体である。男の酸いも甘いも知り尽した年齢であつて、そろそろと道具にも、ヒビが入る頃とも言える。掌の感触で、女の道具の善し悪しが



判る松夫は、思ひがけない程、玲子の体が生娘のように荒れていないのを知つて駭いたのである。

瑞々しい果実から、新鮮な果汁が溢れるように、既に彼女の体は濡れていた。濡れた女は口では拒むが、体はそれを期待していることを彼は知つていて、

「そう怨まれちや、やりきれないな」

と、抑へた掌で悠つくりと、美事に膨んだ感触を味う。お水で指の動きが滑らかに動く。

「だつて、非道いわ、こんなことなすつちや……」

「いいじやありませんか。どうせ今頃は、あの世に行つてゐる体ですもの。僕がどうしようと、凝つとしていらしやればいい」

そう言われれば一言もなかつた。玲子は固くしていた体をやや緩めると、男の指は隙を与えずに責めて来る仕未。一本の指がくりくりした個所を、軽く翳つて来るのである。

男色を好む良人の利明と違つて、甥の松夫は女蕩しである。女の壺をちやんと抑えた指の動かし様に、



「あア　意地悪ね。知らないわ」

思わず溜息を突いた。溜息を吐く玲子の白い掌に、松夫は已れの硬直したものを握らせて「淑父はあんな悪遊びをしているんだ。何も気にすることはありませんよ。それにしても玲子さんは、いい体をしているんで、駭いちやつた」

と、乳首まで吸う仕末。

「あらー　あたしなんかもう駄目よ」

握つたものを軽くしでいて見た。見る見る固くなつて、火のように熱い。

「そんなことはない。こちらあたりは、まるで生娘のような感じですよ。むつちりと膨んできて好きだな。毛むじやらな女なんか余り好きじゃないんだ。玲子さんは割と薄くて、それにそう荒れていないもの」

「いやアな松夫さん」

「ふ、……。ねえ玲子さん。僕に一度、よく見せて下さいよ。見たいな、屹度、綺麗なんだらうな」



と、寝台の毛布を刎ね退ける

「あら！ 駄目よ。そんなおいたなすつちや……」

毛布を押えたが、一度、男が悪戯をする気になつた以上は、止めても無駄である。

(二)

死装飾の裾を大きく掀げた松夫は、大きな瞳孔で凝つと覗込みながら、指で、散々玩具にして遊び始めた。

「いやだわ。そんなおいたをなすつちや……。ねえ、もう勘忍して離して頂戴な」

男の指が動くたびに、玲子はブルブルと胴震ひをしながら訴えた。

「そう急ぐことはないでせう。またよく見てないんだから……」

と、今度は顔を埋めて来る仕末。玲子は男のお口には弱かつた。思わずウームと唸つて、

「駄目！ 駄目よ！ いけないわ。お口が、お口が穢れるじやありませんか」

男の顔をしつかとふとももで挟んで叫んだが、男は力ーパイに吸込んで、固くなつた個所を齒で噛む仕末。



玲子は反り身になつて、寝台のへりを掴んだ。女の体は男と違つて、深い谷間に急所が秘んでいる。余程の経験がない限り、深い谷間の急所を、口で責めるのは難しい。松夫はまるで、女の急所を、指で翳るように、一枚の舌を自由自在に動かしながら、歯で、きりきりと噛みつづけた。

良人からも時々こんな目に遭されることもあつたが、男色を好む良人は、女を喜ばすことは余り得手でない方であつた。肥満した良人は呼吸がつづかず、それに、女の弱点も余り知らないで、矢鱈に噛みつくばかりで、時々怪我をしたりしたが、松夫の場合はまるで違つていた。

一瞬、気の遠くなる思ひから　ハッ！　とわれに返つて、

「ねえ松夫さん、いいこととして上げるわ。とつちへいらつしやいな」

と男の下半身をくるツとたぐり寄せて、硬直したものを握ると、そのままお口に含んだ。濡れた塩っぱい味が、唾液で溶けていた。

人妻が良人の目を盗んで、秘かに耽る姦通程魅力の強いものはない。玲子は男の硬直した



ものを、充血するまで噛みつぶしている中に、梯子段に足音を感じた。

浩二少年の白い顔が、部屋を覗いていた。一瞬、玲子は戸迷ったが、わざと気付かぬ振りをして、松夫がしきりに吸っている個所を、少年が見易い様に向きを変えた。

浩二は梯子段から顔だけを覗かせて、二人のあられもない様子を、凝つと見詰めている様子。玲子は素知らぬ振をして、松夫の躰を上を誘った。

「松夫さん あたしもう駄目よ。ねエ、いらつしやいな」  
甘い声で囁いた。

松夫は梯子段のところから、浩二少年が覗いているとは露知らず、最初の中は拒んでいた玲子が可愛くてならず、齒できりきりと噛まれて、充血したものを、唾液で濡れた個所に当てがつて、ぐつと腰に力を入れた。

「あア！ 松夫さん！」

「玲子さん！」

ジーンと背筋が痺れ、骨まで蕩ける思ひで二人は、肌と肌をしつかと抱きしめた。泥沼に



ズルズルと引込まれ、そのまま、地獄に陥込む思ひだつた。

成熟しきつた女の肉が、莖胴に搦んで、中年男の官能を疼かせた。

「ああ、いいわ、もつと、もつと抱いて……」

盛上つた双の乳房が潰れる程である。

「ああ、いい気持……玲子さんは？」

「あたしも……このまま死んでもいいわ。」

「死なくてよかつたでせう？」

「ええ、バカだつたわ、いつまでもこうしていたい」

「僕も、永い間の願ひが叶つて、嬉しい」

「悪い松夫さん……あたしを狙つていたなんて、ちつとも知らなかつたわ」

膣み口を、針先でえぐるような、男の巧みな技巧に、玲子はわざと大袈裟にやがり声を上げた。

小さな声で、絶え絶えに、息を殺したり、荒い息を吐いてはきりきりと男の胴を抱締めて



思ひきり、腰を持上げては、左右にひねるたびに、

「玲子さん！ 玲子さん！」

と、男は生きたそらもなしに、しつかと抱締めて、これ以上は深くは無理なまでに、えぐつては、糊壺の中を搔廻す様に、くりくりと搔混ぜて来た。

道楽の仕放題で鍛えた男は、女より先に降参することは先ずなかつた。凝つと、女の表情を覗込みながら、しきりに訴えるすがり泣き声を聞きながら、ジワジワと、名外科医がメスを振るように、男は落着いて、動作をつづけていた。

例えその動作と技巧が、男のテクニクと判つていても、時間が経過すると、生身の女体は弱い。

「憎らしいわ。あたしにばかり……ねえ、それでも、それでも駄目なの」

負けまいと、括約筋をぐツと締めて、腰を思ひきり捻ると、男はもう弱かつた。

女の表情を覗込みながら、最期の止めの一撃を具れるつもり松夫は、

「う、うッ！」



と、眉根をしかめて、

「あア！ 玲子さん！

と、哀願する仕末。

「ふふふ。参った。ネ、落着いて、あたしを虐めたりして……本当に憎いつたらないわ。」

勝誇った玲子は、つづけて、括約筋を締めたまま、五六度、思ひきり腰を大きく使った。男の負けだつた。

奔流の勢ひで、熱湯の固りが、下腹深くに射出される小気味快さ。首根つ子を押えられた蛇のように、男の硬直したものが、つづけてビクビクツと脈打ちながら、お水が白いシートに流れ出した。

ガクツと躰が崩れて、淋漓たる玉の汗が、玲子の双の乳房を濡した。横暴な野獣性を帯びた男性も、一度、女に負けると、猫の様に柔順になるものだ。松夫はだらしなく、玲子の一糸も纏わない腹の上で、伸びていた。



(三)

浩二の白い顔が、音もなしにスウと消えて仕舞つた。

松夫が帰つた後、離れ座敷で洋服に着換えた玲子は、真つ紅に沈んでいく夕陽を見遣りながら、ベルを押した。顔をまともに向けないで、浩二が濡れ縁に白い掌を突いて、

「お呼びでございますか」

「こつちへお這入り……」

玲子は少年の白い顔を屹と睨んだ。

「は、はい」

少年はおどおどと、夫人の部屋に膝を進めた。京都から良人に見込まれて来た浩二は、高等学校に通わせて貰っていた。

「肩がこつて仕様がなのよ。ちつと、揉んで頂戴」

「はい」



「どうしたの、そう固くなつたりして……さあ、軽く肩を揉んでおくれ」

命じられた少年は、夫人の後に廻つて、立膝になつて、夫人の丸い肩に手をかけた。つい先刻、夫人と松夫の情痴現場を覗見した少年は、夫人の白いうなじにハッ！ となつた。

「お前、もうこのお邸に来て、半歳になるのね、どう？ 少しは横浜に馴れて来たの？」

「はい。やつと、独りで電車に乗れるようになりました」

「よかつたわね、この間、旦那はお前を何処に連れてつて呉れたの？」

「熱海の伊豆山という温泉でした」

「お前、一人きりだつたのかい？」

「はい」

「よかつたでせう？」

と、玲子はムラムラツと嫉妬を感じた。今日、自殺を計つたのも、元はといへば、この浩二少年が原因であつた。良人は玲子を振向かず、浩二を可愛がつているのが、腹に据え兼ねなかつた。少年は黙っていた。



「お前、先刻土蔵に来たわね」

玲子はずとめて冷静に訊ねた。浩二の手が一瞬止つた。

「は、はい、すみません」

「あたしはね、自殺をしようと思つたのよ。松夫さんに見られて、助けられて、ああなつたの」

「……………」

「ねえ、浩二さん、どうしてあたしが、自殺を計つたのかお前知っているかえ？」

「……………」

「それはね、うちのひとがお前だけを可愛がるから、思ひきつて、死んで呪つてやらうと思つたのさ」

「す、すみません」

「お前には何の罪もありやしないけれど、女のあたしの身になつて見ると、余りじゃないの考へてご覧なね。何処の世界に、男が男を可愛がるところがあるの」



「……………」

「浩二さん。一体、どんなことをして、うちのひとはお前を可愛がるの？」

「……………」

「言えないの？」

玲子はくるつと、浩二の方に向直つた。少年は俯向いて、

「奥さま、お、お許し下さい」

と、掌を突くのえ、

「それにお前は、先刻、松夫さんとあたしの現場を見たわね、あたしは許せないわ」

玲子は柳眉を逆立てて、少年の白い頬をピシツと殴つた。

「さあ、仰有い。うちのひとは、どんな風にお前を可愛がるか、それを仰有い！」

玲子は男色という生態を知らなかつた。男が男を愛撫する——考えても、不潔であつた。

「さあ、言えないことはないでせう？ それともあたしには言えないの？」

少年の手首を掴んで詰問し始めた。



「い、いいえ、そんなことは……」

「じゃ、仰有い、あたしは怒りはしないから、言つてご覧なさい」

「……………」

「あたしがこれ程言つても、……お前はあたしを馬鹿にしているのね」

玲子は悔やしさの余り、浩二の両頬に往復ピンタを張つて、

「さあ、お前が言えないなら、あたしはお前が言うまで、お前をここにふん縛つて置いて、お前が言うまで、虐めて上げるわ、いいこと……浩二さん、言わばお前は、あたしの敵なんだから、そのつもりで覚悟をおし」

玲子は女のように華奢な浩二少年を、思ひきり虐めて見たい腹であつた。押入れから紅のしごきを取出した玲子は、浩二を床の間を背に立たせると、衣紋掛を引寄せて、少年を裸身にして、衣紋掛を背負わせて、後手に縛つた。夫人に抵抗することも出来ず、浩二は玲子のなすままに体を任せた。

男とは思われない、真つ白い裸身であつた。



「お前はまるで女の子見たいな肌をしているのね、いやアな子だよ」

憎らしい程、真つ白い肌であつた。裸身で真直に立つた少年は、また、俗に言う皮かむりである。

玲子は憎々し気に、浩二のふとももや、臀部の辺りを、白い指で、きゅつきゅつと抓上げた。

「あア！　　ん！」

「何さ。お前がさつさと教えて呉れないからじやないか」  
睨んでおいて、

「お前、子供の癖に、もう大人並じやないの。」

玲子は皮の冠つたものを、邪慳にくるツと剝いた。薄い皮が小気味快げに剝かれて、真つ紅なものが露出し、見る見る、硬直し、脈を打つ仕末。玲子は思わず、体を熱くして、

「さあ、うちのひとが、どんな風に可愛がるか、お前が言うまで、虐めてやるから……」  
握つた掌を、そろそろと動かし始めた。



(四)

脂肪の乗切つた夫人の、柔軟な掌の感触が、浩二には、夢のようだった。

先刻、土蔵の中での情景がまさまさと、閉じた瞼の裏に映つて、ジーンと背筋が寒くなつて来る。

「奥さま、あア！ あア……」

夫人の柔い掌が、リズムカルに動く快感に浩二は生きたそらもなしに、

「奥さま、お、お許し下さい。」

哀願する。夫人の柔軟な掌は許さなかつた。

「だから仰有い、許して上げるから……」

「申します。申します。奥さま……」

「そう。それなら仰有い」

と、夫人はやつと掌を離れた。亢奮しきつたものが、痛い位硬直して、夫人は、このまま少年を降参させるには惜しかつた。先刻、松夫との満されなかつた夫人の体が、痺れる程疼



いて耐えきれない思ひである。

「さあ、何を考へているの、主人はどんな風に、お前を可愛がるの？」

「本当に奥さまはご存じないのですか？」

「知らないから、訊ねるんじゃないの」

浩二は思ひ切つて言つた。玲子は呆れて、

「まア！ 厭らしい！ 本当に厭らしいわ」

口惜しそうに言つた。

夕陽が深く傾いて、電燈が灯つた。

「申訳ありません。僕も、最初は駭いて逃げ帰らうと思つたことが、何回もありました。」

「ふうん それで、今は何とも思わないの」

「もう馴れて……それに旦那さまは、僕のも、お、奥さまがなさつたように、可愛がつて下さります」

「さう。厭だね」



と、呟いてから、

「そんなことが、男にはいいものかね」

男色の快さは、女にはわかるものでなかつた。玲子は浩二の体から紐を解いて、

「浩二さん、そのことはもういいわ 然し、先刻の松夫さんのことは黙っていて頂戴。」  
念を押してから、

「浩さん、またおズボンは駄目よ。先刻、松夫さんがしたでせう？ アレと同じことをして  
下さらなくつちや、帰さなくつてよ」

裸の少年の前で、スカートの両脚を大きく拡げて見せた。

「奥さま。本当にいいんですか？」

「ああ、いいわよ。お前が梯子段のところで覗いていたから、気が散つて、駄目だつたわ」  
脱いたままの夫人の、真つ白い、脂肪の乗切つたふとももが、浩二には尊いものと思われ、膝を突くと、血に飢えた狼のように、夫人のスカートを大きく捲上げて、顔を埋めた。  
「奥さま。お許し下さう」



びよこんと頭を下げると、咽喉が乾いたように、咽喉を鳴して、吸ひついた。

昔から、女は下賤の男を好む質がある。玲子は忠実に飼馴された下僕に、思ひきり悪戯される快感が何とも言へず、仰向けになつたまま、少年のなすまま、真ッ白いふとももを大きく拡げて、凝つと目を閉じた。

技巧も何も知らない一匹の犬のように、一枚の舌が戯れ、時々、固くなつた個所をきりきりと噛んだ。

「「あア！ 浩二さん！ いいわ、もつと、もつときつくして……」

謔言のように洩しつづける夫人に、少年は容赦もなしに、ローバイに、肉片をくわへて吸ひつづけた。

男はいつになつても処女を尊ぶように、女もやはり童貞に強い魅力を感じる。玲子は浩二少年の新鮮な魅力に、腰を宙に浮かして、

「もう駄目だわ、浩二さん、こつちへ……こつちへいらつしやいな」  
誘つた。硬直したものが、お水ですつかり濡れていた。



玲子は自分が上になつた。

ジーンと背筋が痺れ、下腹深くに、硬直したものが勢よく感じられた。産れて初めて感じる快感であつた。

全身の血潮が、怒濤のように浪を上げて、断崖で飛沫を上げ、下から突上げる勢ひに、玲子はくらくらツと目眩を感じて、

「あア！ 浩二さん！ もつと、もつと……」  
叫んだ。

成熟しきつた三十女の、逞しい腰が、円を画いて、くいくいと動きつづけた。

本牧海岸の夜景が、早春の夜空に、七彩のネオンの灯を投げ、チャツチャツの音楽が流れて来た。

浩二はやつと夫人から解放されて、フラフラと部屋に戻つた。

「お帰んなさい」

女中の千恵がニアニア笑つて、浩二の体を上から下まで舐めるように見廻した。



(五)

奸計とは知らず、男嫌ひで通つた千恵が、石浜利明に手錠めにされたのが二年前で、丁度二十二の夏であつた。

時々箱根の旅館に来て、二三泊しては帰る石浜氏と、その旅館の女中をしていた千恵は馴染であつた。貴重品をいつも預ることになつていて、千恵が石浜氏のを、貴重品預袋に入れたまま預つて、帳場に行く途中、やはり馴染客から廊下で、

「すまないがベニシリン軟膏はないかね、ひげを剃つててちよつと斬つたんだ」

言われて、手持のを貸すつもりで自分の部屋に戻つて、そのまま、石浜氏の貴重品袋を鏡台の上に忘れて仕舞つた。

石浜氏は時々部屋に現われては、女中達をからかつたりしていて、その時もふらつと女中部屋に顔を出したが、部屋には誰一人も居なかつた。帰らうとした石浜氏の視線に、先刻自分が千恵に渡した貴重品袋があつた。

「仕様のない奴だな。盗られたらどうするんだ」



袋を取つて、自室に戻つた石浜氏は、

「よし、一ツからかつてやらう」

茶目な悪戯を思ひついた。

千恵は短髪をして、いつもズボンを穿いて、男嫌ひで通つている。その男嫌ひな点が氣に  
いつた。

夕食前の暇を見て、千恵がふらツと這入つて來た。

スエターの胸が新鮮に眼んでいて、ズボンの腰廻りが丸く肉付いた。

ピチピチした若さが溢れていた。

「この頃、恋人でも出來たのと違うかな？めつきり色氣がついて來たようだな」

「厭な社長さん、あたし、男なんて大嫌ひ……」

美しい目で睨むのへ、

「男が嫌ひなことはなからう。どうだね、わしが千恵さんを一つ免倒見ようかな」

ニヤニヤ笑ひながら、思ひきり裸にして見たい衝動を覺えた。



「厭アなとつたわ。あたし社長さん見たいな浮気なひと、好きじゃないもの」

「ハハハハ。豪い嫌われたもんだな。」

ビチビチと跳ねるような、若い肢態がスエターとズボンの下にある。石浜氏は思出したように、

「ずまんが、先刻預けたもの、ちよつと持つて来て呉れんかな。出すものがあるんだ」  
言われた千恵は、ハッ！ と気付いて、

「あら！ 大変だわ。忘れたままよ」  
叫んで立上つた。

石浜氏が悪戯したとは知らない千恵が、真ッ青になつて戻つた。

「おい、どうしたんだ？」

「す、すみません。誰かに盗られたんです」

普段の元気さに似合わず、まるつきり元気がなかつた。

「盗られた？」



「ええ、お預して、あたし帳場に預けるのを忘れて、自分の部屋に置たまま、今まで気付かずになっていたの、あたし、どうしよう。お帳場に知られると、誠になつて仕舞うわ」

「それは困つたな」

「あんな大金、あたし弁償も出来ないし……本当に困つてしまつたわ。どうしよう」  
おろおろと訴える千恵が、可哀想だつたが石浜氏は、

「他の女中さんなら、弁償して貰うところなんだが、千恵さんのことだ、条件によつてはわしが諦めよう。どうだね、千恵さん」

十万円と言えば、女中の千恵にとつては大金である。

「申訳ありません。あたしに出来ることなら屹度何とか致しますか……」  
溺れる者、藁をも掴む思ひで、千恵は石浜氏に必死に哀願した。

「うん、然し、困つたな……言ひ難いわい」

わざと散らす様に言ひながら、自分の思う壺に誘込むのだつた。

「仰有つて下さいな。本当に、あたしに出来ることなら、厭とは申しませんわ」



「それはまあ、千恵さんに出来ることだが……屹度、厭とは言わんな」と、念を押した。千恵は男の腹の中を知る訳もなく、

「ええ、厭だなんて申しまんわ」

言ひきつた。

「そんなら言おうかな。千恵さんの、その体が欲しいんだ。」

「まア！」

「何だい。そんな顔をして……厭なら厭でもかまわん。一段、男が言ひ出したからにや、わしは絶対に後には退かんぞ」

石浜氏は隙を与えず、千恵の草奢な手首をむんず掴んだ。

「何も、そう考へることはないじやないか」

倒れる上半身を抱寄せた。

「あッ！ 社長さん！ そ、そればかりはどうか、お願い、許して頂戴！」

弱味があるので、思ひきり抵抗を見せること出来なかつた。旅館の女中をしていると、時



には、男から変な真似をされて、危い思ひに遭うこともあつて、逃出したりすることもあるが、今の場合は、絶対絶命の窮地であつた。

「許すも、許さぬもない。先刻は、何でも言うことを聞くと云つたじゃないか。さあ、誰か来ちやまずい。千恵さん、いいじやらう」

ズボンの簡易ホックが外れ、チャックに手をかけると、そのままズボンを膝の辺りまで引摺り下した。

覚悟をしたと見え、千恵は黙つて俯伏せになつて、パンティの剝がれるまま、ふとももばかりをきゆうと締めていた。

(六)

男嫌ひな女には、その原因が、肉体の欠陥にもあつたりする。俗に言う穴なし小町、時には發育不純の女——男嫌ひで通つてゐる千恵は、俗に言われるかわらけだつた。

「や！ いやよ。そんなところに手をやつたりしちや……」

びつたりとふとももを締めて、掌を入れさせまいと、必死に抵抗するのを、石浜はそれな



らば——と、手を肛門にやつた。不意を突かれて、反り身になるのへ、石浜氏は間拔を与へず、目的のところに手をやつて、

「あッ！」

思ひがけぬ捨ひものに、雀躍と胸を挑ませた。

「君は凄いい体をしているんだね。とりや、縁起がいら」

掌のひら一パイに盛上つた、スベスベした感触は何とも言へなかつた。

「知らない！ 社長さんの意地！」

羞恥で体を固くしている千恵に、

「怪我がないと言つて、君のような体のひとは、株屋さんだとか、わし達のような商売のひとは、大事にされるんだぜ」

そう言われて、千恵は初めて、自分の体に自信がついて、

「本当？ そのこと……」

「ああ、そうだとも……」



「あたしね、ずい分気にして、いろいろやつて見たわ、でも、皆インチキばかり……お金が出来たら、植毛術をやらうと思つていたのよ。その必要ないわね。もう……」

男の指が、そろそろと愛の泉を呼ぶかのように、動いて、ゆるやかにくりくりと揉む。千恵は、真つ昼間の、明るい部屋に横臥したまま、男はこわいものとはかし思つたのに、期待に反した。

半袖のセーターの胸を捻げて、男が乳首を弄ぶ心快さも、何とも言へなかつた。

十八九の小娘と違つて、二十二の娘盛りである千恵の白い肌は、もう、十分に女になりきつていた。少年を好む石浜氏も、時には新鮮な処女も魅力に富んでいて、捨て難いものがある。

一本の指で、処女の頑なな扉を開いて、泉を誘ひ出す面白味は、少年を抱いて、固くなつたものをきゆつと掴む——その爽快さには較ぶべくもないが、さつぱりした感じの脹らみの下の泉は、毛深い女には見られない魅惑があつて、それに、奸計で処女を姦すスリルは、金銭をはつて、水揚げをするのとは違つた味わいがあつた。



しつかりとすぼめていたふとももが、やや開いて、もじもじと腰を動かす千恵は、顔を半袖の露わな腕で秘して、

「ねエ社長さん、もういや！ そんなこと……せつないわ」と、小さな声で訴える。

「いいじゃないか。凝つとしていれや……」

渴いた泉から、お水が湧いて、指の動きが愈々滑らかになる。中年をとくに越した男にとつては、指一本で小娘を料理する位は雑作のないことで、くりくりした個所をそろそろと揉みつづけると、千恵は恥も外聞もあらばこそ、ぐつと腰を宙に浮して、

「そんな無理を仰有つたつて……ぬエ、お願い……暫く、凝つとして頂戴！ あア！ いや！ 意地悪！」

「はははは。仕様のない娘だ。そうふとももをすぼめちや……」

「アレ！」

「だから言わんこつちやない、大人しくしていりやいいんだよ」



と、指の働きをいよいよ激しくすれば、千恵は全身を火のように熱くして、石浜氏の掌のひらをびつしよりと濡す仕末。

容商売の旅館の女中を、そう永いこと止めて置く訳にもいかず、石浜氏は頃を見計つて千恵の体の上に乘しかかった。

真つ白い双のふとももを大きく掀げた千恵は、半袖のセーターの腕で顔を秘したまま、もう覚悟をしていた。

お水で濡れた扉は、貝のようにしつかりと締つていて、男色を好む石浜氏には、ややもの足りなかつたが、処女を女にする快感は何とも言へなかつた。

千恵が上半身を乗出すようにして、

「あッ！ い、痛いわ、痛いわ」

ひとしきり苦痛を訴えていたが、それもホンの僅かの間のこと、石浜氏の怒眼したものが、小気味快げに音を出して、スツポリと姿を消しては、又、脈動したものが姿を現わしたりした。



そのたびに千恵は生きたそらもなしに、浮言を云う仕末。やつと自分でも、腰で誂子をとることを覚えて、えぐるような動作のたびに、

「ヒ、ヒッ！」

と、絶え絶えに叫んだ。

廊下の方で、

「千恵さん！ 千恵さん！」

と、朋輩がしきりに呼び廻る声に、千恵はもうどうしていいやらわからず、やつと、石浜氏から解放されると、脱がされたズボンに真つ白い肢態を包んで、逃げるようにして部屋を出て行つたが、夜、夜具を敷く時に、石浜氏の貴重品袋を見つけた時の悔やしさはなかつた。

二年前の初夏の頃であつた。

出

七石浜氏の奸計とは知らず、女にされてからも、時々、石浜氏とは関係がつづいた。例え



奸計であつても、一度、男に体を許すと女は弱いものである。

言われるままに、それから石浜氏の女中となつたが、夫人の目を盗んでの嬖曳は思うようにならなかつた。

幸ひ夫人は東京の別宅の方に行かれることが多く、夫人が留守になれば、千恵は主人の部屋に泊れた。

食事の仕度を終えて、夫人の部屋に行つた千恵は、思わすハッ！と棒立ちとなつた。浩二少年と夫人の情痴場面である。

満されなかつた若い千恵の肉体が、一つの情景を目撃して、抑圧されたものが、堰を切つたように奔流の勢ひで流れ、その奔流の血潮を浩二少年の肉体に求めようとした。

見られたとは知らない浩二は、

「千恵姉さん、ことで何をしていたの」

ニヤニヤ笑う千恵を気味悪く見詰める。

「何もしていなかつたわ」



「じゃ、何か用？」

「そうね。用と言へば用事と言へるわ」

千恵は警戒する浩二に、

「浩二さん、あたし見ちやつたわよ」

「ええ？」

見る見る浩二の顔色が変わった。

「浩二さんは、先、奥さまのお部屋で何をしていたの？」

と、凝つと浩二の顔を眺める。

「チェ！ 見ちやつたのか。お姉さんもひとが悪いな」

「ふふふ。旦那さんに、あたし言ひつけるわよ。よくつて？」

「そ、そんな……」

「あら！ 困るの？ 言ひつけちや」

「お姉さんもひとが悪いな。ねエ、この間お姉さんが慾しがつていた、あの腕時計の上げる



よ、ねエ、それならいいだらう？」

浩二は必死になつて哀願する。

「駄目よ。そんなもの……」

「じゃ、どうしても、言ひつけるつもりかい？」

「そうよ。でも、条件によつては、黙つていてもいいわ」

「条件？」

「そうよ」

「条件で何さ。どうせ難しいことを言うんだらう」

浩二は千恵に告げ口されると、どんな結果になるか、考えただけでも怖しかった。中年男ならいざ知らず、十八の少年にとつては千恵の腹の中を察する訳にもいかず、千恵の美しい顔を見詰める。

「難しいと言へば、まあ、難しいこともないけれど……そのつもりになれば、何でもないことだわ」



「いやに、ややこしいんだね。お姉さん、何だい？ 条件で……」

千恵は上半身を浩二に任して、

「訳はないわよ。先刻、奥さまにしたと同じことを、あたしにもして下されば、それでいいわよ」

と、熱い視線を投げる。浩二はちよつと駭いて、

「ほ、本当？」

「そうよ。あんなところを見せた浩二さんに罪があつてよ」

と、千恵は白い指を伸す。

「疲れちやつたよ。そんなことなら聞くからさ。少し、休ませて呉れよ」

「駄目。待てないわ。ホラ、あたしこんなよ」

少年の手をスカートの下に持つていく。男はいきなり指に感じて、ハッ！ と駭く。

「チエツ！ お姉さんも凄いな」

疲れた浩二は、思わず亢奮にむらむらとなつて、浩二には張りのある千恵の体に、指を進



めた。

「あんた老成ているわね。誰に教わつたの？その指の使ひ方……」

思わずどろんとなつて、上半身を後手に支えて、真つ白いふとももを掀げる。

「浩二さん。おズボンを脱るといいわ。あたしが取て上げから」

と、白い手を伸して、脱いたズボンの下のをまさぐる。若い肉体は、疲れを知らぬかのよろに、ピンと硬直して来た。

「憎らしいわ。これで、奥さままたたんとお喜ばせしたのでせう」

と、きゆつとひねれば、

「あつ！ お姉さん。折れるじやないか」

と、悲鳴をあげる。

「これからは、奥さまとは駄目よ。あたしが承知しないから……これからはあたし独りつきり

……ねえ。わかつて……」

飢えていた千恵の体は、密のように蕩けて、



「あア、くすぐつたいわ。浩二さん！　もう、もう止めてエ！　お願い！」  
蚊のように身たくねらせて、

「ねエ。もう、もういいわ。とつちへいらつしやいな」

(V)

伊豆山の石浜氏の別荘には、真紅に咲乱れた海紅豆が盛りであつた。初島が正午の明るい陽を浴びて、鯨のように呼んでいる座敷に、真つ白いシーツの布団が敷かれ、カーテン越しに涼風が靡いて、

「この頃、浩二は少し痩せたようじやな」

禪一枚の石浜氏が、やはりパンツ一枚の浩二に、毛むじやらのふとももを揉ませている。

女と違つて、少年の指から感じる指圧に、石浜氏は陶然となつて、眼を閉じている。

「久しくで無沙汰をしていたが、浩二、揉んで貰つている中に、ホラ、こんなに、禪から顔を出しおつたわい」

と、少年の体を抱寄せる。



「旦那さま。病ひ上りのお体で、お毒ではご座いませんか」

浩二は主人の、老人とは思えない、逞しさにやや呆れながら、いつもの通り、白い掌で握つて、軽し手を動かし始める。

「何、これしきの病ひで……ああ、いい気味じや。浩二、もうちつと、きつく……」  
と、註文をする。

「これ位で、ようで座いますか」

「うん。その位……その位の強さが……」

男色の楽しさは、女の比ではない。男でなかつたら、男の弱点と急所は知らないもの。石浜氏は青年のように血を湧かして、大の字なりに仰向けになつて、膝のところに座つて、浩二に掌を伸した。

若い少年の体は、火のように燃えて、木のように固くなつてゐる。石浜氏がそれを握つて中腰に座り直すと、

「旦那さま。大丈夫でございますか？ そのお体で……」



と、病弱の主人の体を心配する。元々、頑健な石浜氏のこと、少々の病み上り位では堪えるものでない。

「心配するな。これ、この通りじや」

と、中腰になつた石浜氏に、腹這ひになつて、真つ白い臀部を見せる浩二の腰を、ぐつと抱寄せた。

健康な美少年の、固く締つた肉の、丸い臀部が処女のように固い。こくんと生唾を鳴して石浜氏は少年の肛門に、たつぷりと唾をかけた。

○ ○ ○

千恵は主人と浩二と三人で、数日前、退院した石浜とこの伊豆の別荘に来ている。熱海に買物に出て、浩二の好物の水蜜桃を買つて邸に戻つた。冠木門の耳戸を潜つた千恵は、庭の垣根に隣家のブルが昼寝をしているのを見て、ブルを追おうと香椿の咲乱れた畑に足を踏み入れた時、何気なしに、主人のお座敷を眺めて、

「あつ！」



棒立となつた。

主人と浩二の、あられもない情景が、八畳座敷の白いカーテン越しに展開されている。

「まア！ 何てことを……」

二十二の千恵は、男色ということを知らない。男と男が……考えても見なかつたことである。

亢奮した浩二のが、彼の復這ひになつた下腹で生きものの様にピンと硬直して、主人は少年の丸い腰に掌をかけて、時々道端で見受ける犬のように、しきりに腰を使っている仕末。

夢中になつて、黒い眸を輝かせていた千恵は、いきなりお座敷から、

「おい！ 千恵！ こつちに這入つて来ないか。そんなところで何をしている」

石浜氏に大声に呼ばれて、

「は、はい」

と、返事をした。浩二も羞恥の顔を向けている。すがた見に千恵のかい間見の姿が映つていたのだ。



呼ばれて。縁側に怖る怖る足を運ぶと、

「見られた以上、仕様がな。お前、浩二の相手をなさ」と、言われて、

「だつて、そ、そんな……」

と、躊躇するのを、

「いいから、わしの命令じゃ。さア、裸になんなさい」

浩二とはあれ以来、時々、密会をしている千恵は、言われるままにブラウスとスカートを脱いだ。

「そのおズローも脱らんけや……」

と、促す。

二十二の若い女の肉体は、正午の明るい光線で、脂肪の乗切つた艶を見せている。

「浩二。お前は千恵に、腹遣ひになつて貰つて、そう、そう言う具合に……ふふふ。どうじゃ。千恵の具合は……」



と、中年を越した石浜氏は大胆である。千恵の若い、脂肪の乗切つた体を浩二に抱かせて己れは、最前と同じことをつづける。

色の道は深い。

複雑であればある程、味があるもので、好色家の石浜氏は女を余り好まない。自分の若い女を、可愛がつている浩二に、思う存分にさせても悔ひなかつた。

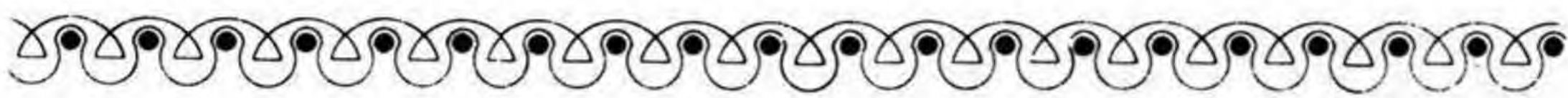
いくいくは、五月蠅い女房の玲子も、浩二に与へた方が、五月蠅いことを言わずに済むだらうと、そう考へながら、病み上りの体にジーンと染みる官能の疼きに、

「どうじや千恵。面白いじやらう。浩二は若い体だ。わしと違つてえろろ堪えるじやらう」と、からかえば、千恵はさも初めての様に、

「知りません。旦那さま。こんな思ひをさせて、お恨みに存じますわ」と、拗ねて見せる。

「ハツハハハ。そう怒るもんじやないぞ。浩二。千恵の奴を、思ひきり突きまくつてやれ！悲鳴を挙げるまでな」

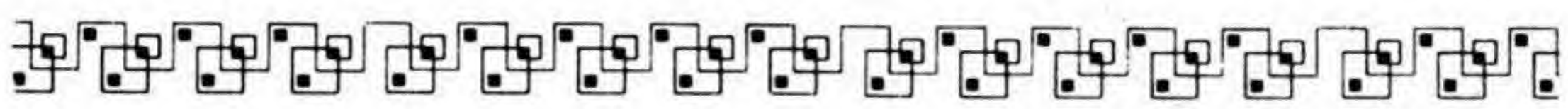




昼寝をしていた隣家のブルドックが、いつの間にか縁側に来て、室内で人間共が演じる不思議なさまに、

「ワン！ ワン！ ワン！」

終り





## 編集室ノート

今月号より内容を一新し、あらゆるジャンルのマニア諸氏に広く誌面を解放することになりました。旧誌にこだわりすぎていては、新誌発行の意義が失われると考えたからです。

今後は、SMはもちろんのこと、「性」に関するあらゆる分野を開拓、研究していくと思います。

今月の特集は、珍奇なコレクションと風俗文献資料の紹介です。次号にも埋もれた資料を紹介する予定ですが、いづれも庶民のウラ文化として貴重なものであるにもかかわらず消滅の運命にあるのは残念な気がします。

発足を予定している「ガラクタ・コレクションの会」、同好の士は是非ご参加を(H)

(直接購読のお申込みは、きたん社へ)

## 新人求む!

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品(小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など)を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真(水着またはヌードの立姿)と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

〒160 東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

(株)きたん社内

現代芸術研究会

